

中 切 上 野 遺 跡  
(第2分冊)

2024

岐阜県文化財保護センター







なか ぎり うわ の 遺 跡  
中 切 上 野 遺 跡  
(第2分冊)

2024

岐阜県文化財保護センター



## 目次(第2分冊)

第3章 調査の成果	1
第3節 縄文時代の遺構・遺物	1
第4節 弥生時代から古墳時代の遺構・遺物	116
第5節 古代の遺構・遺物	125
第6節 遺構外出土遺物	129
発掘区全域図分割図	163
遺構一覧表	186
遺物一覧表	221
第4章 自然科学分析	279
第1節 分析の概要	279
第2節 炭化材樹種同定	280
第3節 放射性炭素年代測定	283

### 第1分冊目次

第1章 調査の経緯	
第1節 調査に至る経緯	
第2節 調査の方法と経過	
第2章 遺跡の環境	
第1節 地理的環境	
第2節 歴史的環境	
第3節 過去の調査	
第3章 調査の成果	
第1節 遺跡の基本層序	
第2節 遺構・遺物の概要	
第3節 縄文時代の遺構と遺物	

報告書抄録

### 第3分冊目次

第5章 総括	
第1節 縄文時代の集落について	
第2節 中切上野5号古墳及び方形周溝墓(SZ1)について	
第3節 土地利用の変遷について	
引用・参考文献	
写真図版	

## 插图目次

图 217 S118 遗構図 (1) .....	2	图 252 S135 遺構図 (1) .....	40
图 218 S118 遺構図 (2) .....	3	图 253 S135 遺構図 (2) .....	41
图 219 S118 出土遺物 .....	4	图 254 S135 遺構図 (3) .....	42
图 220 S119 遺構図 (1) .....	6	图 255 S135 遺構図 (4) .....	43
图 221 S119 遺構図 (2) .....	7	图 256 S135 遺構図 (5) .....	44
图 222 S119 遺構図 (3) · 出土遺物 (1) ...	8	图 257 S135 遺構図 (6) · 出土遺物 (1) ...	45
图 223 S119 出土遺物 (2) .....	9	图 258 S135 出土遺物 (2) .....	46
图 224 S119 出土遺物 (3) .....	10	图 259 S135 出土遺物 (3) .....	47
图 225 S120 遺構図 (1) .....	11	图 260 S137 遺構図 (1) .....	48
图 226 S120 遺構図 (2) .....	12	图 261 S137 遺構図 (2) · 出土遺物 .....	49
图 227 S120 遺構図 (3) · 出土遺物 .....	13	图 262 S138 遺構図 (1) .....	50
图 228 S125 遺構図 (1) .....	15	图 263 S138 遺構図 (2) .....	51
图 229 S125 遺構図 (2) · 出土遺物 .....	16	图 264 S138 遺構図 (3) · 出土遺物 .....	52
图 230 S126 遺構図 (1) .....	17	图 265 S139 遺構図 (1) .....	54
图 231 S126 遺構図 (2) .....	18	图 266 S139 遺構図 (2) .....	55
图 232 S126 遺構図 (3) · 出土遺物 (1) ...	19	图 267 S139 遺構図 (3) · 出土遺物 .....	56
图 233 S126 出土遺物 (2) .....	20	图 268 S141 遺構図 (1) .....	57
图 234 S127 遺構図 (1) .....	21	图 269 S141 遺構図 (2) .....	58
图 235 S127 遺構図 (2) .....	22	图 270 S141 遺構図 (3) · 出土遺物 .....	60
图 236 S127 遺構図 (3) · 出土遺物 .....	24	图 271 S146 遺構図 (1) .....	61
图 237 S129 遺構図 (1) .....	25	图 272 S146 遺構図 (2) · 出土遺物 .....	62
图 238 S129 遺構図 (2) · 出土遺物 .....	26	图 273 S148 遺構図 (1) .....	64
图 239 S132 遺構図 (1) .....	27	图 274 S148 遺構図 (2) .....	65
图 240 S132 遺構図 (2) .....	28	图 275 S148 遺構図 (3) .....	66
图 241 S132 遺構図 (3) .....	29	图 276 S148 遺構図 (4) .....	67
图 242 S132 遺構図 (4) · 出土遺物 (1) ...	30	图 277 S148 遺構図 (5) .....	68
图 243 S132 遺構図 (5) · 出土遺物 (2) ...	31	图 278 S148 遺構図 (6) .....	69
图 244 S132 出土遺物 (3) .....	32	图 279 S148 出土遺物 (1) .....	70
图 245 S132 出土遺物 (4) .....	33	图 280 S148 出土遺物 (2) .....	71
图 246 S133 遺構図 (1) .....	34	图 281 S148 出土遺物 (3) .....	72
图 247 S133 遺構図 (2) .....	35	图 282 S150 遺構図 (1) .....	74
图 248 S133 遺構図 (3) .....	36	图 283 S150 遺構図 (2) .....	75
图 249 S133 出土遺物 .....	37	图 284 S150 遺構図 (3) .....	76
图 250 S134 遺構図 (1) .....	38	图 285 S150 遺構図 (4) .....	77
图 251 S134 遺構図 (2) · 出土遺物 .....	39	图 286 S150 遺構図 (5) .....	78

图 287	SI50 出土遗物 (1)	79	图 323	SK333 遗構図	126
图 288	SI50 出土遗物 (2)	80	图 324	SK334~SK336 遺構図	127
图 289	SI51 遺構図 (1)	81	图 325	SK333~SK336 出土遺物	128
图 290	SI51 遺構図 (2)	82	图 326	遺構外出土遺物 (1)	131
图 291	SI51 遺構図 (3)	83	图 327	遺構外出土遺物 (2)	132
图 292	SI51 遺構図 (4)	84	图 328	遺構外出土遺物 (3)	134
图 293	SI51 出土遺物	86	图 329	遺構外出土遺物 (4)	136
图 294	SI52 遺構図 (1)	87	图 330	遺構外出土遺物 (5)	137
图 295	SI52 遺構図 (2)	88	图 331	遺構外出土遺物 (6)	139
图 296	SI52 遺構図 (3)	89	图 332	遺構外出土遺物 (7)	140
图 297	SI52 遺構図 (4)	90	图 333	遺構外出土遺物 (8)	142
图 298	SI52 出土遺物	91	图 334	遺構外出土遺物 (9)	143
图 299	SJ3 遺構図・出土遺物	92	图 335	遺構外出土遺物 (10)	144
图 300	ST13・ST14・ST19・ST22 遺構図	94	图 336	遺構外出土遺物 (11)	145
图 301	ST24・ST32・ST34・ST35 遺構図	96	图 337	遺構外出土遺物 (12)	147
图 302	ST36・ST37・ST40・ST43 遺構図	98	图 338	遺構外出土遺物 (13)	148
图 303	ST 出土遺物 (1)	99	图 339	遺構外出土遺物 (14)	149
图 304	ST 出土遺物 (2)	100	图 340	遺構外出土遺物 (15)	150
图 305	ST 出土遺物 (3)	101	图 341	遺構外出土遺物 (16)	152
图 306	SK31・SK32・SK33 遺構図	103	图 342	遺構外出土遺物 (17)	153
图 307	SK259・SK422・SK582・SK584 遺構図	105	图 343	遺構外出土遺物 (18)	155
图 308	SK605・SK612 遺構図	106	图 344	遺構外出土遺物 (19)	156
图 309	SK614・SK615・SK620・SK628・SK638 遺構図	110	图 345	遺構外出土遺物 (20)	157
图 310	SK642・SK675・SK701・SK705 遺構図	111	图 346	遺構外出土遺物 (21)	158
图 311	SK716・SK717・SK718・SK719 遺構図	113	图 347	遺構外出土遺物 (22)	159
图 312	SK 出土遺物 (1)	114	图 348	遺構外出土遺物 (23)	160
图 313	SK 出土遺物 (2)	115	图 349	遺構外出土遺物 (24)	161
图 314	ST15 遺構図	116	图 350	遺構外出土遺物 (25)	162
图 315	ST15 出土遺物	117	图 351	発掘区全域図 割付図	163
图 316	SZ1 遺構図 (1)	118	图 352	発掘区全域図 分割図 (1)	164
图 317	SZ1 遺構図 (2)	119	图 353	発掘区全域図 分割図 (2)	165
图 318	SZ1 出土遺物	120	图 354	発掘区全域図 分割図 (3)	166
图 319	5号古墳 (SZ2) 遺構図 (1)	121	图 355	発掘区全域図 分割図 (4)	167
图 320	5号古墳 (SZ2) 遺構図 (2)	122	图 356	発掘区全域図 分割図 (5)	168
图 321	5号古墳 (SZ2) 遺構図 (3)	123	图 357	発掘区全域図 分割図 (6)	169
图 322	ST29 遺構図・出土遺物	124	图 358	発掘区全域図 分割図 (7)	170
			图 359	発掘区全域図 分割図 (8)	171

図 360	発掘区全域図	分割図 (9)	172
図 361	発掘区全域図	分割図 (10)	173
図 362	発掘区全域図	分割図 (11)	174
図 363	発掘区全域図	分割図 (12)	175
図 364	発掘区全域図	分割図 (13)	176
図 365	発掘区全域図	分割図 (14)	177
図 366	発掘区全域図	分割図 (15)	178
図 367	発掘区全域図	分割図 (16)	179
図 368	発掘区全域図	分割図 (17)	180

図 369	発掘区全域図	分割図 (18)	181
図 370	発掘区全域図	分割図 (19)	182
図 371	発掘区全域図	分割図 (20)	183
図 372	発掘区全域図	分割図 (21)	184
図 373	発掘区全域図	分割図 (22)	185
図 374	中切上野遺跡出土炭化材の走査型電子顕微鏡写真		281
図 375	暦年較正結果		284

## 表目次

表 7	竪穴建物一覧表	186
表 8	竪穴建物内柱穴等一覧表 (1)	187
表 9	竪穴建物内柱穴等一覧表 (2)	188
表 10	竪穴建物内柱穴等一覧表 (3)	189
表 11	竪穴建物内柱穴等一覧表 (4)	190
表 12	竪穴建物内柱穴等一覧表 (5)	191
表 13	竪穴建物内柱穴等一覧表 (6)	192
表 14	竪穴建物内柱穴等一覧表 (7)	193
表 15	竪穴建物内柱穴等一覧表 (8)	194
表 16	竪穴建物内柱穴等一覧表 (9)	195
表 17	竪穴建物内柱穴等一覧表 (10)	196
表 18	竪穴建物内柱穴等一覧表 (11)	197
表 19	竪穴建物内柱穴等一覧表 (12)	198
表 20	竪穴建物内柱穴等一覧表 (13)	199
表 21	竪穴建物内柱穴等一覧表 (14)	200
表 22	竪穴建物内柱穴等一覧表 (15)	201
表 23	竪穴建物内柱穴等一覧表 (16)	202
表 24	竪穴建物内柱穴等一覧表 (17)	203
表 25	竪穴建物内炉一覧表	204
表 26	土器埋設遺構一覧表	204
表 27	墳墓・方形周溝墓一覧表	205
表 28	墳墓・方形周溝墓付属遺構一覧表	205
表 29	土坑墓一覧表	205
表 30	土坑一覧表 (1)	206
表 31	土坑一覧表 (2)	207

表 32	土坑一覧表 (3)	208
表 33	土坑一覧表 (4)	209
表 34	土坑一覧表 (5)	210
表 35	土坑一覧表 (6)	211
表 36	土坑一覧表 (7)	212
表 37	土坑一覧表 (8)	213
表 38	土坑一覧表 (9)	214
表 39	土坑一覧表 (10)	215
表 40	土坑一覧表 (11)	216
表 41	単独柱穴一覧表 (1)	216
表 42	単独柱穴一覧表 (2)	217
表 43	単独柱穴一覧表 (3)	218
表 44	単独柱穴一覧表 (4)	219
表 45	単独柱穴一覧表 (5)	220
表 46	溝状遺構一覧表	220
表 47	配石遺構一覧表	220
表 48	倒木痕一覧表	220
表 49	縄文土器観察表 (1)	221
表 50	縄文土器観察表 (2)	222
表 51	縄文土器観察表 (3)	223
表 52	縄文土器観察表 (4)	224
表 53	縄文土器観察表 (5)	225
表 54	縄文土器観察表 (6)	226
表 55	縄文土器観察表 (7)	227
表 56	縄文土器観察表 (8)	228

表 57	縄文土器観察表 (9)	229	表 91	縄文土器観察表 (43)	263
表 58	縄文土器観察表 (10)	230	表 92	縄文土器観察表 (44)	264
表 59	縄文土器観察表 (11)	231	表 93	縄文土器観察表 (45)	265
表 60	縄文土器観察表 (12)	232	表 94	縄文土器観察表 (46)	266
表 61	縄文土器観察表 (13)	233	表 95	縄文土器観察表 (47)	267
表 62	縄文土器観察表 (14)	234	表 96	縄文土器観察表 (48)	268
表 63	縄文土器観察表 (15)	235	表 97	縄文土器観察表 (49)	269
表 64	縄文土器観察表 (16)	236	表 98	弥生土器・土師器・須恵器観察表	270
表 65	縄文土器観察表 (17)	237	表 99	灰釉陶器観察表 (1)	270
表 66	縄文土器観察表 (18)	238	表 100	灰釉陶器観察表 (2)	271
表 67	縄文土器観察表 (19)	239	表 101	土製品観察表	271
表 68	縄文土器観察表 (20)	240	表 102	石鏃観察表	272
表 69	縄文土器観察表 (21)	241	表 103	石鏃観察表	272
表 70	縄文土器観察表 (22)	242	表 104	石匙観察表 (1)	272
表 71	縄文土器観察表 (23)	243	表 105	石匙観察表 (2)	273
表 72	縄文土器観察表 (24)	244	表 106	スクレイパー観察表 (1)	273
表 73	縄文土器観察表 (25)	245	表 107	スクレイパー観察表 (2)	274
表 74	縄文土器観察表 (26)	246	表 108	楔形石器観察表	274
表 75	縄文土器観察表 (27)	247	表 109	打製石斧観察表	274
表 76	縄文土器観察表 (28)	248	表 110	磨製石斧観察表 (1)	274
表 77	縄文土器観察表 (29)	249	表 111	磨製石斧観察表 (2)	275
表 78	縄文土器観察表 (30)	250	表 112	石核観察表	275
表 79	縄文土器観察表 (31)	251	表 113	打欠石鏃観察表	275
表 80	縄文土器観察表 (32)	252	表 114	磨石・蔽石類観察表 (1)	275
表 81	縄文土器観察表 (33)	253	表 115	磨石・蔽石類観察表 (2)	276
表 82	縄文土器観察表 (34)	254	表 116	磨石・蔽石類観察表 (3)	277
表 83	縄文土器観察表 (35)	255	表 117	石皿・台石観察表	277
表 84	縄文土器観察表 (36)	256	表 118	砥石観察表	278
表 85	縄文土器観察表 (37)	257	表 119	石製品観察表	278
表 86	縄文土器観察表 (38)	258	表 120	金属製品観察表	278
表 87	縄文土器観察表 (39)	259	表 121	中切上野遺跡の樹種同定結果一覧	280
表 88	縄文土器観察表 (40)	260	表 122	測定試料及び処理	283
表 89	縄文土器観察表 (41)	261	表 123	放射性炭素年代測定及び暦年校正の結果	283
表 90	縄文土器観察表 (42)	262			



### 3 縄文時代中期の遺構

竪穴建物 20 軒、土器埋設遺構 1 基、土坑墓 12 基、土坑 89 基、単独柱穴 7 基を確認した。

#### (1) 竪穴建物

##### SI18 (図 217～図 219)

**検出状況** AJ13～AK14 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SZ1 の周溝と重複関係があり、SZ1 よりも古い。また、南西側で SI23、北東側で SI17 と重複関係にあるが、切り合いが不明瞭であった。検出時に SI18 の埋土が SI17・SI23 に切られると判断し掘削したが、SI17・SI23 はともに前期後半の土器が多く出土し、地床炉を持つ前期後葉の竪穴建物であるため、先後関係が誤りであると判断した。平面形は掘方北側に突起状の膨らみをもつが、壁際溝が直線的であることから方形と考える。

**埋土** 暗褐色土が 9 層堆積する。8 層は垂角礫を多く含む。2 層は褐色土ブロックと炭化物、1 層・3 層・4 層・6 層・9 層は褐色土ブロック、3 層・8 層は垂角礫を含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込む。壁面はやや開く。壁の残存高は最大で 0.78m である。

**床面** ほぼ平滑で、南西方向に傾斜する。貼床 (10 層) 壁際溝の内側に残り、褐色土で固くしまる。床面で検出した遺構は炉 1 基、土坑 9 基、壁際溝 4 条である。P1・P4 で柱痕跡を確認した。竪穴内の位置関係から P1～P4 を主柱穴と判断した。壁際溝は竪穴掘方の北辺と東辺と南辺で確認した。

**炉** 建物中央部やや北寄り検出した。方形の浅い掘り込みの北辺・東辺・西辺に長楕円礫を置く。南辺に礫はなかった。北辺と西辺の川原石の内側は熱により赤変していた。埋土は暗褐色土・黒褐色・褐色土が 5 層堆積する。1 層は炉石が抜き取られた後に堆積した層で、本来は四辺に炉石があったと考えられる。4 層は熱により赤変した基盤層及び 5 層、5 層は炉石を固定するための掘方埋土である。

**埋壙** 埋壙は確認できなかったが、P7 が「入口土坑」と思われる。

**遺物出土状況** 埋土中から縄文土器・石器が散在した状況で出土した。時期を特定できる土器は前期中葉から前期後葉と中期中葉から中期後葉である。

**出土遺物** 657・658 は C 群 1 a 3 類で口唇部の外面にある小突起から縦に隆帯を貼り付ける。半截竹管状施工具による隆帯と平行する沈線を施す。657・658 は接合関係がないものの、胎土や器厚や文様が類似することから同一個体の可能性がある。659 は C 群 1 b 2 類で口縁は波状になる。外面に口縁に沿う隆帯を貼り付ける。棒状施工具による刻みを入れる。底部外面に縄文が認められる。660 は C 群 1 c 2 類の橋状把手である。外面に棒状施工具による沈線や刺突を施す。661 は C 群 2 a 類で外面に横方向の隆帯を 1 条貼り付ける。隆帯の上方に半截竹管状施工具による刺突、下方に半截竹管状施工具による平行沈線を施す。662 は C 群 3 b 3 類で外面に太く浅い半隆起線を施す。横方向の半隆起線にヘラ状施工具による刻みを入れる。663・664 は C 群 3 b 2 類である。663 は外面に隆帯を施し、隆帯上にヘラ状施工具による刻みを入れる。664 は外面に隆帯を施し、横方向の隆帯上にヘラ状施工具による刻みを入れる。隆帯と隆帯の間は半截竹管状施工具による平行沈線を施す。665 は石匙である。縦長の剥片を素材とし、下辺に裏面からの連続剥離により直線的な刃部を作り出す。666・667 は短冊形の打製石斧である。666 は横長の剥片を素材とし、表裏面からの剥離調整で全体を整える。左側辺はやや丸みを持つ。667 は横長の剥片を素材とし、表裏面からの剥離調整で全体を整える。基部の幅が刃部と比べやや狭い。668 は打欠石錘である。扁平円礫を利用し、長軸両端を剥離することで袂りを入れる。

**時期** 出土遺物から中期後葉の竪穴建物と判断した。

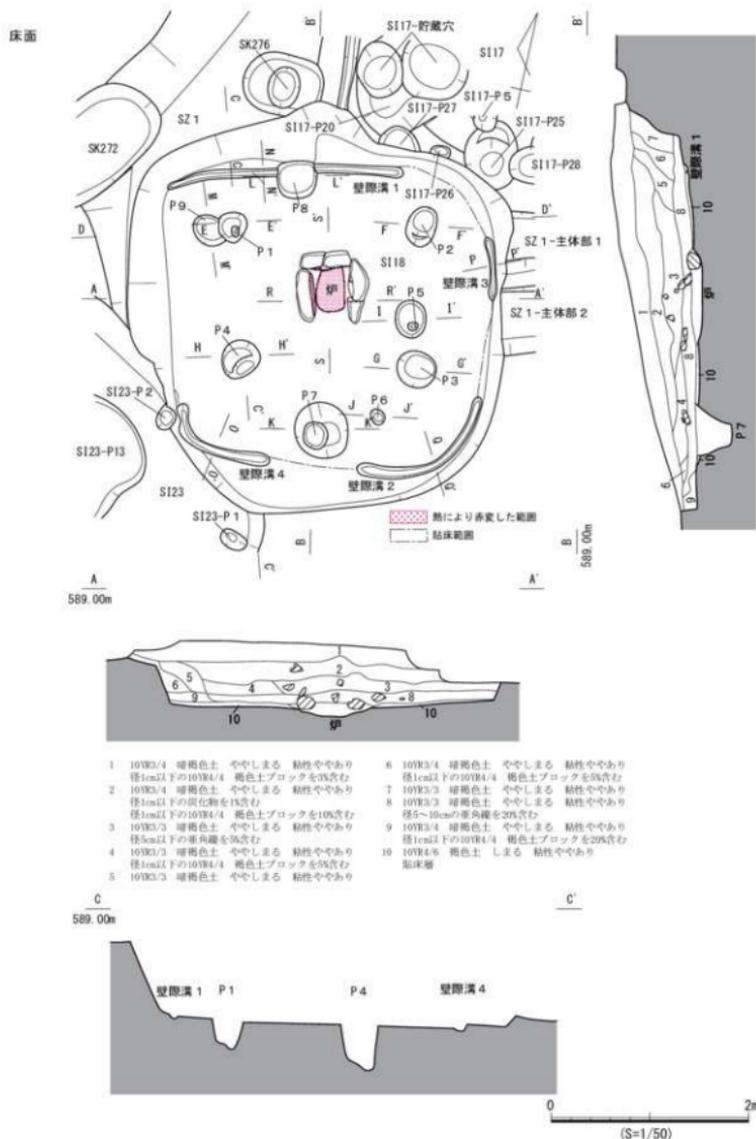


図 217 S118 遺構図 (1)

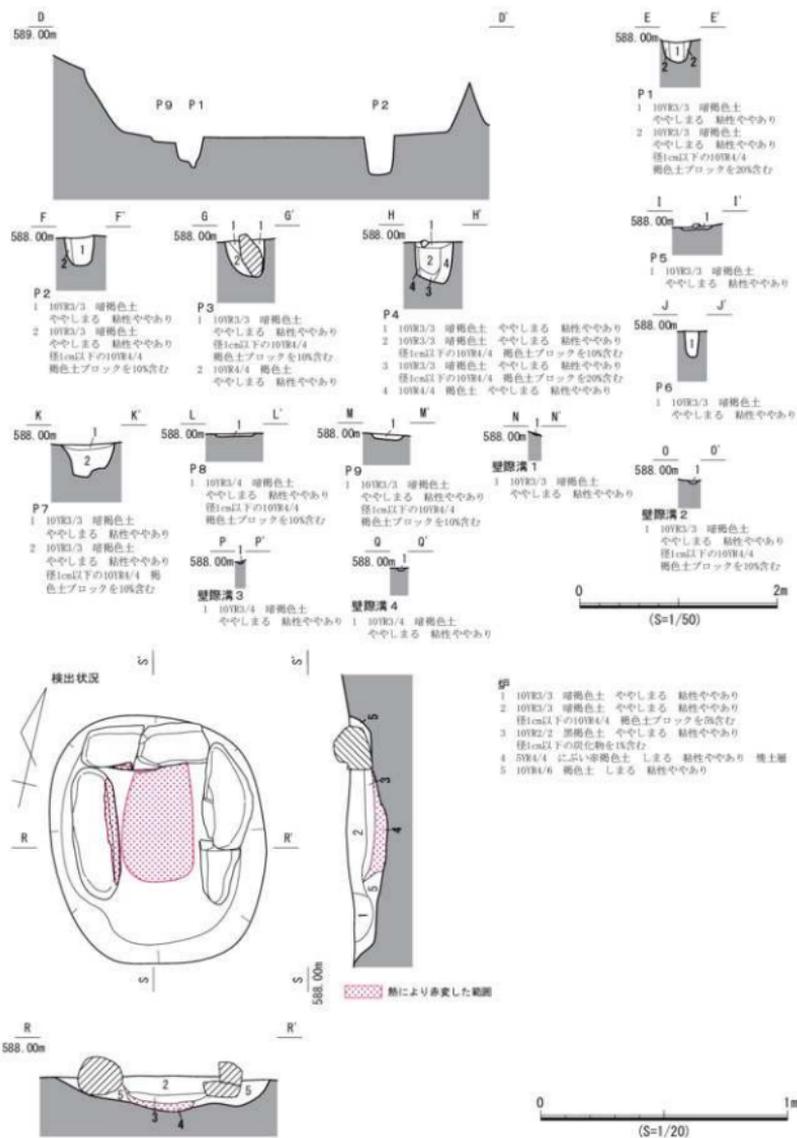


図 218 SI18 遺構図 (2)

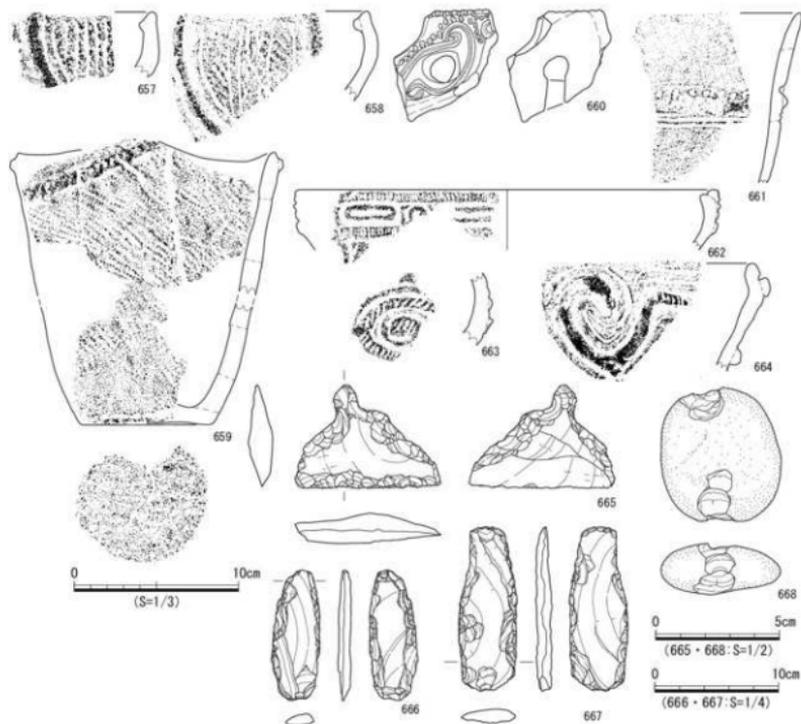


図 219 S118 出土遺物

## S119 (図 220~図 224)

**検出状況** AJ13 グリッド、III層上面で検出した。SI20 と NW 2 と重複関係があり、これらよりもより古い。また、ST13 と重複関係があり、ST13 より新しい。平面形は方形と考えられる。

**埋土** 黒褐色土と暗褐色土が 8 層堆積する。2 層に褐色土ブロックと亜角礫、3 層・4 層・6 層・8 層に褐色土ブロックを含む。また、1 層・8 層に炭化物を含む。7 層下でやや硬化した層 (8 層・9 層) を確認したため、遺構検出を行ったが明瞭な遺構は確認できなかった。建物中央で炉石の上面が確認できたため、炉の中心を通るように土層観察用ベルト (C-C 断面、D-D' 断面) を再設定した。

**壁** III層を掘り込んでいる。壁面はやや開く。壁の残存高は最大で 0.42m である。

**床面** ほぼ平坦であるが、南西方向に傾斜する。貼床 (10 層) がほぼ床面全体に残る。貼床は暗褐色土が主体で、より明るい褐色土ブロックを含み、固くしまる。床面で検出した遺構は炉 1 基、土坑 25 基、壁際溝 2 条である。堅穴内の位置関係から P 1 ~ P 5 を主柱穴と判断した。壁際溝は南隅を除き、主柱穴を結ぶように巡る。東辺は主柱穴を結ぶ外側に 1 条巡る。

**炉** 床面中央部やや北寄りで見出された。方形に浅く掘り込んだ土坑の四辺に長楕円礫を置き、北西・

南西の隅部には垂角礫を置く。北辺と西辺には長楕円礫を固定するために楕円礫を外側に沿わせて置く。礫の内側と土坑底面の基盤層は熱により赤変していた。埋土は暗褐色土が3層堆積する。3層は炉石を固定するための掘方埋土である。4層は熱により赤変した基盤層部分である。

**埋壘** 埋壘は確認できなかったが、P18が「入口土坑」と思われる。

**遺物出土状況** 炉の1層から縄文土器1個体分(674)が出土した。この他に埋土から縄文土器・石器が散在した状態で出土した。

**出土遺物** 669はC群1a3類で外面に半截竹管状施文具による縦位条線を施し、U字状懸垂文の隆帯を貼り付ける。670はC群1b2類で外面に半截竹管状施文具による縦位条線を施す。671・672はC群1c2類である。671は外面に棒状施文具による縦位条線と矢羽根状沈線を施し、大柄渦巻文の隆帯を貼り付ける。口唇部に棒状施文具による刻みを入れる。672は外面に棒状施文具による縦位条線と矢羽根状沈線を施し、大柄渦巻文の隆帯を垂下させ、貼り付ける。673はC2a類で樽形の器形である。外面に扁平な隆帯と沈線による渦巻文と幅広い隆帯によるリボン状突帯を貼り付ける。674はC群4b類で外面に隆帯と沈線による渦巻文を施す。675～677はC群5d類で外面に地文として撚糸文を施す。678はC群7類で外面に地文として縄文を施す。内面に煤が付着する。679はC群8類の無文の浅鉢である。680・681は凹基無茎石鏃である。680は基部の挟りが「く」字状で浅い。681は基部の挟りが「く」字状で深い。682は石匙である。下辺に両面からの連続剥離により直線的な刃部を作り出す。683は短冊形の打製石斧である。横長の剥片を素材とし、表裏面から剥離調整で全体を整える。684は玉類の未製品で全体に整形のための線条痕が残る。表裏面に孔状の窪みがあるが、貫通はしていない。

**時期** 炉内の出土遺物(674)から中期後葉の竪穴建物と判断した。

#### SI20 (図225～図227)

**検出状況** A112・13グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI19・SK142と重複関係があり、SI19より新しく、SK142より古い。また、SI21と重複関係があり、SI20の埋土がSI21に切られると判断し掘削したが、SI21は前期後半の土器が多く出土し、地床炉を持つ前期後葉の竪穴建物であることが判明したため、先後関係が誤りであると判断した。平面形は不整形である。

**埋土** 黒褐色土と暗褐色土が10層堆積する。1層・2層・6層から9層に褐色土ブロックを含む。また、1層・5層に炭化物を含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込む。壁面はやや開く。壁の残存高は最大で0.22mである。

**床面** ほぼ平滑で南西方向に傾斜する。貼床(11層)が中央及び西側に残る。貼床は褐色土で固くしまる。床面で検出した遺構は土坑17基、溝2条である。このうち、P1～P3、P17は柱痕跡を確認した。竪穴内の位置関係からP6・P14・P17を主柱穴と判断した。壁際溝は確認できなかった。

**炉** 確認できなかった。

**埋壘** 確認できなかった。

**床下** 貼床除去後、土坑4基(P18～P21)を確認した。

**遺物出土状況** 埋土中から縄文土器・弥生土器・石器が散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は縄文時代前期中葉・前期後葉・中期中葉・中期後葉、弥生時代中期のものである。

**出土遺物** 685はC群1a3類で外面に隆帯と半截竹管状施文具による連続爪形文を施す。

**時期** SI19と重複関係から縄文時代中期後葉以降の竪穴建物である。竪穴建物埋土から出土した中期



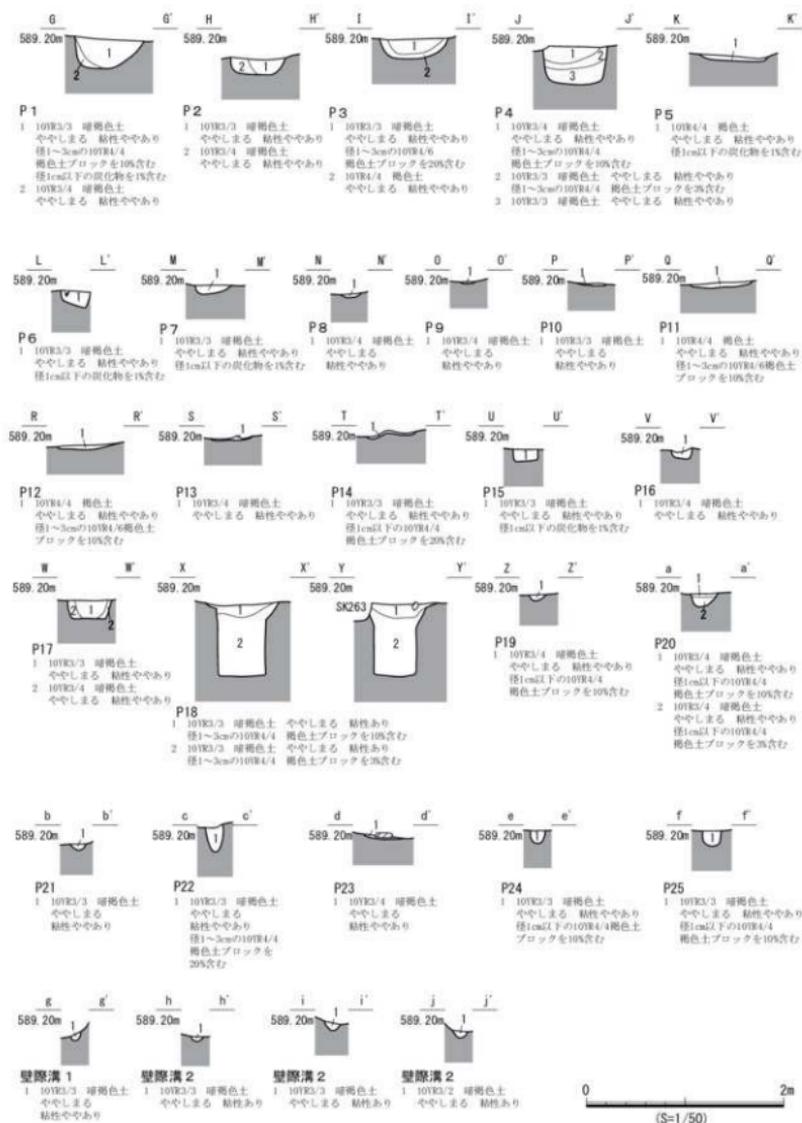


図 221 S119 遺構図 (2)

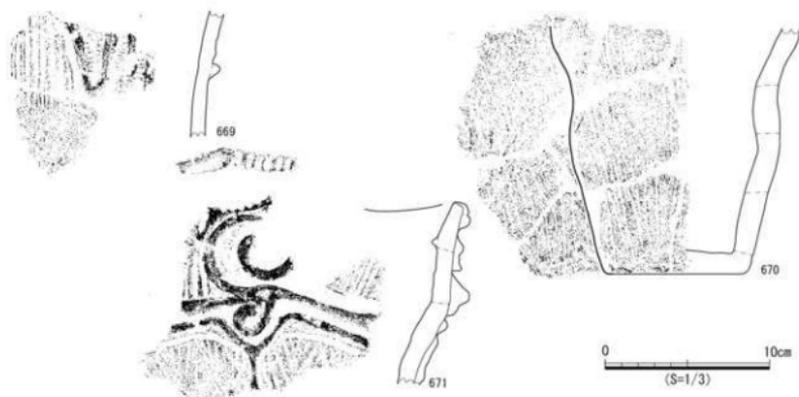
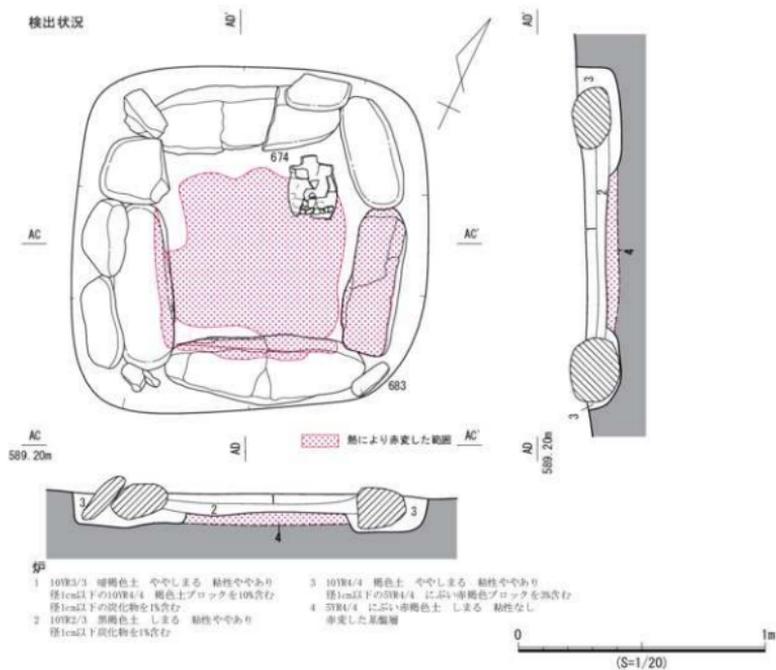


図 222 S119 遺構図 (3)・出土遺物 (1)

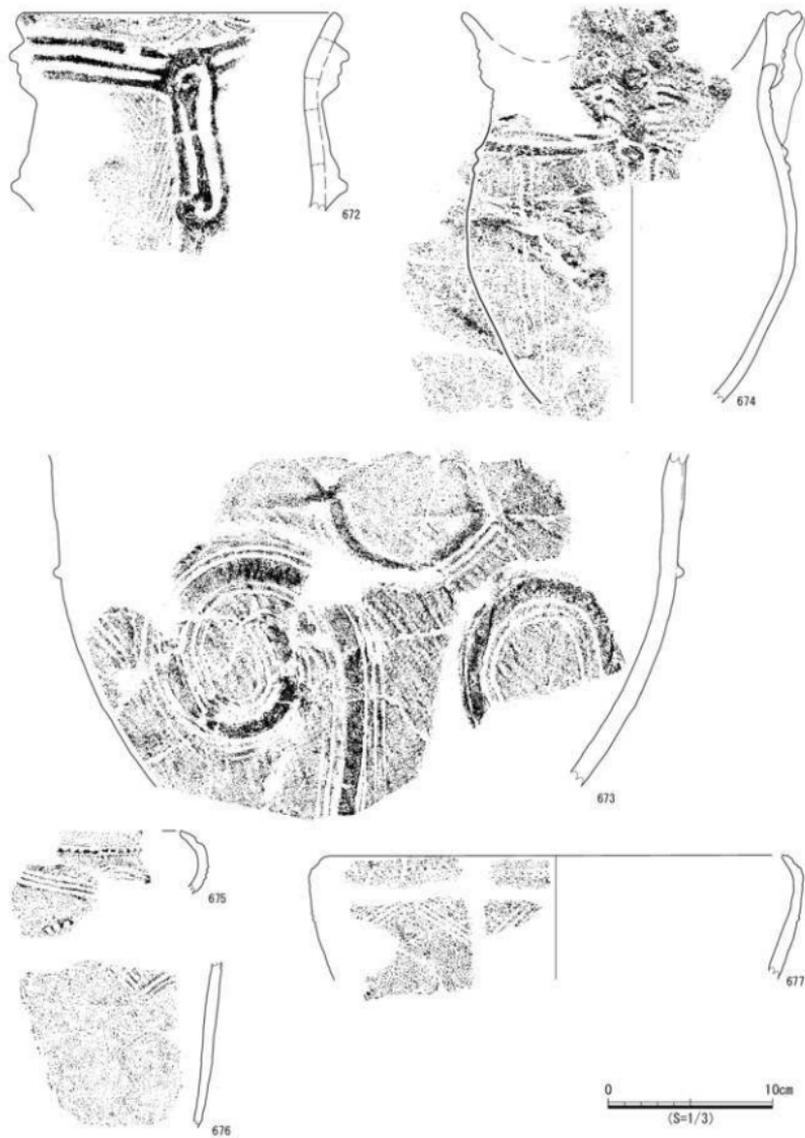


図 223 S119 出土遺物 (2)

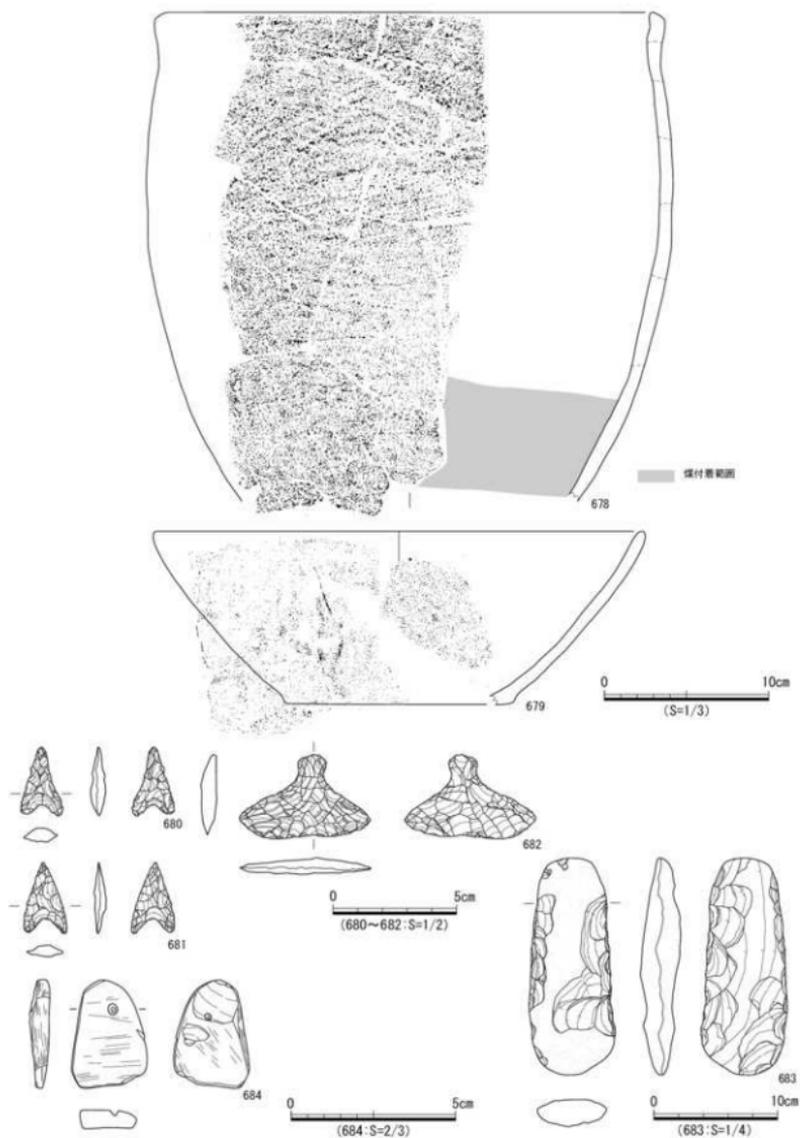


図 224 S119 出土遺物 (3)

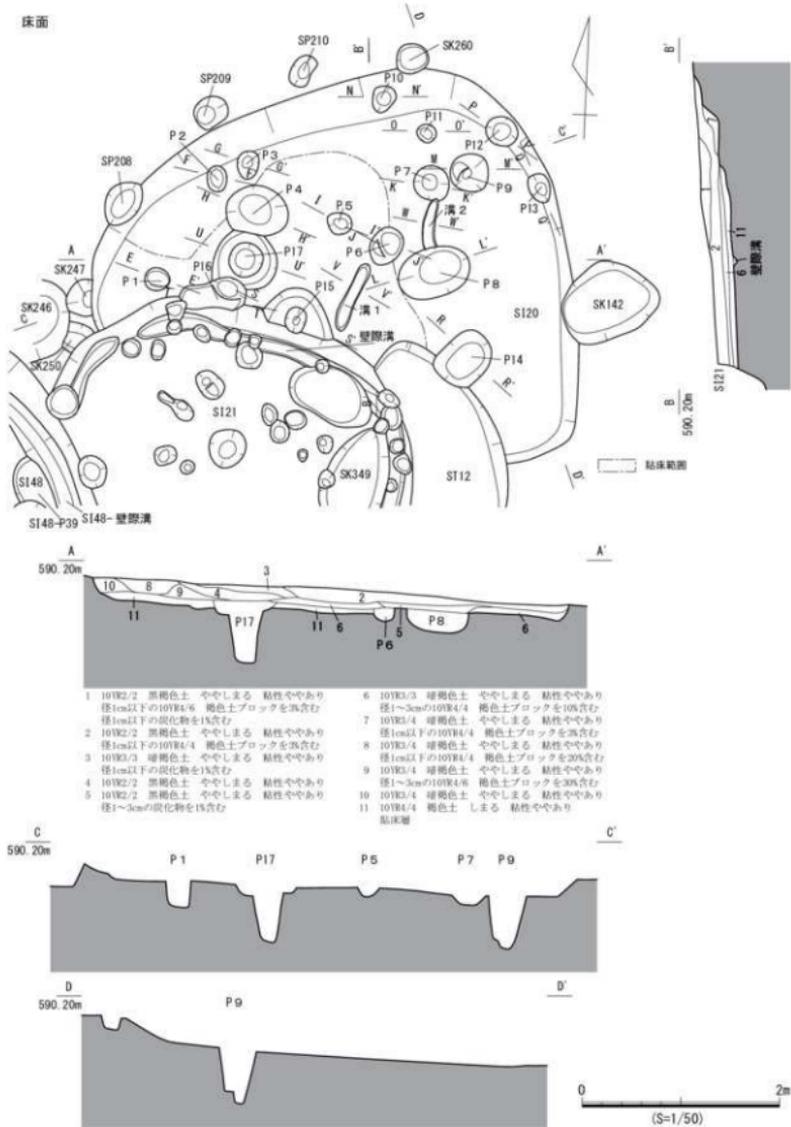


図 225 S120 遺構図 (1)

12 第3章 調査の結果

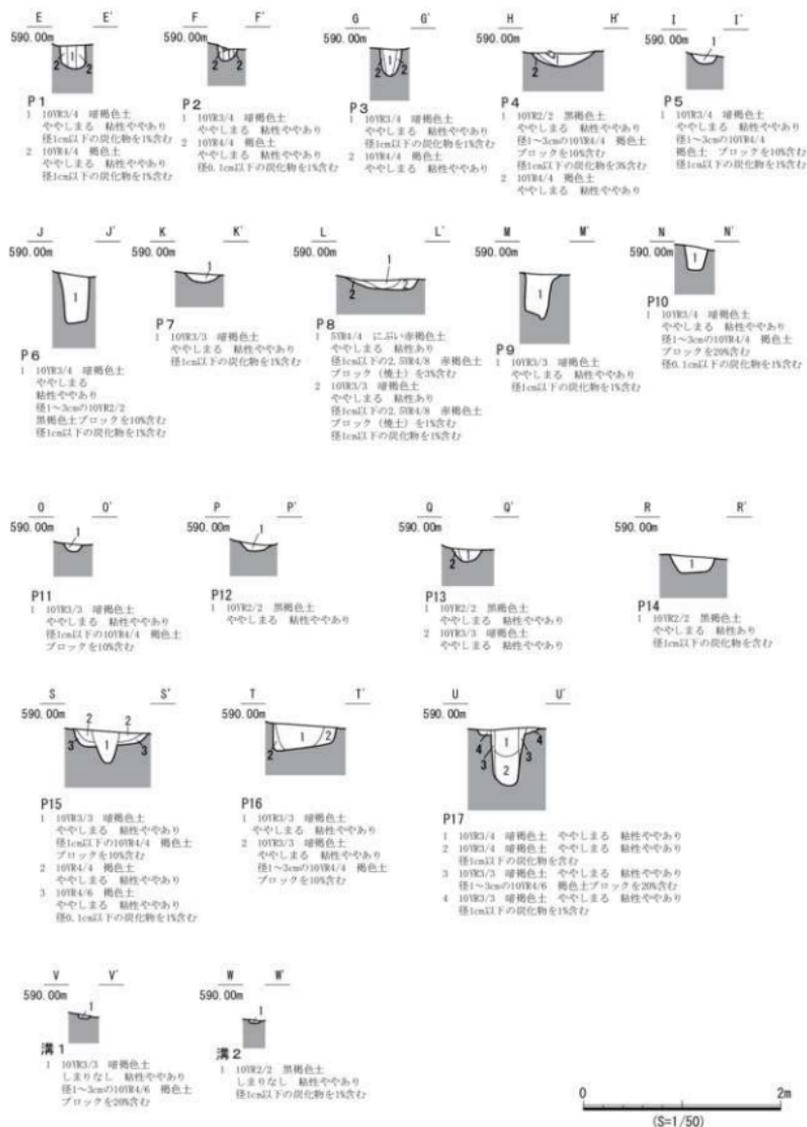


図 226 S120 遺構図 (2)

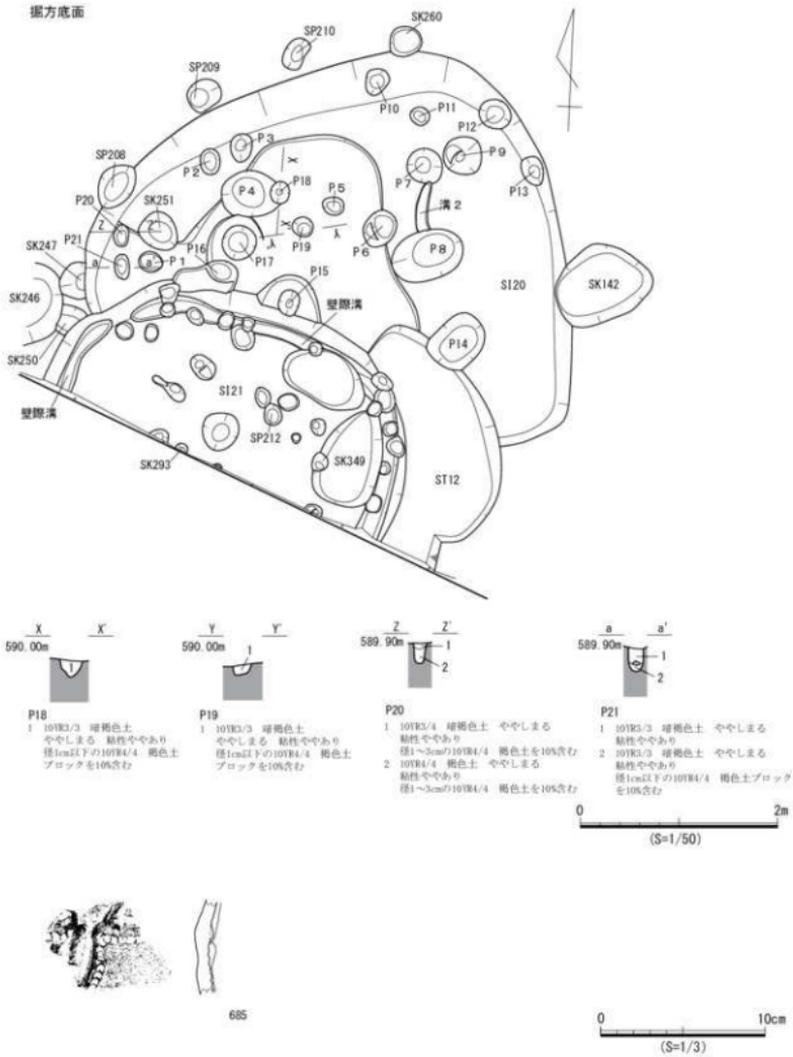


図 227 S120 遺構図(3)・出土遺物

## SI25 (図 228・図 229)

**検出状況** AC6～AD7グリッド、Ⅲ層上面で検出した。堅穴建物の北西部はSK410と重複関係があり、SK410よりも古い。平面形は各辺が直線的で隅部は丸く、隅丸方形である。

**埋土** 褐色土と暗褐色土と黄褐色土が7層堆積し、壁際の埋土が堅穴の中央に向かって傾斜する。埋土のうち、1・2・6層は堅穴のほぼ全体に堆積するが、他の土層は堅穴の一部に堆積する。1・2・4層に明黄褐色土ブロックを含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込み、壁面はやや開く。壁の残存高は最大で0.52mである。

**床面** ほぼ平滑で、東方向に傾斜する。南西隅部と東辺に段差がありテラス状になる。床面で検出した遺構は土坑5基、炉1基である。P1・P4間の中央とP2・P3間の中央を結んだ軸線が炉の中央付近を通り、軸線を挟んでP1・P4とP2・P3は対称的な位置関係にあることから、P1・P2・P3・P4は主柱穴と考えられる。壁際溝は確認できなかった。

**炉** 建物床面中央部やや西寄り検出した。石囲炉の四辺とも炉石が残存する。土層断面では三辺とも掘方内に長楕円礫を設置していると判断したが、平面的にその掘方を把握することはできなかった。南東辺では偏平な礫の平坦面を上して床面に据える。炉石の礫の内面は熱により赤変していた。埋土は、黒褐色土と赤褐色土が3層堆積し、うち2層は焼土層、3層は炉石を固定するための掘方埋土である。

**埋壘** 確認できなかった。ただし、入口付近に位置するP5は赤保木遺跡(高山市)の調査報告において指摘した「入口土坑」(岐阜県教育文化財団文化財保護センター2007、p173)と類似し、埋壘に代わるものか埋壘を抜き取った痕跡なのか不明である。

**床下** 貼床は確認できなかった。

**遺物出土状況** 堅穴建物の埋土1～7層から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期中葉と中期後葉のものである。

**出土遺物** 686はC群2b類で外面に縦方向の隆帯と平行沈線を施す。687はC群3b2類で外面に口縁部と平行する隆帯を3条施し、隆帯上を櫛歯状工具により刺突する。隆帯間には渦巻状の半隆起線を施す。

**時期** SK410は出土土器がないため、重複関係から時期が特定できない。出土土器から中期後葉以降の遺構と判断した。

## SI26 (図 230～図 233)

**検出状況** AD7～AE8グリッド、Ⅲ層上面で検出した。北東側はSI27と重複関係があり、SI27よりも古い。また、堅穴建物の東部は攪乱や削平により消失している。平面形は円形に近い形状をとる。

**埋土** 暗褐色土が2層堆積し、1層は中央部、2層は壁際に認められる。1層には焼土や炭化物を含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込み、壁面は西壁にやや開く。壁の残存高は最大で0.18mである。

**床面** ほぼ平滑で、南東方向に傾斜する。床面で検出した遺構は土坑16基である。堅穴建物の掘方のやや南側で、P1・P2・P3・P4・P13が同心円上に並ぶことから、これらを主柱穴とした。主柱穴は建物の南東側に寄り、建物の北西部の掘方の検出について見誤った可能性もある。このうち、P1・P2で柱痕跡を確認した。P5は掘方の断面形状が皿状ではあるが、主柱穴の同心円上

S125床面

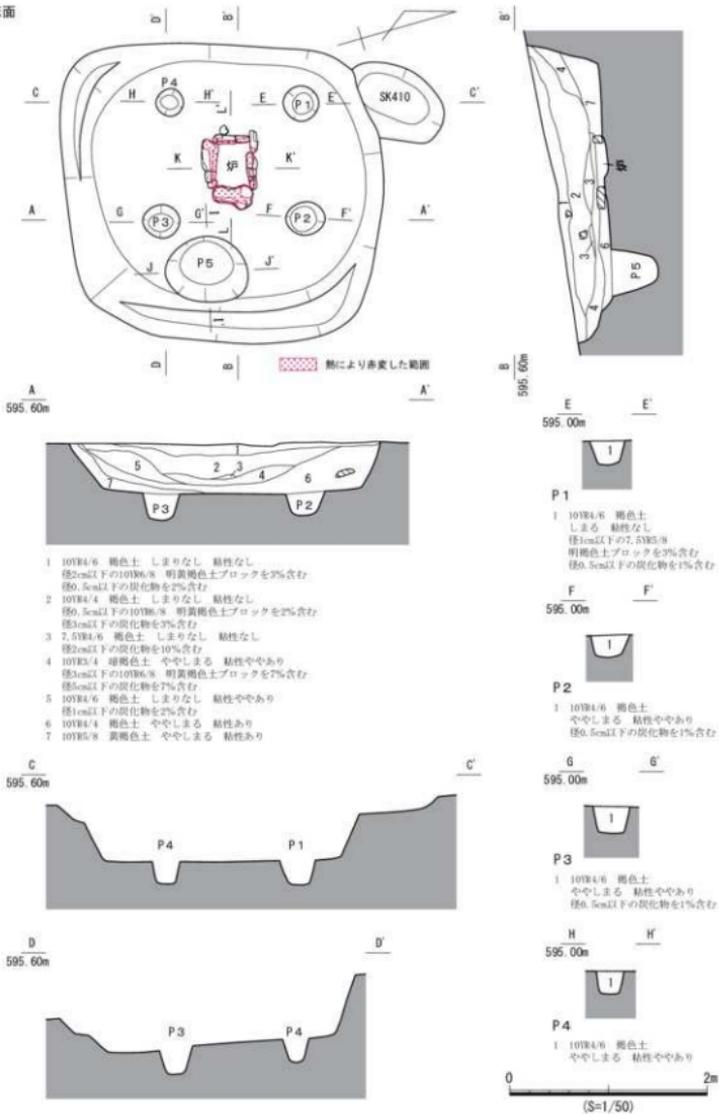


図 228 S125 遺構図 (1)

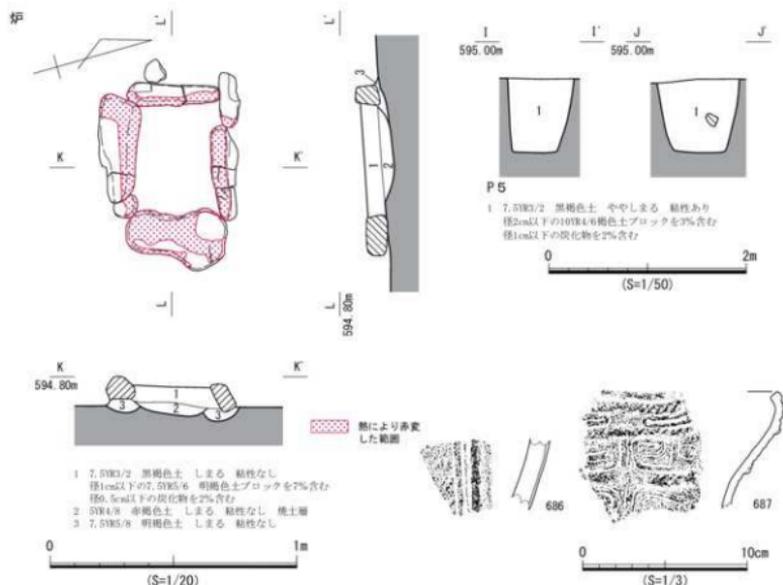


図 229 SI25 遺構図(2)・出土遺物

にあり P 1 と P 4 のほぼ中間に位置することから、主柱穴の可能性もある。また、P 9・P 14 でも柱痕跡を確認した。

**炉** 確認できなかった。ただし、P 7 の埋土 1 層には焼土ブロックを含んでおり、炉跡と重複した結果、焼土ブロックが混入した可能性もある。

**埋裏** 確認できなかった。

**床下** 貼床は確認できなかった。

**遺物出土状況** 堅穴建物の埋土 a・1・2 層から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。ただし、P 5 では掘方中央のやや東側で石皿 (694) が坑底から直立する状態で出土した。P 7 では 1 層から磨石 (693)、縄文土器の深鉢 (689) がまとまって出土した。時期が特定できる土器は、付属遺構出土のものを含めてすべて中期中葉のものである。

**出土遺物** 688 は C 群 1 a 3 類で外面に半截竹管状工具による斜方向の沈線を施す。689 は C 群 2 a 類で樽形の器形の外面に横位の幅広で低いリボン状突帯を貼付する。突帯の上方は無文、下方は縄文を施す。690・691 は C 群 2 b 類で外面に地文として縄文を施し、幅広で低い隆帯を貼付する。692 は C 群 7 類で外面に地文として縄文を施す。底部外面に縄の圧痕を残す。693 は磨石・敲石類で表裏面・両側面に敲打痕と磨痕、上面・下面に敲打痕を残す。694 は有縁の石皿で表面に敲打痕と磨痕を残す。

**時期** 出土土器は中期中葉に限られることから、中期中葉の遺構と判断した。

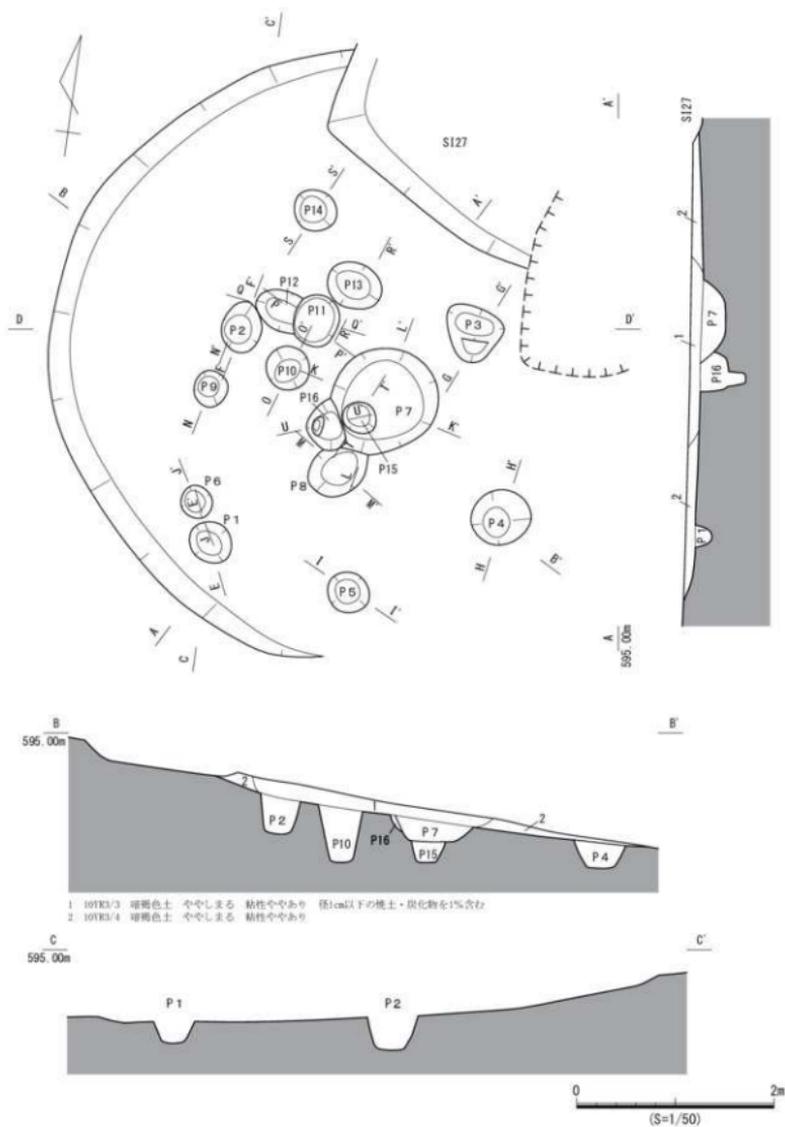


図230 S126遺構図(1)

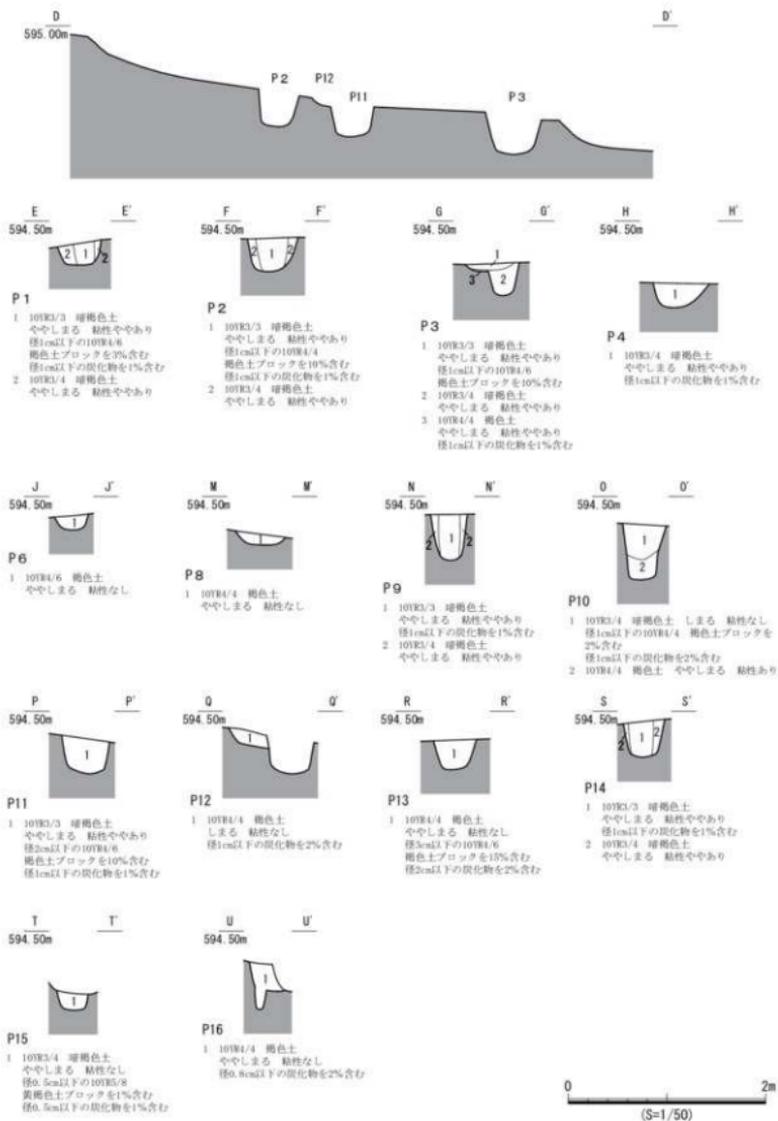


図 231 S126 遺構図 (2)

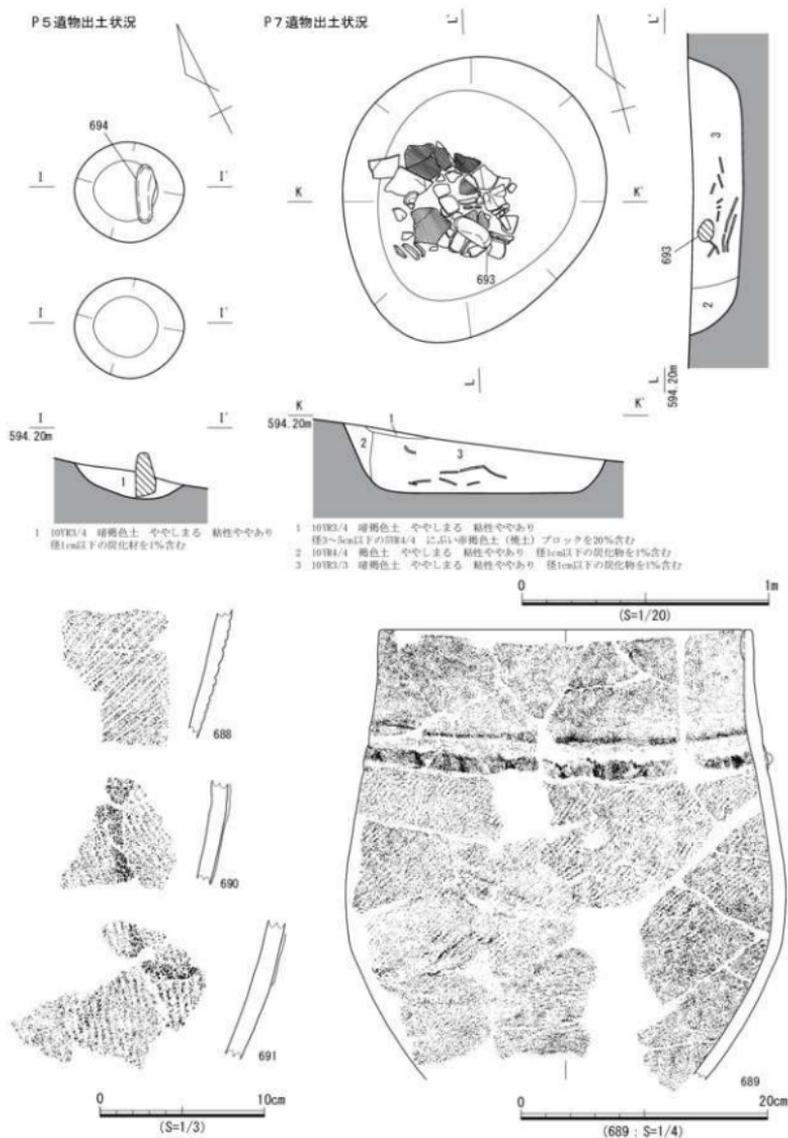


図 232 S126 遺構図 (3) ・出土遺物 (1)

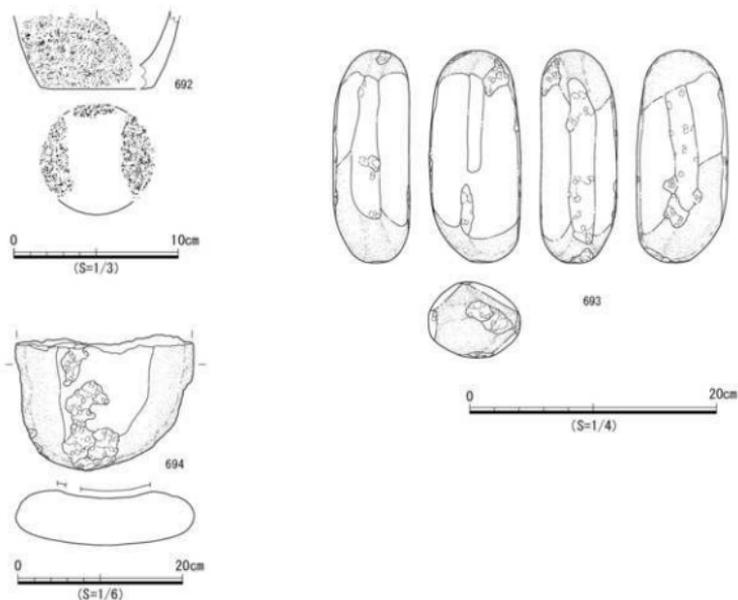


図 233 SI26 出土遺物 (2)

## SI27 (図 234～図 236)

**検出状況** AC7～AD8 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。標高の低い東側は床面や掘方が残存しないことから、SI27の東部の掘方や床面は削平された可能性がある。また、堅穴建物の北部と南部・東部の一部が攪乱により消失している。堅穴建物の南西部ではSI26、南東部ではSK406と重複関係があり、いずれよりも新しい。平面形は残存する西辺と南辺は直線的な方形に近い形状をとるが、北辺と東辺は消失しているため不明である。

**埋土** 明褐色土が1層堆積する。埋土中に炭化物を含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込み、壁面はやや開く。壁の残存高は最大で0.05mである。

**床面** ほぼ平滑で、東方向に傾斜する。床面で検出した遺構は土坑15基、炉1基である。柱配置は2通り考えられ、建物掘方の隅部付近に位置するP2と炉の南辺を中心として同心円上に配置される堅穴外のP4・P10を主柱穴とする柱配置と、炉を中心と同心円上に配置されるP1・P2・P3の柱配置が候補として挙げられる。後者の場合、各主柱穴との距離がほぼ等しく、炉を中心とした対角の位置にあることから前者よりも蓋然性が高い。北東側の残り1つの主柱穴は攪乱により削られているため、不明である。壁際溝は確認できなかった。

**炉** 残存する床面の北東部で検出した。炉の東辺は長楕円礫が残存するが、東辺を除いた3辺については炉石を固定するための掘方のみを確認した。炉の底面は熱により赤変していた。

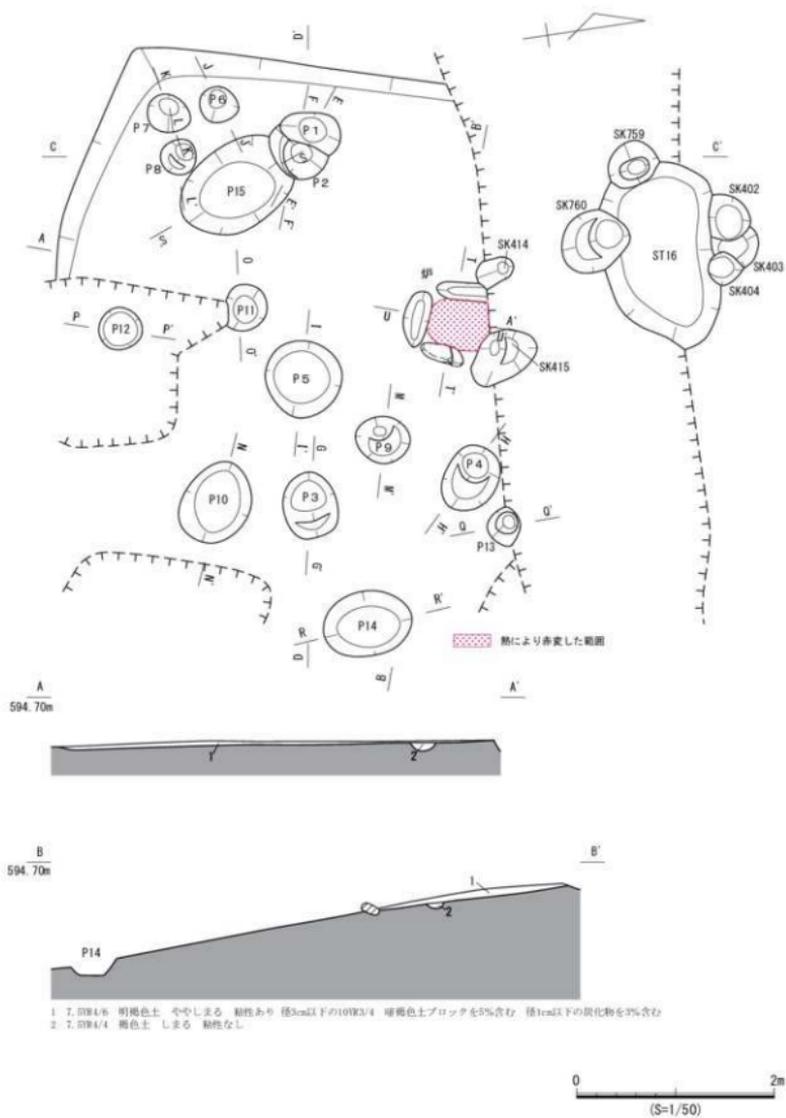


図 234 S127 遺構図 (1)

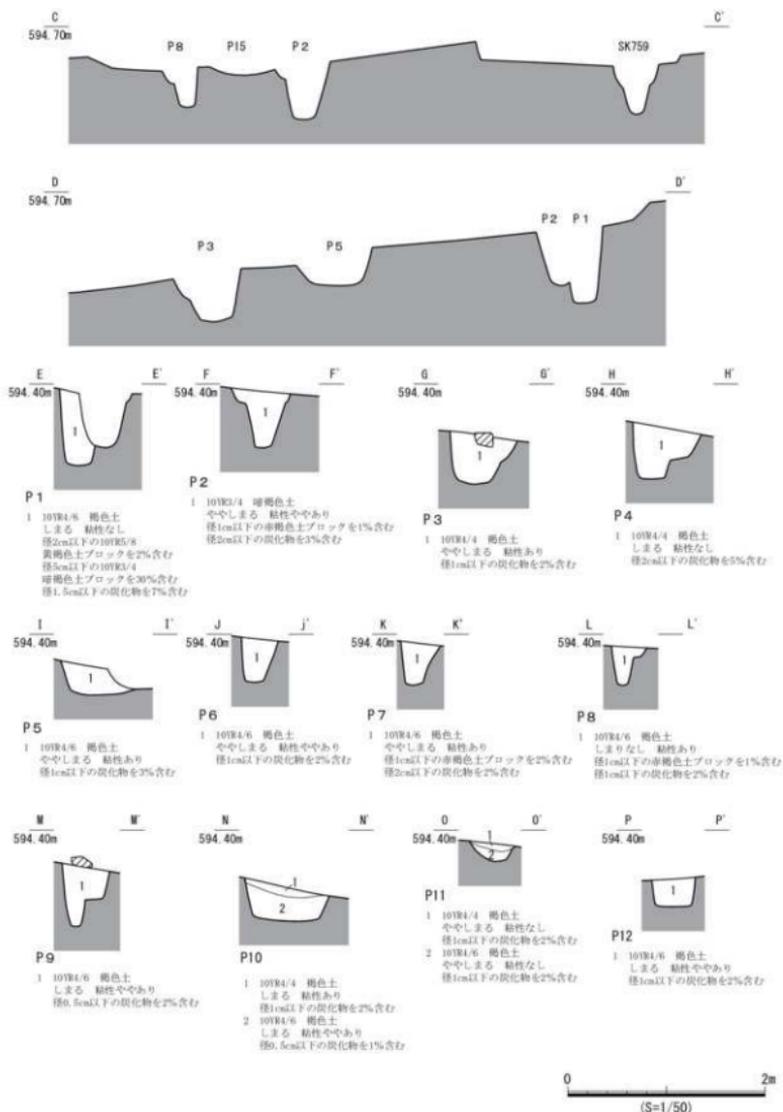


図 235 S127 遺構図 (2)

**埋壘** 確認できなかった。

**床下** 貼床は確認できなかった。

**遺物出土状況** 竪穴建物の埋土から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉と中期中葉と中期後葉のものである。

**出土遺物** 695はC群1c2類で口縁部の橋状把手部分で、外面に渦巻文の隆帯を貼付する。隆帯間は棒状工具による沈線を施す。696・697はC群2a類である。696は外面に横位の幅広く低いリボン状突帯を貼付する。697は外面に横位の幅広く低いリボン状突帯を貼付する。突帯の上部と下部に半截竹管状工具による平行沈線を施す。口縁部の外面に縄文を施す。698はC群4a類で外面に半截竹管状工具による平行沈線を施す。

**時期** 中期中葉のSI26より新しいことや、出土土器から中期後葉の遺構と判断した。

#### SI29 (図 237・図 238)

**検出状況** AD8～AD9グリッド、Ⅲ層上面で検出した。竪穴建物の東側はSK429と重複関係があり、SK429よりも新しい。削平により南辺が消失しているが、東西北辺の3辺が直線的で、平面形は方形に近い形状をとる。

**埋土** 暗褐色土と明褐色土が2層堆積する。1層の埋土中に明褐色土ブロックを含む。北壁際・西壁際から竪穴の中央にかけて2層、竪穴の中央から東壁際にかけて1層が堆積する。

**壁** Ⅲ層を掘り込み、残存部分では壁面は開く。壁の残存高は最大で0.22mである。

**床面** ほぼ平滑で、東方向に強く傾斜する。標高が低い南側の掘方は残存しないことから、南部の掘方や床面は削平された可能性がある。床面で検出した遺構は土坑6基である。南北辺が東西辺と同規模と仮定してP3・P4を本遺構に帰属させたが、竪穴建物の南側は攪乱で大きく消失しているため、柱配置は不明である。

**炉** 確認できなかった。

**埋壘** 確認できなかった。

**床下** 貼床は確認できなかった。

**遺物出土状況** 埋土a・b層から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉から中期中葉までであるが、ほとんどが中期中葉のものである。

**出土遺物** 699はC群3b2類で外面に口縁部と平行する隆帯を1条施し、隆帯上を楕円状工具により刺突する。隆帯間には渦巻状の半隆起線を施す。

**時期** SK429は出土土器がなく、重複関係から時期が特定できない。出土土器から中期中葉以降の遺構と判断した。

#### SI32 (図 239～図 245)

**検出状況** AE6～F7グリッド、Ⅲ層上面で検出した。竪穴建物の南東側でSK561と重複関係があり、SK561よりも新しい。平面形は四辺が直線的で方形に近い形状をとる。北辺には段差がありテラス状になるが、この範囲については異なる遺構の可能性もある。

**埋土** 黒褐色土・暗褐色土・にぶい黄褐色土・褐色土が7層堆積する。掘方全体に7層、北壁際に6層、北壁際と南壁際に5層、中央に1～4層が堆積する。壁際の5層や6層は傾斜して堆積する。埋土中に炭化物や褐色土ブロックを含む。

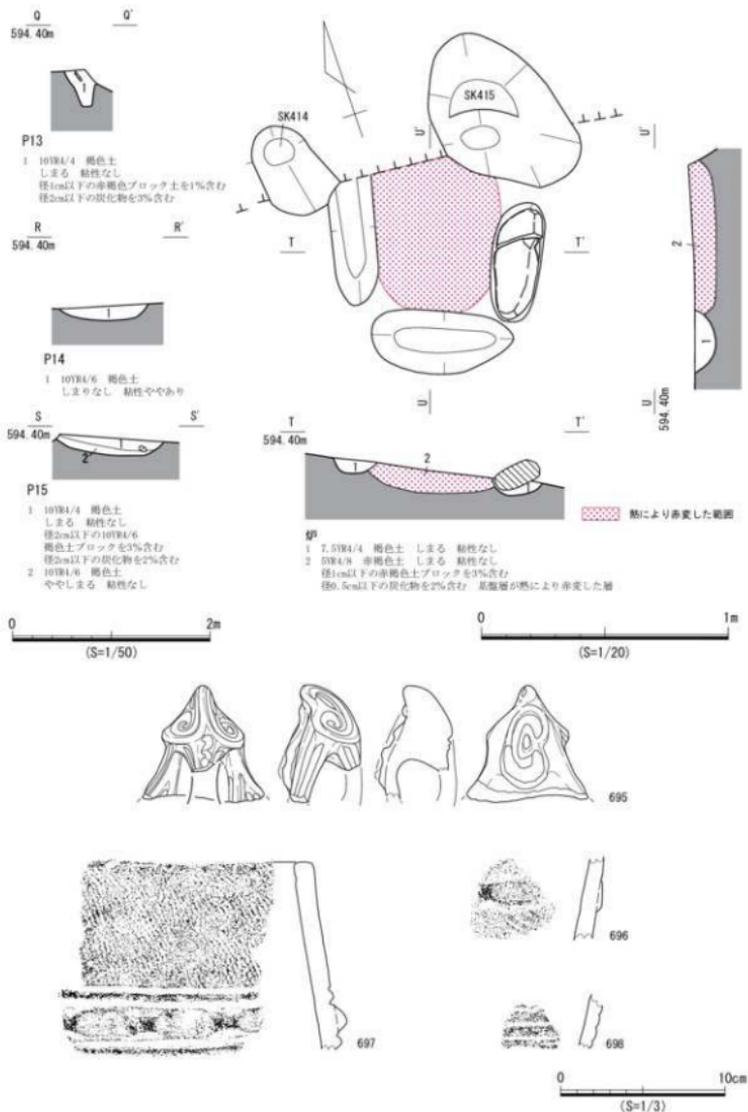


図 236 S127 遺構図 (3) ・出土遺物

S129床面

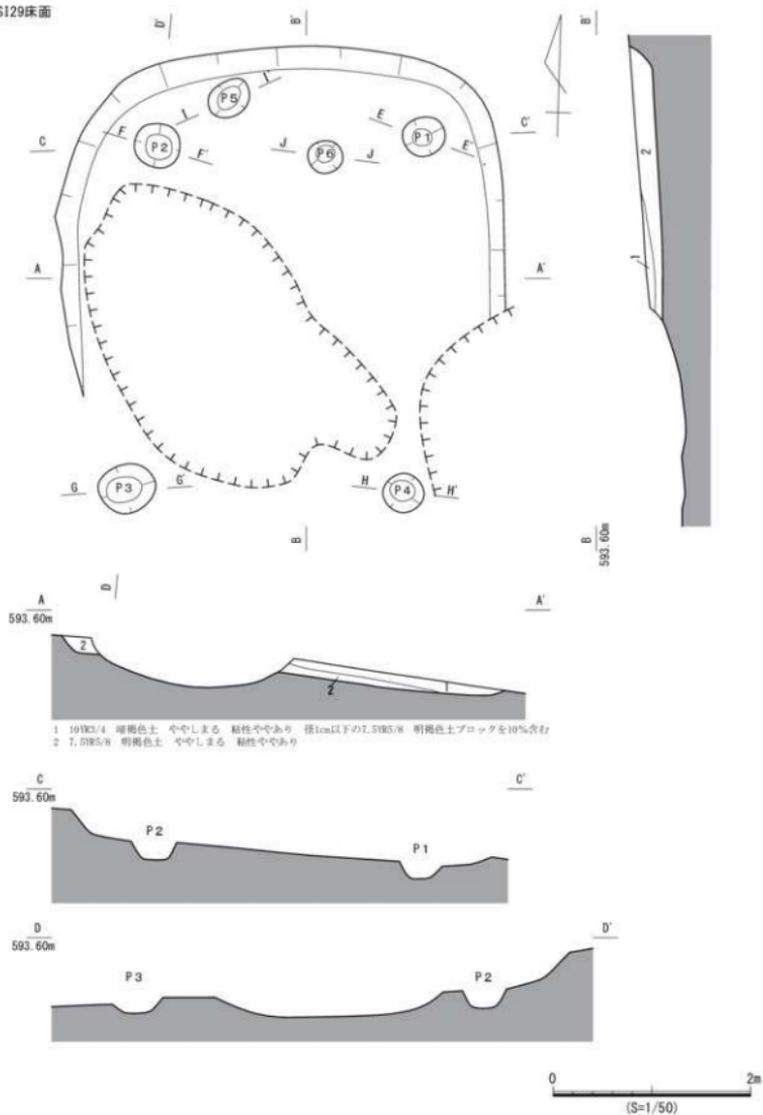


図 237 S129 遺構図 (1)

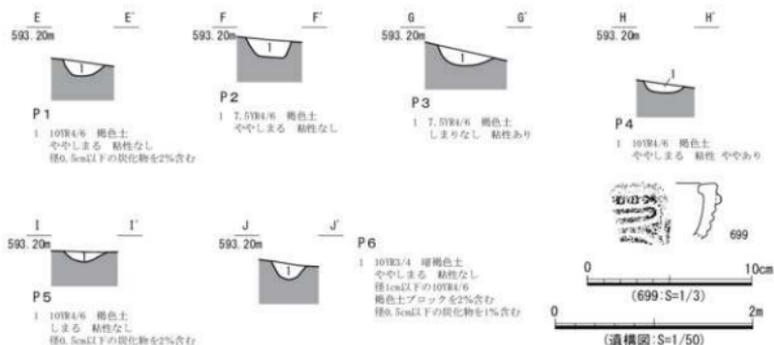


図 238 SI29 遺構図 (2)・出土遺物

壁 III層を掘り込む。壁面はやや開く。壁の残存高は最大で1.02mである。

床面 ほぼ平滑で、南東方向にやや傾斜する。堅穴掘方の中央に貼床(8層)が残る。貼床は褐色土で、固くしめる。床面及び北辺のテラス部分で検出した遺構は土坑12基、炉1基、壁際溝1条、溝3条である。P1・P3・P4で柱痕跡、P6・P8で柱の当たりを確認した。これらのうち、掘方の規模・形状が類似し、隅部付近に配置されるP1・P2・P3・P4を主柱穴とした。四辺で壁際溝、主柱穴を結ぶように溝を3条確認した。炉の位置、壁際溝の状況から堅穴の東側が入口の可能性が高く、P6とP7は対ビットと考えられる。なお、北辺のテラス部分が別の堅穴建物である場合、柱の当たりを確認したP8はP11とともに掘方の隅部に位置することから、いずれも主柱穴の可能性が有る。

炉 建物床面中央部で検出した。貼床は炉部分と炉の中央を浅く掘り込み、北辺・東辺・南辺に長楕円礫、北西・南西の隅部付近には直角礫を埋める。南辺の礫がなかったが、この部分には長楕円に近い形状の掘方があり、炉石を抜き取られた可能性がある。この炉石の内側と土坑底面は熱により赤変していた。埋土は暗褐色土・褐色土が2層堆積する。1層は炉石が置かれた後に堆積した層、2層は炉石を固定するための掘方埋土と判断したが平面的に掘方を把握することはできなかった。遺物は出土しなかった。

埋壘 建物南部で土坑1基(P5)を確認したが、埋壘は確認できなかった。SI25やSI35の「入口土坑」と異なり、対ビットよりも内側に位置する。

床下 貼床を除去したが、遺構は確認できなかった。

遺物出土状況 奥壁テラス部分の床面直上から2個体分の土器(700・701)が出土した。この他に2層・3層・7層から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉から中期後葉までであるが、ほとんどが中期中葉のものである。また、P4の1層から702が出土した。

出土遺物 700~702はC群1a3類である。700は口縁部が波状の楕円形土器である。口縁部と胴部の括れ部分下の外面に隆帯による楕円形区画を施し、区画内に縦方向の沈線を施す。隆帯上に刻み竹を入れる。701は口縁部外面に縦位区画の隆帯、胴部外面に隆帯を巡らせる。上方の隆帯上には半截竹管

S132床面

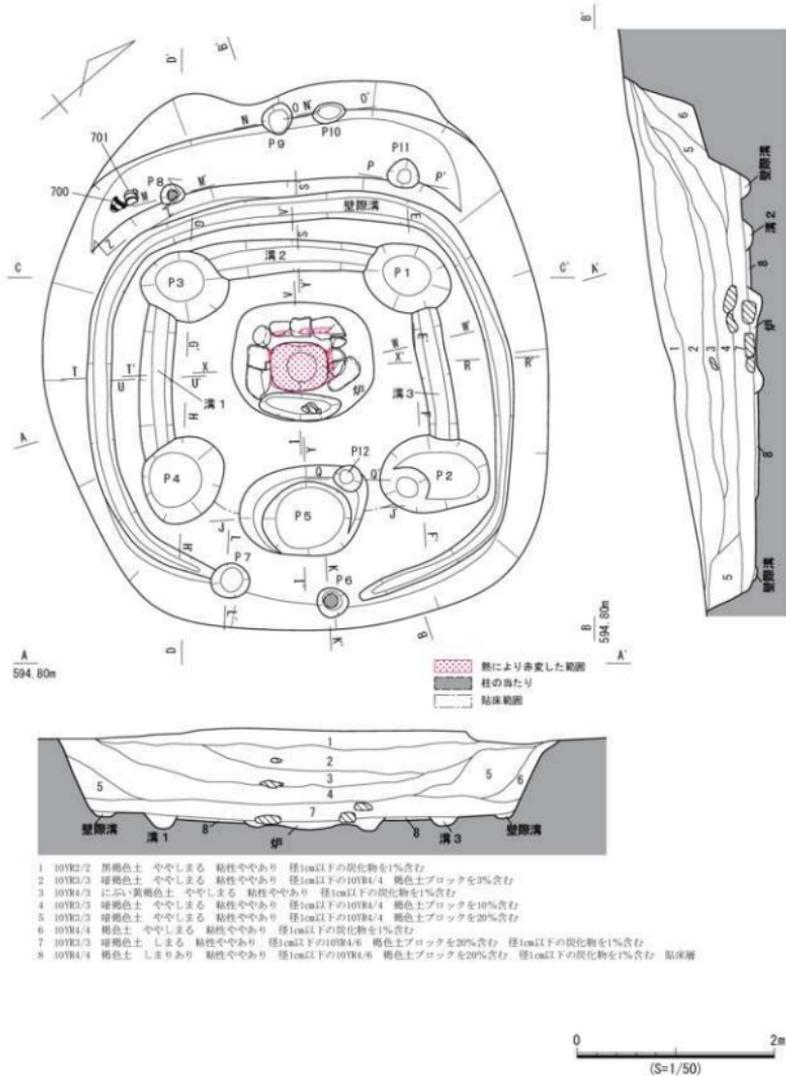


図 239 S132 遺構図 (1)

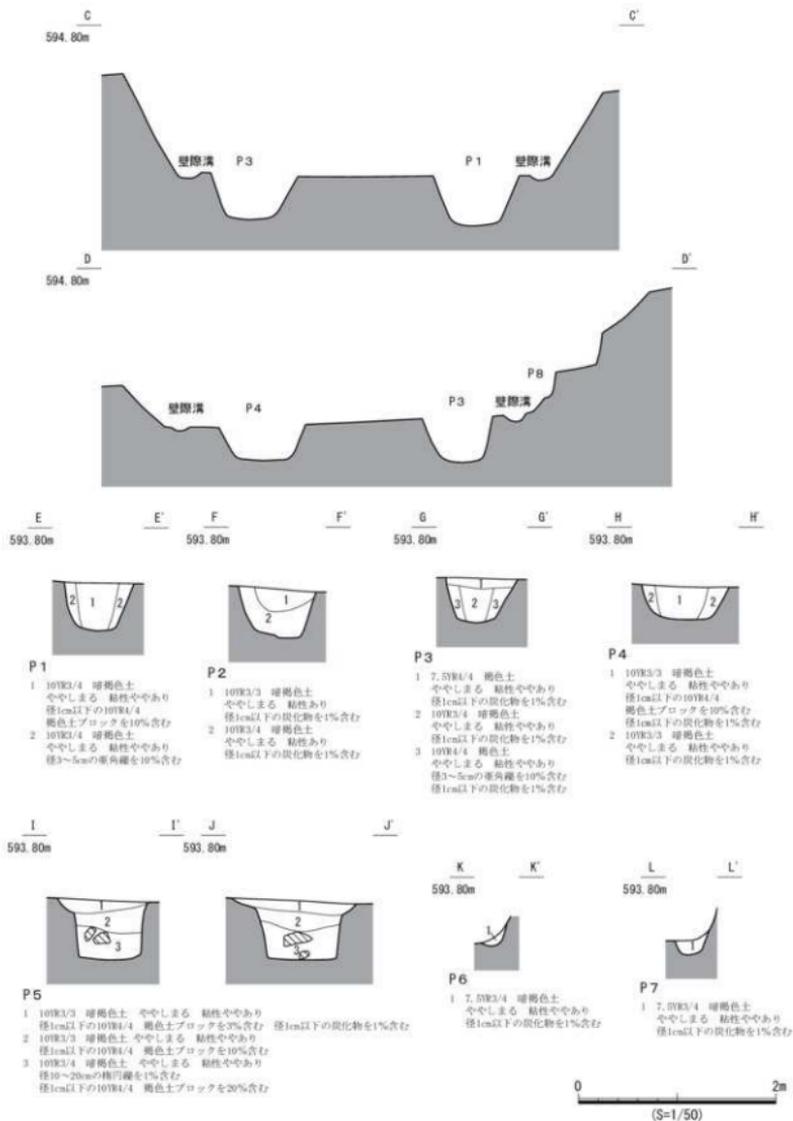


図 240 S132 遺構図 (2)



図241 S132遺構図(3)

状施工具による刺突文を施す。下方の隆帯上には間隔を空けながら押圧する。702は外面に隆帯による楕形の区画とその内側に縦方向の沈線を施す。隆帯上は間隔を空けながら押圧する。703~708はC群1c2類である。703は外面に隆帯と沈線による渦巻文と横帯区画文を施す。704は外面に隆帯を垂下させ、沈線で区画した内側に縦方向の条線や蛇行沈線を施す。705は外面に隆帯による渦巻文と沈線を施す。706~708は外面に綾杉状沈線を施す。709~711はC群2a類で胴部外面に横位の幅で低いリボン状突帯を貼付する。709・711は突帯より上方は無文となる。710は口縁部外面から突帯までの間に縄文を施す。712~717はC群3b2類である。712は外面に半隆起線による横位の区画文と縦位の沈線を施す。713は外面に半隆起線による区画文と棒状工具による刺突文を施す。714・715は外面に半隆起線による区画文と櫛歯状工具による刺突文を施す。716は外面に隆帯による区画と隆帯上に刻みを施す。区画内は縦位弧線状の沈線や爪形文を施す。717は外面に隆帯による区画と隆帯上に刻みを施す。区画内は縦位弧線状の沈線を施す。718はC群9類で無文の深鉢である。底部外面に木葉痕が残る。719~721はC群10類である。719は外面に隆帯と沈線による楕円形区画と渦巻文を施す。720・721は口縁部の外面に沈線を2条施し、沈線間は櫛歯状工具による刺突文を施す。722・723は磨石・敲石類である。表裏面・両側面に敲打痕・磨痕・擦痕、上面・下面に敲打痕を残す。723は表裏面・両側面に敲打痕と磨痕、上面・下面に敲打痕を残す。

**時期** SK561は前期後葉の遺構であり、これより新しい。床面遺構や奥壁テラス部分の出土土器(701・702)から、構築された時期は中期中葉と判断した。

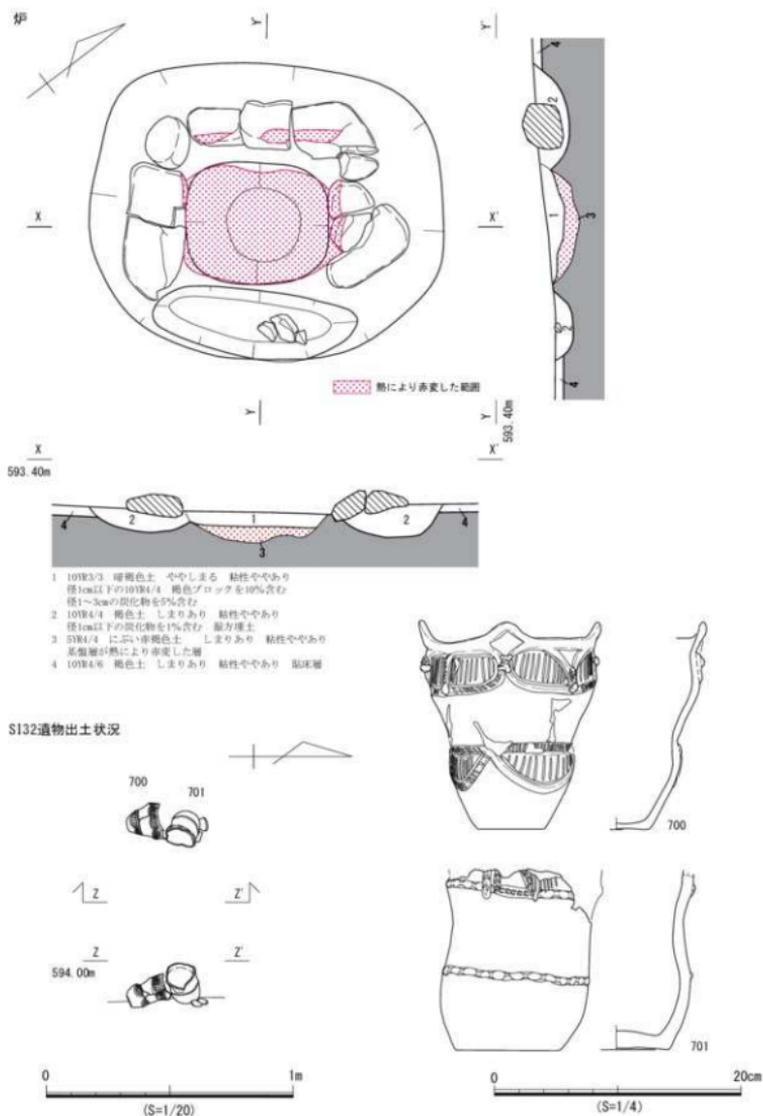


図 242 S132 遺構図(4)・出土遺物(1)

## P5 掘出土状況

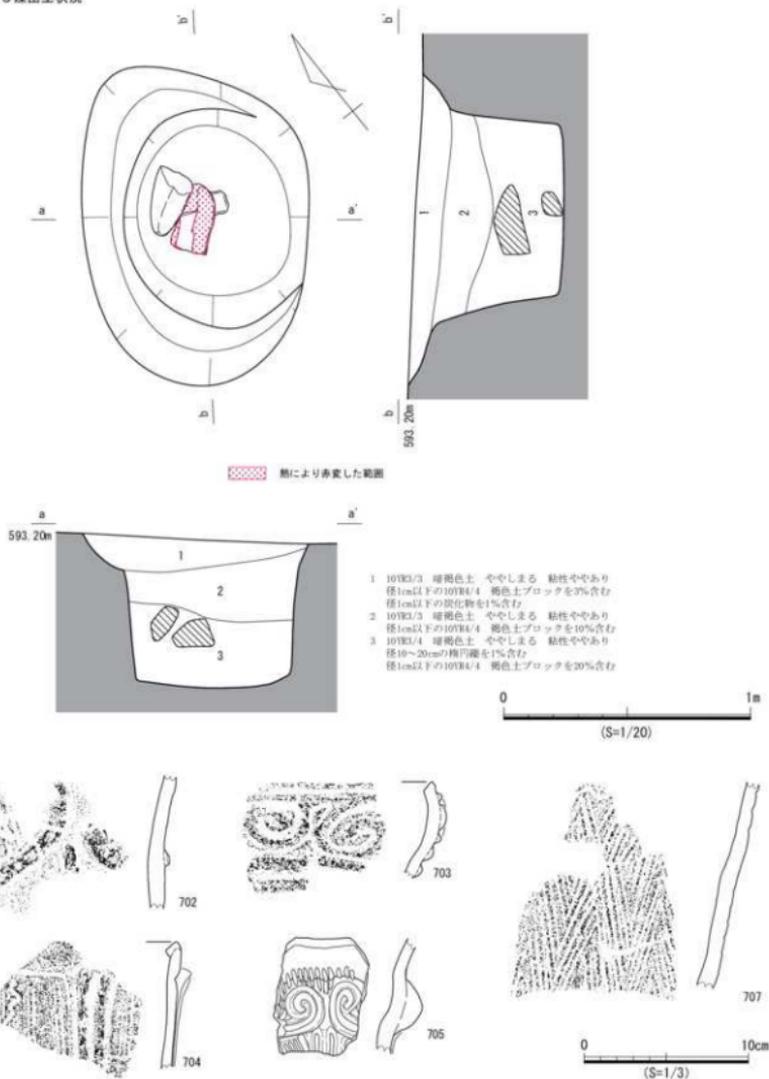


図 243 S132 遺構図(5)・出土遺物(2)

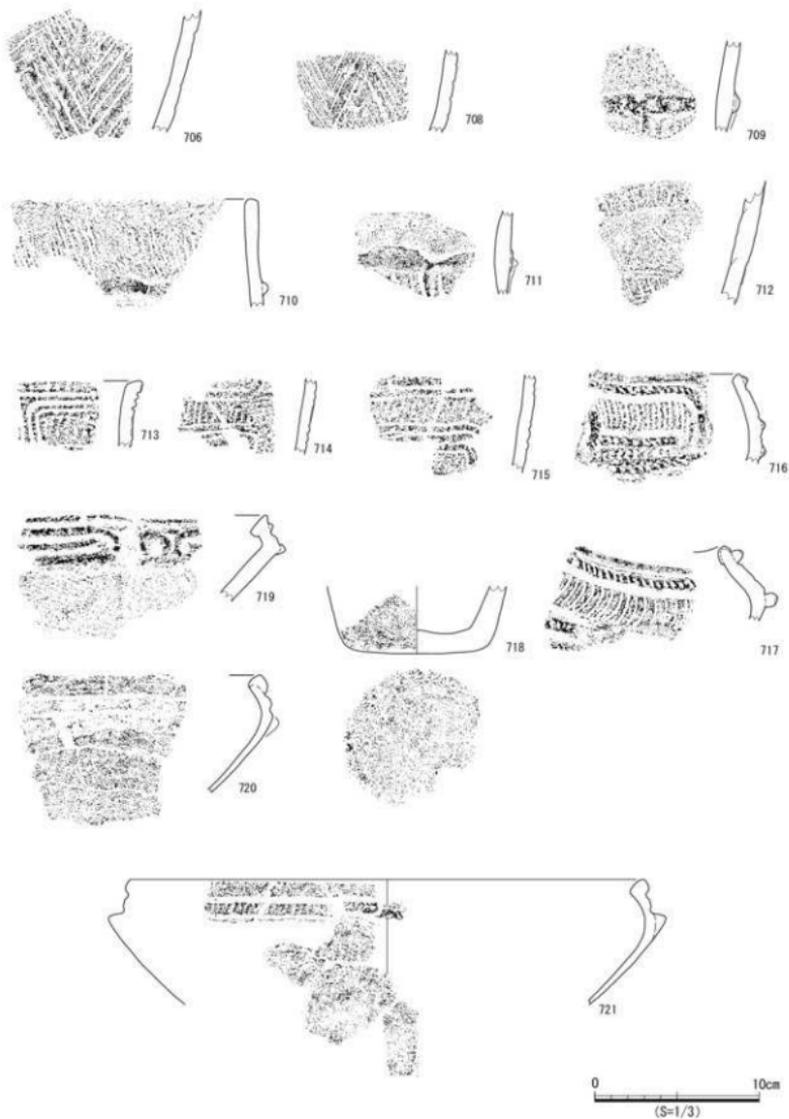


図 244 S132 出土遺物 (3)

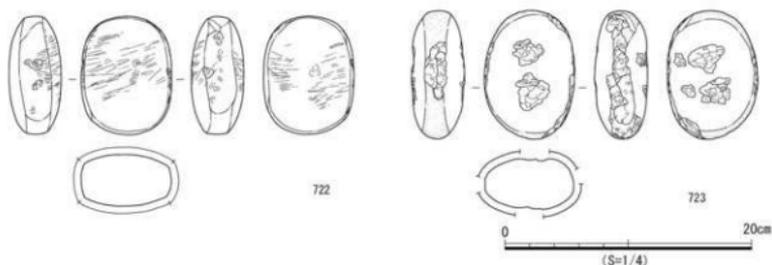


図 245 SI32 出土遺物 (4)

## SI33 (図 246～図 249)

**検出状況** AG 5～AG 6 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。東側に位置する竪穴建物 SI34・SI35 と重複関係があり、いずれよりも古い。平面形は竪穴建物 SI34・SI35 により東辺が消失しているが、北辺は直線的、西辺・南辺は丸みをもつため、不定な形状である。

**埋土** 北辺と南辺の壁際のみ確認でき、暗褐色土が 3 層傾斜して堆積する。埋土中に炭化物を含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込み、壁面は直立に近いがやや開く。壁の残存高は最大で 0.64m である。

**床面** 竪穴建物 SI34・SI35 との重複により消失した床面状況は不明であるが、床面が残存する範囲についてはほぼ平滑である。床面で検出した遺構は、土坑 10 基、壁際溝 2 条・溝 1 条である。北辺の壁に直線的に配置され、掘方の規模や形状が類似し、柱痕跡が認められる P 1・P 2・P 3 は主柱穴と考えられるが、その他の主柱穴は特定することが困難である。壁際溝は北辺と西辺で 2 条確認した。壁際溝 1 と壁際溝 2 の間、壁際溝 1 の東側に土坑 2 または 3 基が配置されており、また P 4 は P 4 - P 5 間と P 6 - P 7 間の距離がほぼ一定であることから、これらの遺構は密接な関連があることが窺える。

**炉** 確認できなかった。

**埋壘** 確認できなかった。

**床下** 貼床がないため、床下の調査は実施していない。

**遺物出土状況** 竪穴建物の床面が残存する部分、特に北辺と南辺の壁際の 2 層から炭化材がまとまって出土した (図 248 下)。焼失家屋の可能性がある。炭化材のうち棒状材の出土位置はいずれも主柱穴又は壁際溝に隣接する土坑の位置と一致せず、炭化材が直交する箇所も見受けられることから、屋根材の一部と考えられる。なお、炭化材の樹種が判明したものはクリ 13 点とミズキ属 2 点で、炭素年代測定により測定値 B P は  $4,370 \pm 20$  という結果を得た (第 4 章第 3 節)。なお、埋土から縄文土器や石器が散在した状態で出土したが、うち縄文土器 (730・731) は炭化材とともに出土したものである。時期が特定できる土器は、前期後葉と中期中葉のものである。この他に P 2 から 724 が出土した。

**出土遺物** 724 は C 群 2 b 類で外面に縄文を施し、渦巻状の隆帯を貼付する。725～729 は C 群 3 b 1 類である。725・726・728 は外面に口縁部と平行する半隆起線文を施す。下方は曲線や直線の半隆起線文を施し、その間に爪形文を施す。727 は突起のある口縁部で、突起部分は外面に刻みのある基本隆帯を貼付する。外面に口縁部と平行する半隆起線文を施す。下方は曲線や直線の半隆起線文を施す。729 は外

面に半隆起線文・爪形文を施す。730はC群6類で口縁部の外面に縦位の沈線を施す。731はC群7類で外面に縄文を施す。732は磨石・敲石類で表面・両側面に敲打痕・磨痕、上面・裏面に磨痕を残す。  
**時期** 中期中葉のSI34・SI35より古いことや出土土器から、中期中葉以前の遺構と判断した。

SI33床面

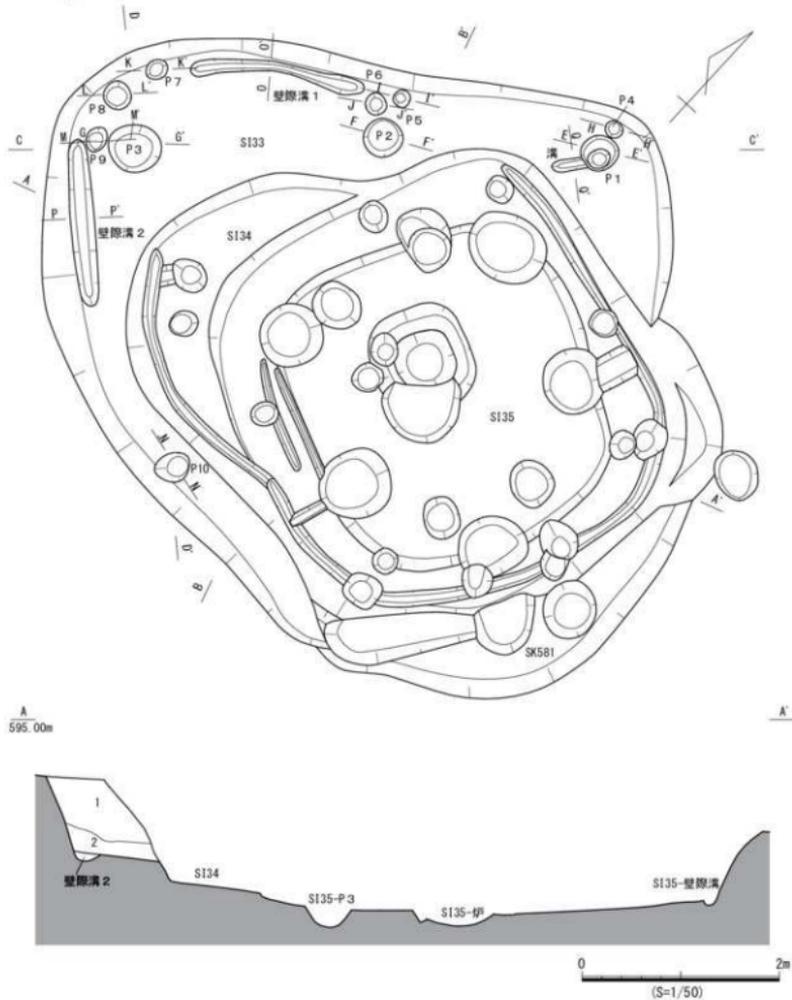


図246 SI33遺構図(1)

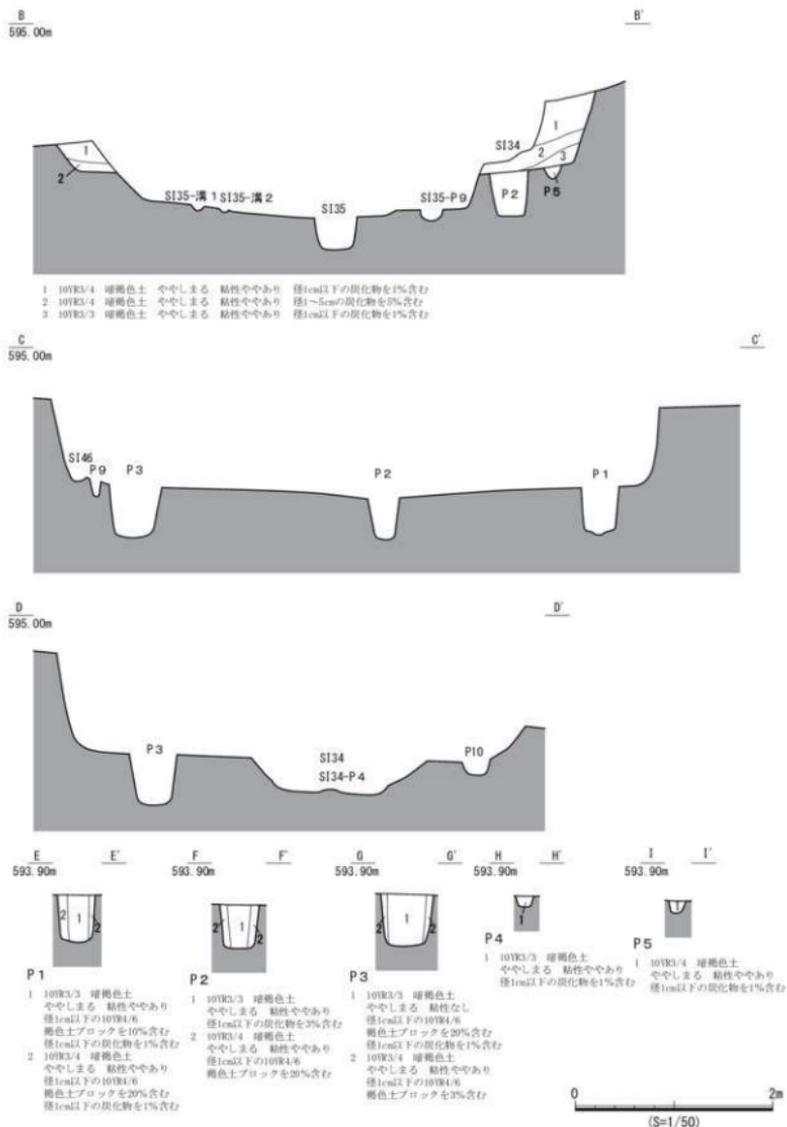
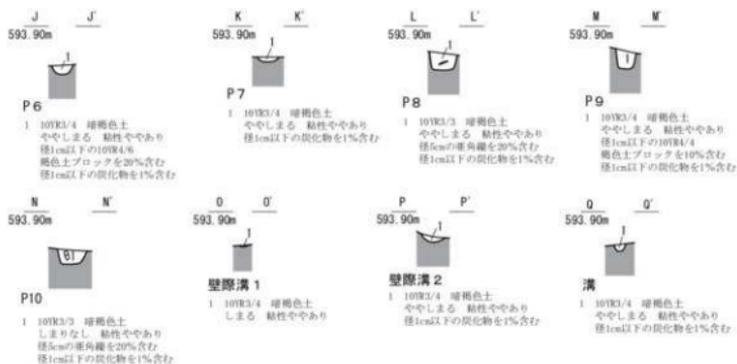


図247 SI33 遺構図(2)



S133炭化材及び遺物出土状況

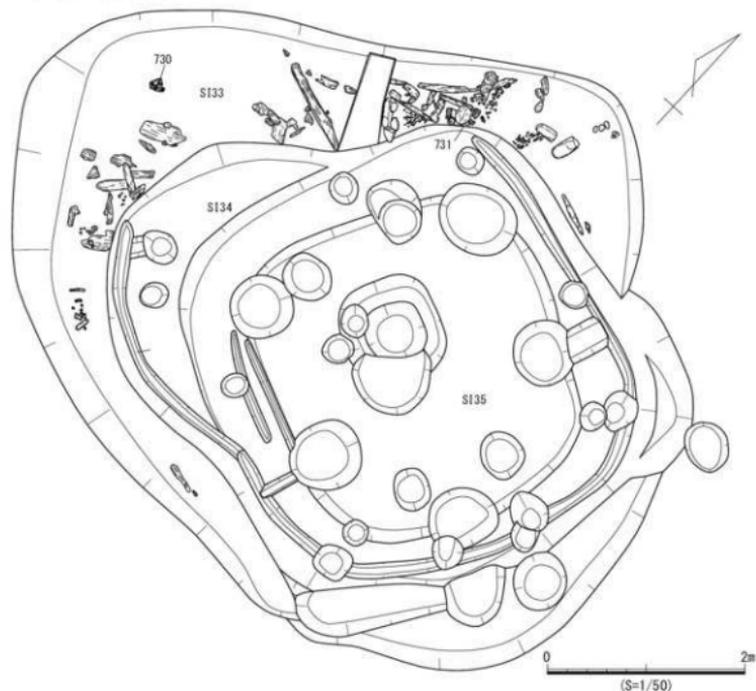


図 248 S133 遺構図 (3)

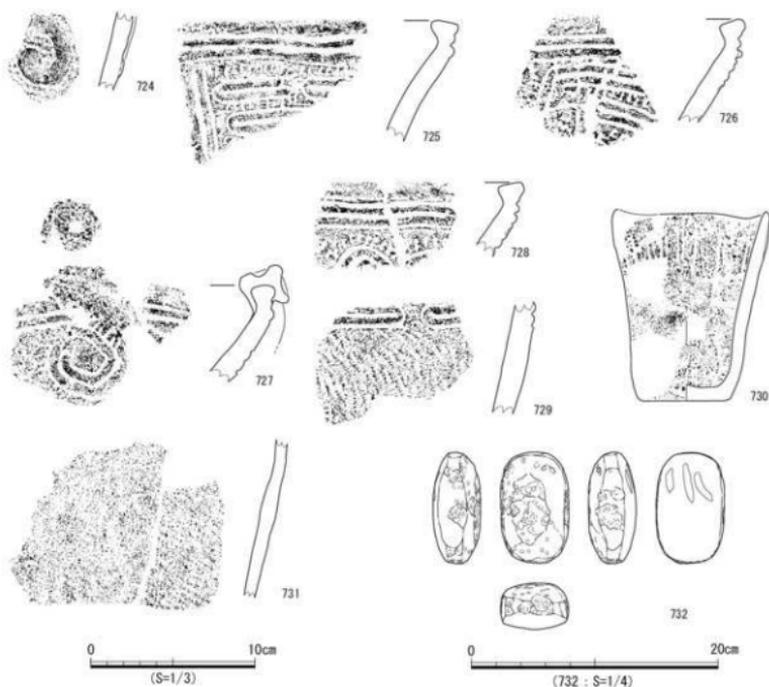


図 249 SI33 出土遺物

## SI34 (図 250・図 251)

**検出状況** AH5・AH6 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。西側に位置する竪穴建物 SI33・SI34 と重複関係があり、これらよりも古い。SI35 で説明するが、2基の遺構の重複を認識した可能性がある。このため南壁では幅の狭い平坦面があるが、これは2基の遺構の立ち上がりを確認したものと解釈する。平面形状は SI35 により掘方の大半が消失しているため不明であるが、残存部分は丸みをもつ。

**埋土** 東辺の壁際のみ確認でき、褐色土が2層堆積する。2層は炭化物、1層は褐色土ブロックを含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込み、壁面はやや開く。壁の残存高は最大で0.96mである。

**床面** 残存する床面はほぼ平滑で、南方向にやや傾斜する。床面で検出した遺構は、土坑2基、壁際溝1条、溝1条である。主柱穴は、掘方の形状から P3、SI35の床面の壁際溝より古い P2、SI35の炉の底面で検出した P4 とし、これらとの位置関係により SI35 床面で検出した P5 の計4基と考えられる。竪穴掘方の南壁に沿う壁際溝を1条確認した。また、この壁際溝と P3 の間に溝1を確認した。

**炉** 確認できなかった。

**埋壘** 確認できなかった。

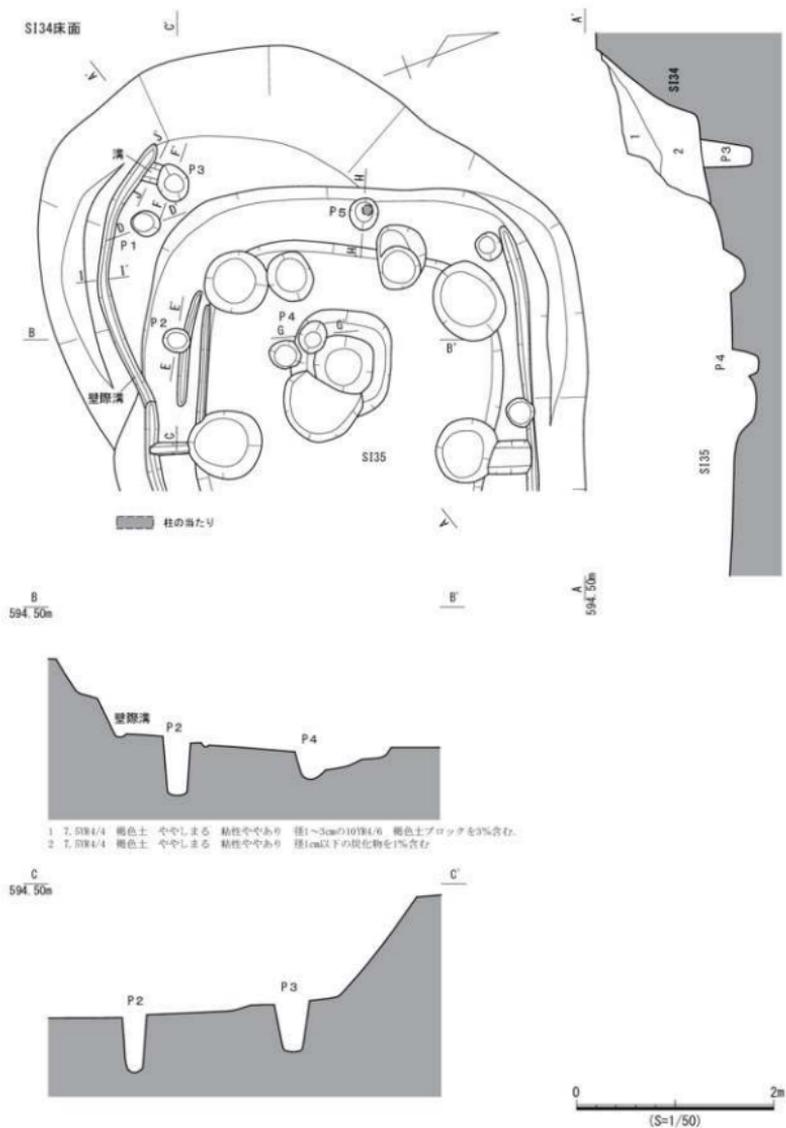


図250 S134遺構図(1)

床下 貼床は確認できなかった。

遺物出土状況 堅穴建物の埋土1・2層から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期中葉のものである。

出土遺物 733はC群3b1類で外面に半隆起線を施し、その間に横位の沈線を施す。734はC群7類で外面に半截竹管状施文具による平行沈線を施す。また、両面穿孔による補修孔を残す。

時期 重複関係は中期中葉のSI35より古く、中期中葉以前のSI33より新しい。また、出土土器に中期後葉の土器が認められないことから中期中葉の遺構と判断した。

#### SI35 (図252～図259)

検出状況 AG5～AH6グリッド、Ⅲ層上面で検出した。西側に位置する堅穴建物SI33と重複関係があり、これらよりも新しい。平面形は各辺が直線的な方形に近い、隅丸方形の形状をとる。

埋土 黒褐色土と暗褐色土と褐色土が13層堆積する。大半の土層中にブロック土を含み、11層はブロック土混じりの焼土層である。黒褐色土ブロックを含む2層の上面からSK577が掘り込まれることから1・2層はSI35と異なる堅穴建物の埋土の可能性があり、これらとSI34埋土を誤認した可能性がある。以上の土層を除くと、堅穴埋土は堅穴の西壁際から流入した堆積状況である。

壁 Ⅲ層を掘り込み、壁面はやや開く。壁の残存高は最大で1.12mである。

床面 ほぼ平滑で平坦である。堅穴掘方の底面中央に貼床(14層)が残る。貼床は褐色土が主体で炭化物を含み、ややしまる。床面で検出した遺構は炉1基、土坑18基、壁際溝1条、溝4条である。部分的ではあるが溝1・溝2・壁際溝が並行する点や、対ビットが2組存在する点から、柱配置は3通り考えられる。柱配置1では規模や掘方の形状が類似し、堅穴掘方の隅部に位置するP1・P2・P3・P4が主柱穴と考えられる。炉の位置から、堅穴の東側が入口の可能性が高く、壁際溝と対ビッ

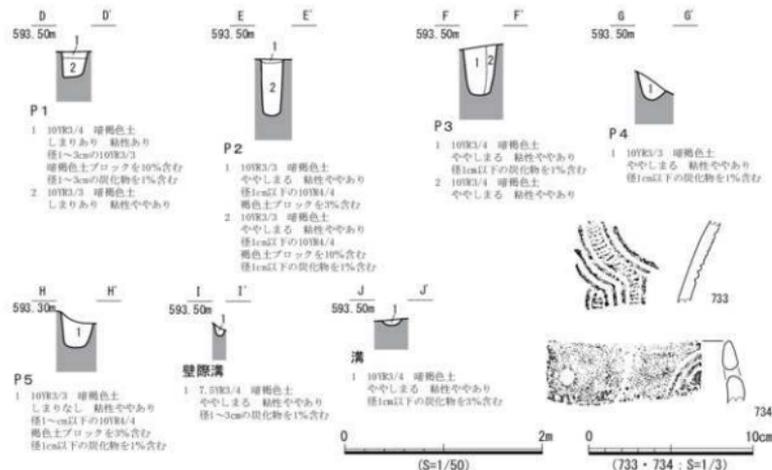


図251 SI34遺構図(2)・出土遺物

ト (P13・P15) の間にP11が配置される。また、溝3はP4と、また溝4はP2と各々壁際溝と連続することからも柱配置1に伴う。柱配置2ではP5・P8・P18が主柱穴と考えられるが、堅穴南西隅部では主柱穴を確認できなかった。溝1はP18の延長上に位置することから柱配置2に伴う。柱配置3ではP14・P19が主柱穴と考えられるが、堅穴北西隅部と南西隅部ではP1・P3により消失したと推測される。溝2はP14の延長上に位置することから柱配置3に伴う。なお、対ビット(P6・P17)は柱配置2・柱配置3のいずれか又は両者に伴うものか判断できない。

炉 炉1は掘方中央やや北西寄りで検出した。炉石の配置が方形の石囲炉である。土層観察から貼床

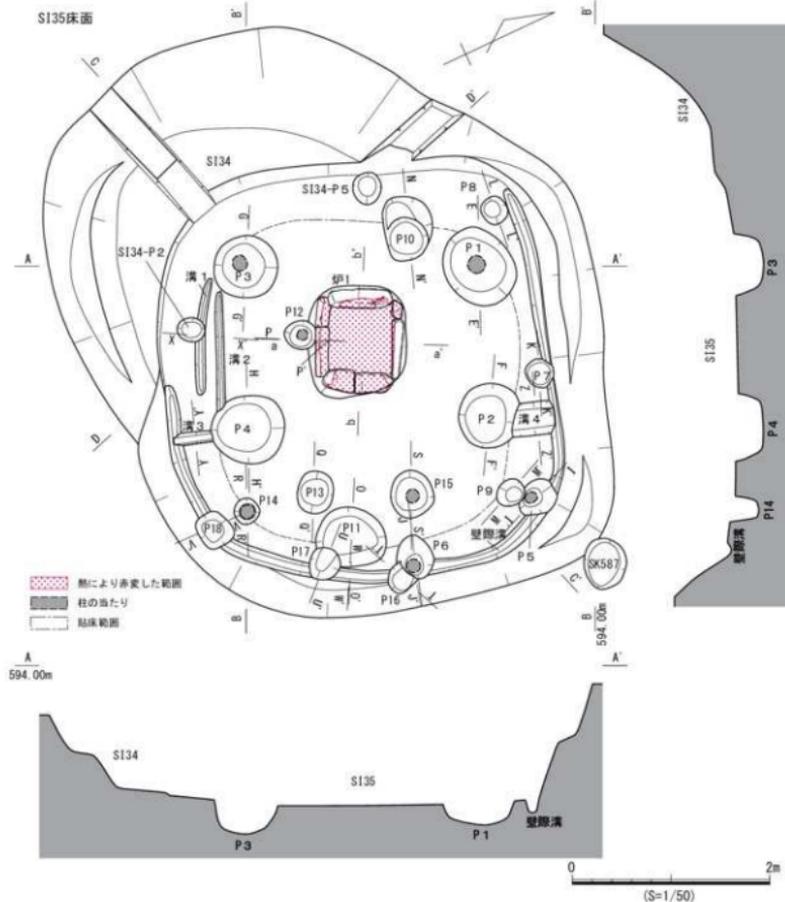


図252 SI35遺構図(1)

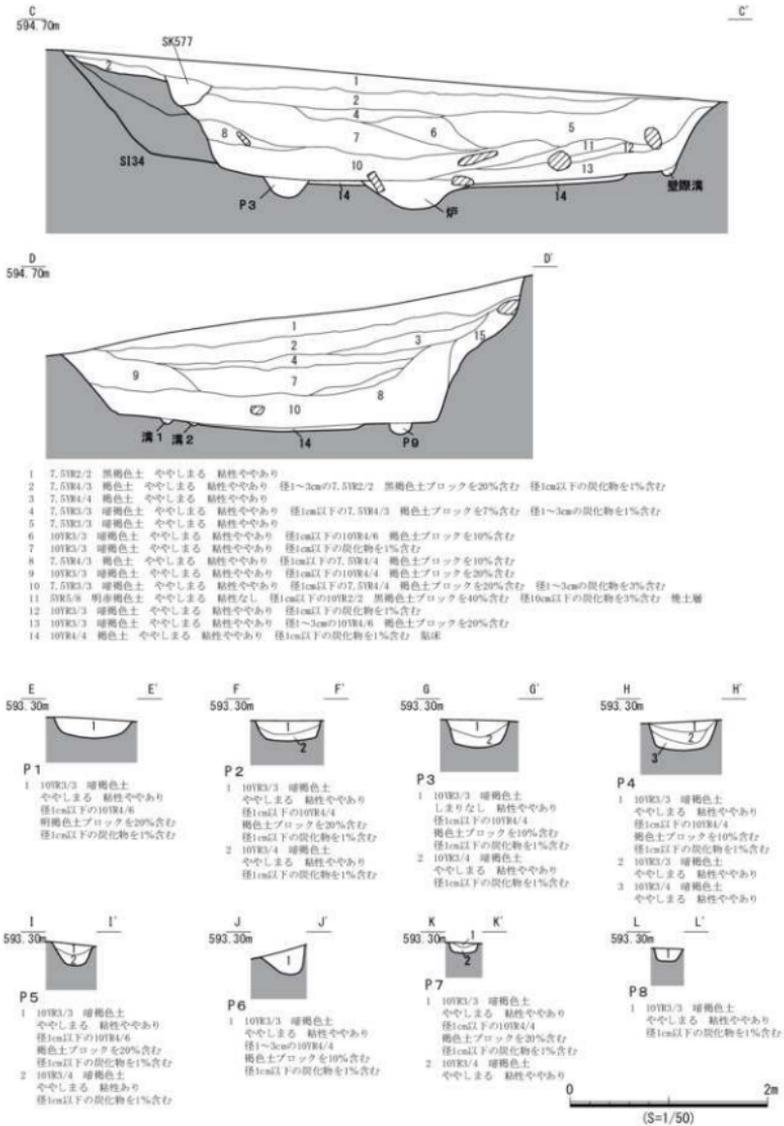


図 253 S135 遺構図 (2)

後に石囲炉を設置したと考えられる。礫は四方に長楕円礫を配置する。隅石はないが、北東側の楕円礫は長さを補充するように配置されており隅石の可能性もある。東辺の礫は平坦な面を上にした状態で設置する。いずれの炉石の内面にも熱による赤変が認められるが、東辺の礫については上面にも赤変が認められることから再利用された可能性がある。なお、中央部を火床としたとみられるが基盤面には明確な被熱は認められなかった。埋土のうち1・2層は埋土、3層は焼土、4層は炉石の掘方埋土である。遺物は出土しなかった。この石囲炉は柱配置1の中央に位置することから柱配置1に伴うと考えられる。

**埋壘** 確認できなかった。ただし、P11はSI25-P5との類似から「入口土坑」の可能性もある。  
**床下** 貼床除去後、掘方底面で炉石1基(炉2)、土坑1基(P19)、SI34-P2・P4を確認した。炉2では掘方底面に熱による赤変が認められたが、炉石の抜き取り痕跡は認められなかった。炉1と

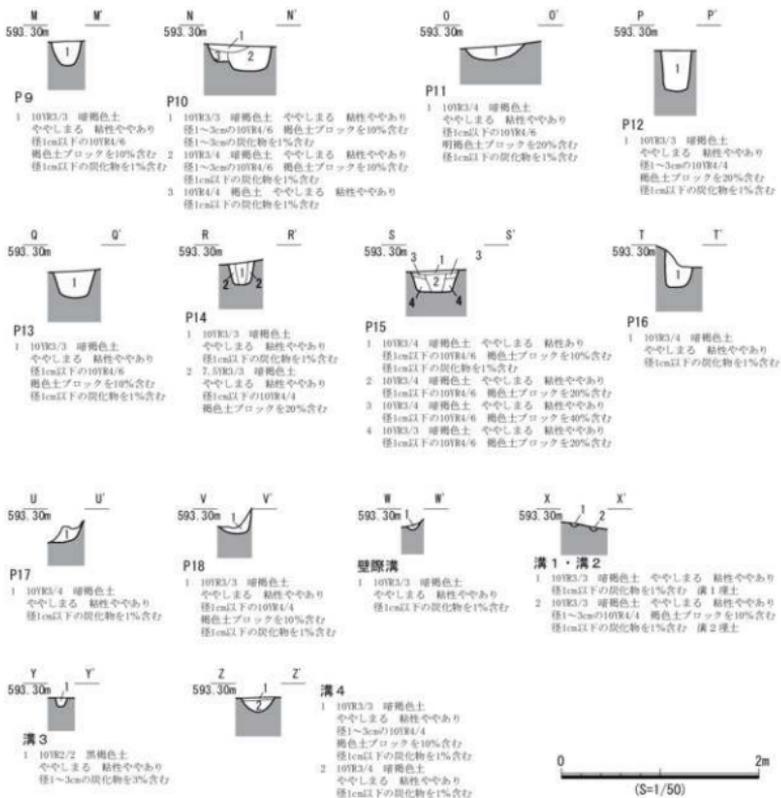


図254 SI35遺構図(3)

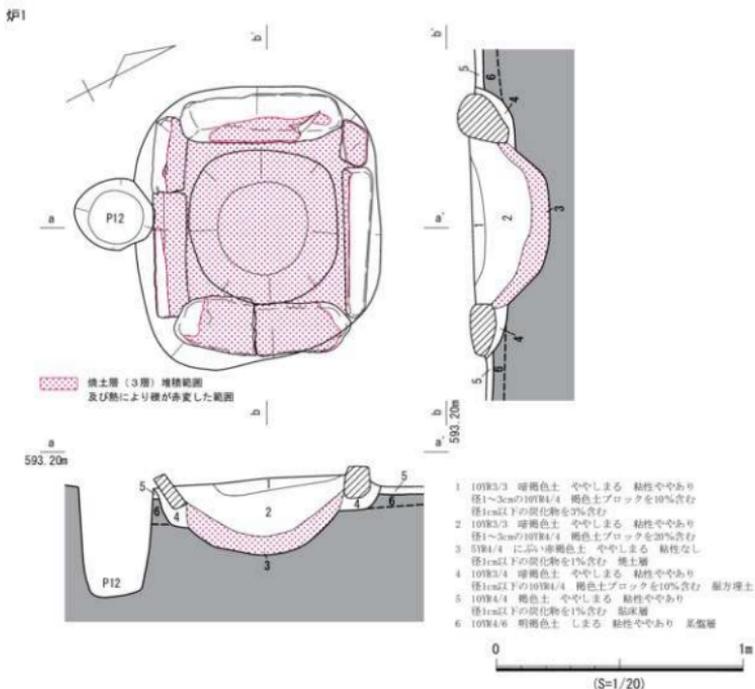


図 255 S135 遺構図 (4)

の重複関係から炉1に先行することが明白であるが、柱配置2・柱配置3のいずれか又は両者に伴うものか判断できない。

**遺物出土状況** 738・741・756・757が床面直上で出土した(図257)。出土位置は738が掘方南東部P17付近、741が掘方南部P4付近、756・757が掘方北東部P1付近である。また、堅穴建物の埋土から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉と中期中葉と後葉のものがあるが、ほとんどは中期中葉である。この他に炉から735、P19から747が出土した。

**出土遺物** 735~739はC群1a3類である。735は外面に隆帯による区画文を施し、区画内に縦方向の沈線を施す。736は頭部外面に隆帯を2条平行に施す。737は外面に横方向の隆帯を施し、その下方に縦方向の隆帯を垂下させ、その周囲に縦方向の沈線を密に施す。738は頭部外面に隆帯を2条巡らし、隆帯間に波状沈線を施す。頭部の隆帯より下方は隆帯による渦巻文と楕形文を施す。胴部下半は縦方向の条線を密に施す。739は胴部外面に縦方向の条線を密に施す。底部外面に網状痕を残す。740~742はC群1c2類である。740は口縁部の外面に隆帯による渦巻文と横位の区画文を施す。区画内に斜行沈線を施す。胴部外面は縄文と渦巻文から伸びる縦方向の沈線を2条施す。741・742は外面に

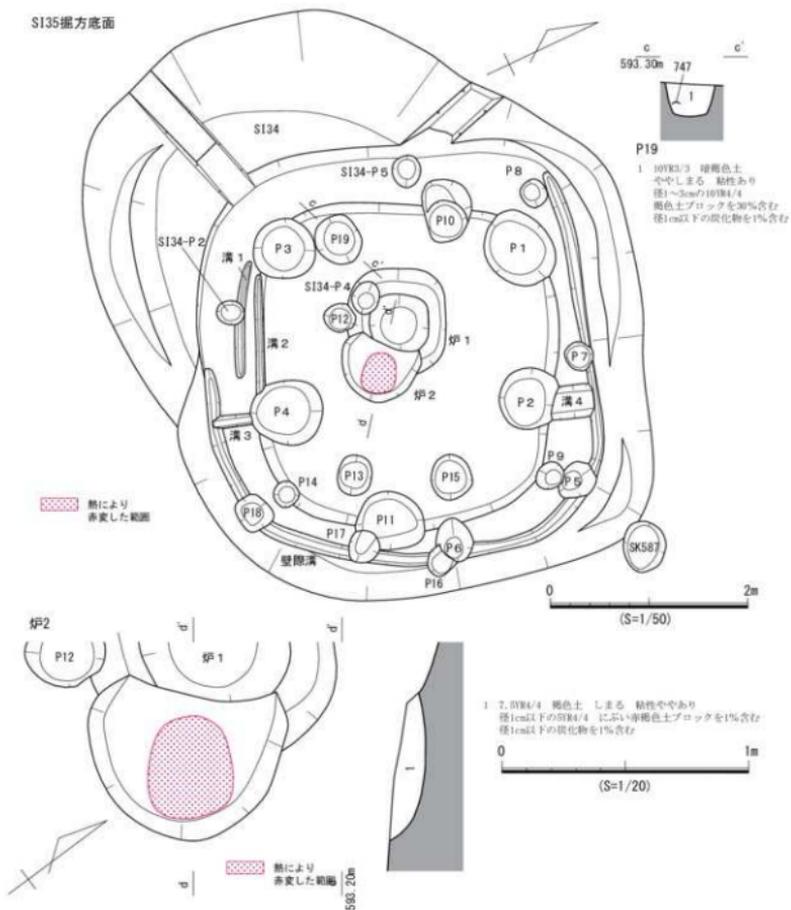


図256 SI35遺構図(5)

綾杉状沈線を施す。743・744はC群2 b類である。743は縄文地の外面に波状の隆帯を施す。744は撫糸文地の外面に曲線の隆帯を貼付する。745・746はC群3 b 1類である。745は外面に基本隆帯と半隆起線による渦巻文を施す。746は外面に半隆起線による曲線文と棒状工具による刺突文を施す。747はC群3 b 2類で半隆起線による渦巻文と横位の区画文を施す。区画内に縦位の沈線を施す。748はC群3 b 3類で口縁部外面に半截竹管状施文工具による平行沈線を施す。沈線より下方に櫛歯状工具による刺突文を施す。749・750はC群10類である。749は外面に口縁部と平行する半隆起線を1条施す。750は外面に基本隆帯と沈線を施す。751はC群11類で外面の胴部と台部との境に押圧を有する

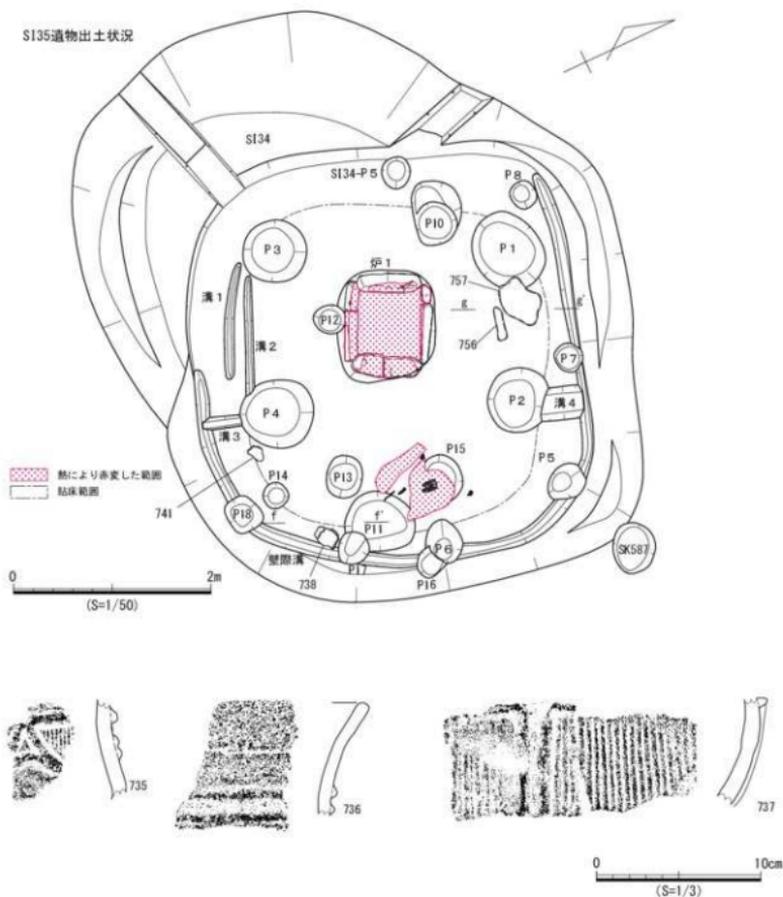


図 257 S135 遺構図(6)・出土遺物(1)

隆帯を貼付する。752はC群12類で外面に横位の橋状把手と微隆起線文を施す。753は石錘である。扁平円礫を利用し、長軸両端を剥離することで袂りを入れる。754・755は磨石・敲石類である。754は表裏面に敲打痕・磨痕、両側面に磨痕、上面・下面に敲打痕を残す。755は表面に磨痕、右側面・上面・下面に敲打痕を残す。756・757は石皿である。756は長槽円礫を利用した石皿で表面と下面に敲打痕を残す。757は扁平円礫を利用した平板の石皿で表面に磨痕を残す。

**時期** 中期中葉以前のS133、中期中葉のS134より新しい。床面直上から出土した土器(738)や床面検出遺構から出土した土器(735・747)から中期中葉と判断した。

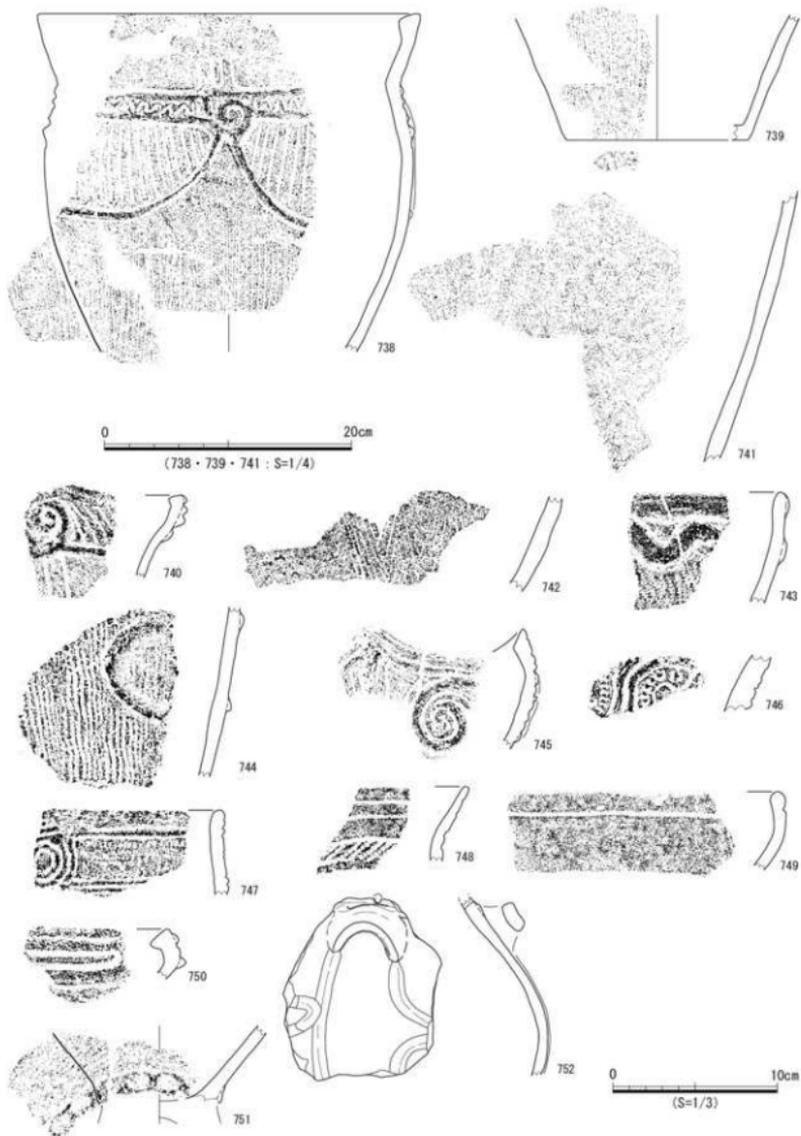


図 258 S135 出土遺物 (2)

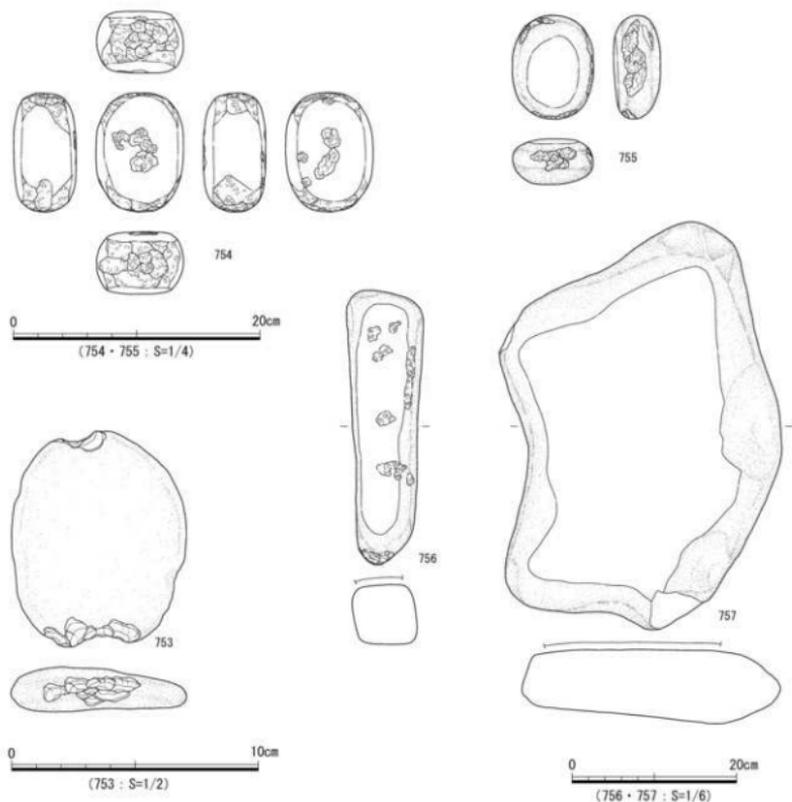


図 259 S135 出土遺物 (3)

## S137 (図 260・図 261)

**検出状況** AF 8～AG 9 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SK626 と重複関係があり、SK626 よりも古い。傾斜地の下方の床面が消失しており、削平された可能性がある。平面形は南辺と北辺が直線的で、西辺が丸みをもつ不定な形状である。

**埋土** 暗褐色土が 1 層堆積し、埋土中に炭化物を含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込み、壁面は大きく開く。壁の残存高は最大で 0.18m である。

**床面** 平滑であるが、地形に沿って東方向に傾斜する。床面で検出した遺構は土坑 11 基である。掘方の形状が類似し、床面上にほぼ等間隔で配置される P 1・P 4・P 8 と掘方外の P 12 を含めた 4 基が主柱穴と考えられるが、P 8-P 4 間の P 6 と P 4-P 1 間の P 11 もその可能性がある。ほかに P 3・P 5・P 7・P 10 が半円形に配置されており、建替え又は上屋構造と何らかの関係があると考えられ

る。壁際溝は確認できなかった。

炉 確認できなかった。

埋壘 確認できなかった。

床下 貼床は確認できなかった。

**遺物出土状況** 竪穴建物の埋土 a・b 層、床面から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉と中期中葉から中期後葉であるが、ほとんどが前期後葉のものである。

**出土遺物** 758 は C 群 7 類で胴部外面に縦方向の沈線を施す。底部外面に網代跡を残す。759 は丸玉で、穿孔は両面穿孔である。

**時期** 重複関係のある SK626 は中期後葉以降の遺構であり、これより古い。重複関係や出土土器から中期後葉の遺構と判断した。

S137床面

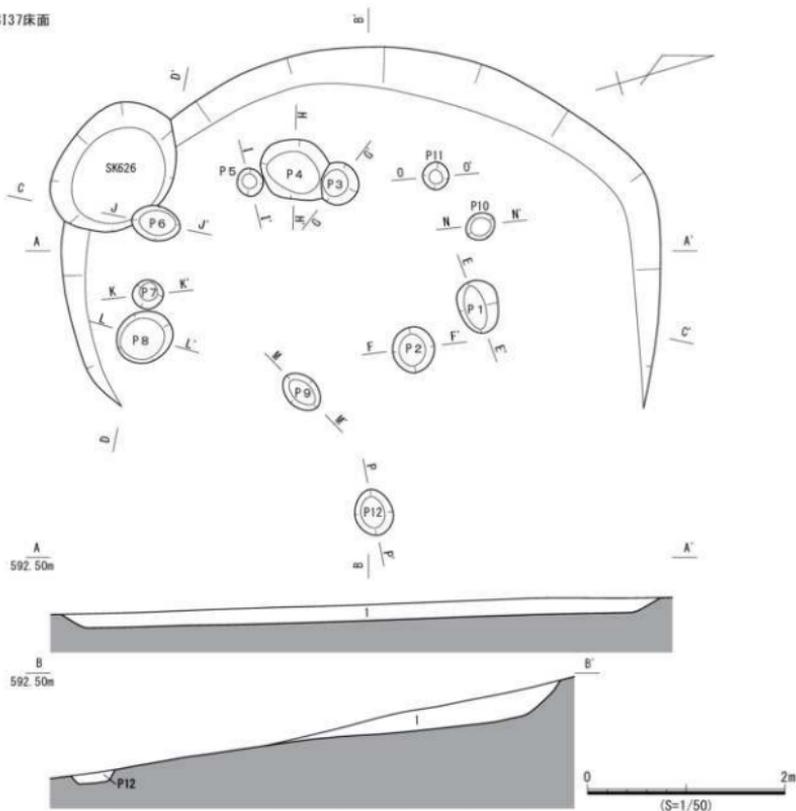


図 260 S137 遺構図 (1)

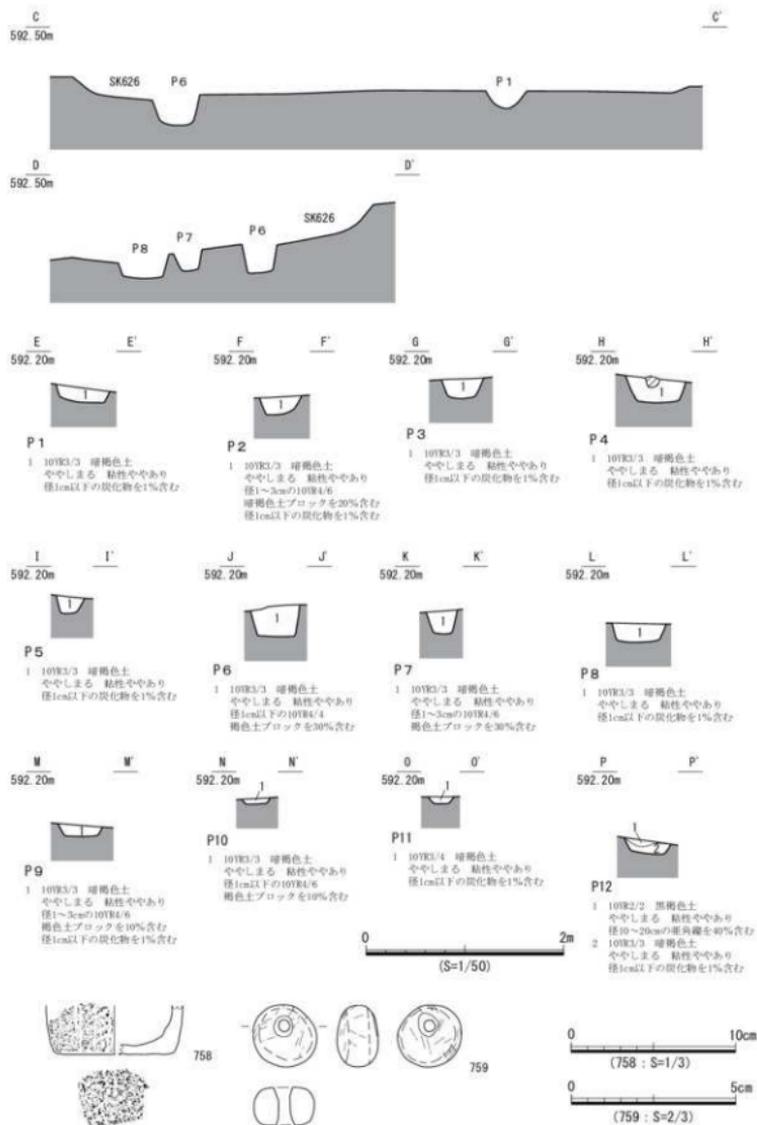


図 261 S137 遺構図(2)・出土遺物

## S138 (図 262～図 264)

**検出状況** AH9～AI10 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SK632・SK633・SK639・SK642 と重複関係があり、SK633 より古く、SK632・SK639・SK642 よりも新しい。平面形は東辺・西辺・南辺の3辺が直線的で、長方形に近い形状をとる。

**埋土** 暗褐色土が1層堆積する。埋土中に褐色土ブロックや炭化物を含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込み、壁面は緩やかに開く。壁の残存高は最大で0.23mである。

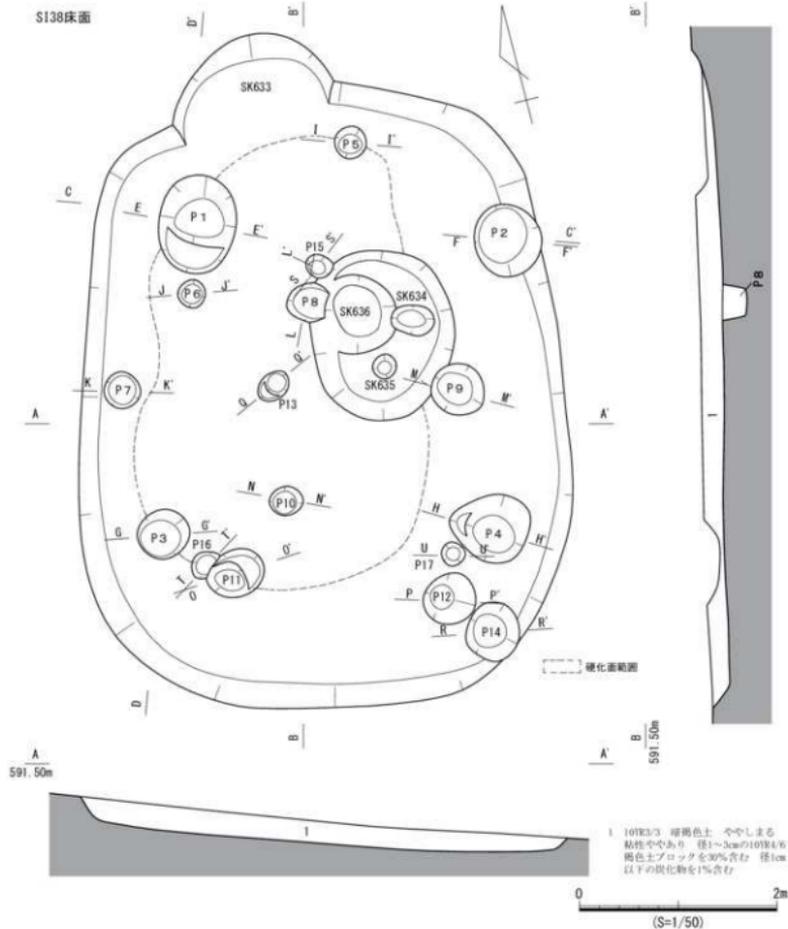


図 262 S138 遺構図 (1)

**床面** ほぼ平滑であるが東方向に傾斜する。貼床はないが、堅穴掘方の中央からやや西寄りに硬化が認められる。床面で検出した遺構は土坑 17 基である。堅穴建物の掘方の下端と重複する P2 は、地形の傾斜により、東辺掘方の一部が削平されて本来の掘方の上端ではない可能性があるため S138 に関連する遺構に含めた。堅穴建物掘方の四隅に配置され、掘方の形状・規模が類似する P1・P2・P3・P4 を主柱穴とした。このうち P3・P4 では柱痕跡を確認した。また、柱痕跡を確認した P11 と P12、また P16 と P17 は各々掘方の規模が類似し対になる位置関係にあり、上屋構造と何らかの関係が

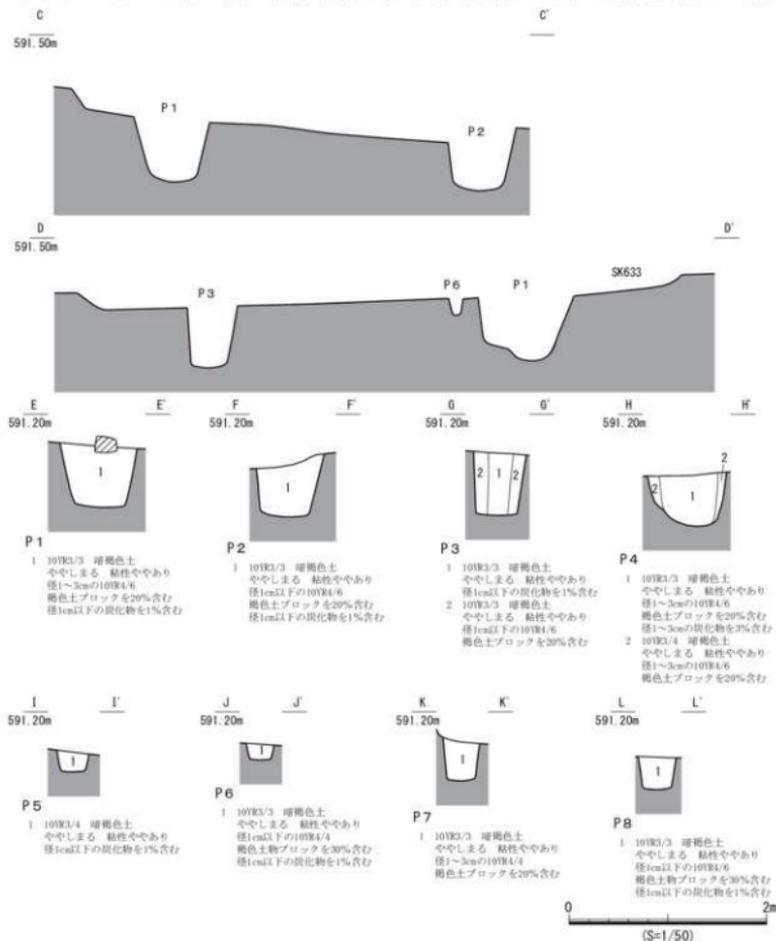


図 263 S138 遺構図 (2)

ある可能性がある。壁際溝は確認できなかった。

炉 確認できなかった。

埋壙 確認できなかった。

床下 貼床は確認できなかった。

遺物出土状況 堅穴建物の埋土 a・b・1層、床面から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。

時期が特定できる土器は、すべて中期後葉のものである。この他にP4から760~763が出土した。

出土遺物 760~763はC群1c2類である。760・762は外面が無文である。胎土や器厚が類似するため同一個体の可能性がある。761は外面に隆帯と沈線による渦巻文と連続刺突文を施す。763は外面に綾杉状沈線文を施す。

時期 重複するSK642は中期前葉以降の遺構であり、これよりも新しい。重複関係やP4から出土した土器から中期後葉の遺構と考える。

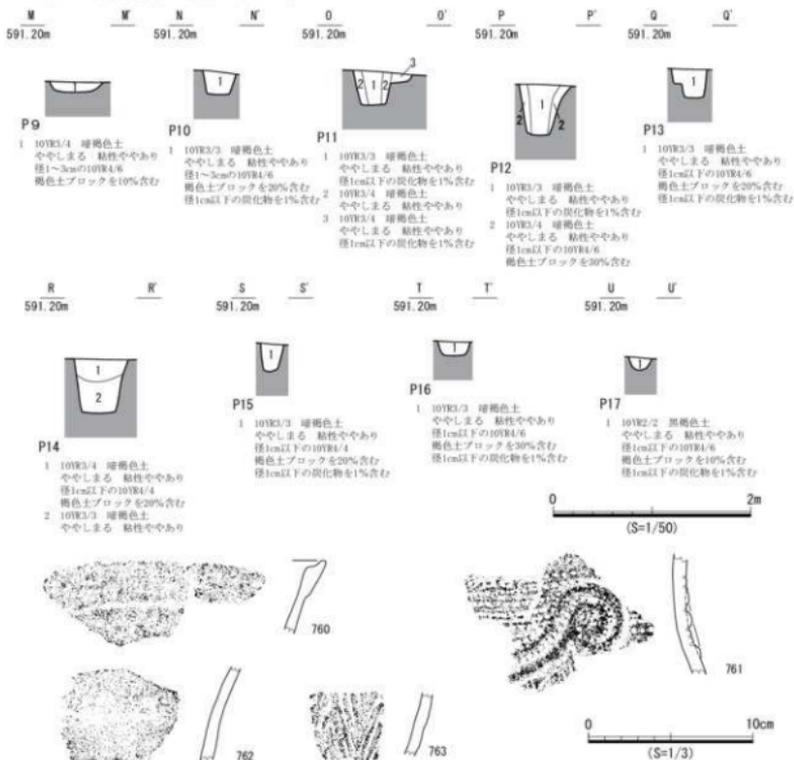


図 264 S138 遺構図 (3)・出土遺物

## SI39 (図 265～図 267)

**検出状況** AH10～AI11 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形は、残存する北辺と南辺は直線的であるが西辺は若干丸みをもつ、不定な形状である。

**埋土** 暗褐色土が1層堆積する。貼床層はない。埋土中に褐色土ブロックや炭化物を含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込み、壁面は大きく開く。壁の残存高は最大で0.22mである。

**床面** ほぼ平滑である。標高が低い南東側の掘方は残存しないことから、SI39の南東側の掘方や床面は削平された可能性がある。掘方西部の床面に硬化が認められる。床面で検出した遺構は土坑23基である。掘方の規模や形状が類似し、掘方の西辺で対応するP1・P18と掘方の東側で対応するP4・P5を主柱穴とした。これらのうち、P1・P3・P5で柱痕跡を確認した。壁際溝は確認できなかった。

**炉** 確認できなかった。

**埋壘** 確認できなかった。

**床下** 貼床は確認できなかった。

**遺物出土状況** 竪穴建物の埋土a・b・1層から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉から中期後葉までであるが、前期後葉のものが多く、この他にP2から764が出土した。

**出土遺物** 764はC群1c2類で外面に隆帯と平行沈線による渦巻文を施す。765はC群8類で外面に櫛歯状工具による条線を施す。766はC群10類で内湾する口縁部の外面に口縁と平行する半隆起線を施す。半隆起線の間に鋸歯状の印刻文を施す。767は石核である。剥片を利用し、表裏面を作業面としながら剥片剥離を行う。

**時期** 出土土器から中期後葉以降の遺構と考える。

## SI41 (図 268～図 270)

**検出状況** AI5～6 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。西側にあるSI40・SI42と重複関係があり、SI40・SI42よりも新しい。平面形は各辺が直線的な方形に近い隅丸方形の形状をとる。

**埋土** 暗褐色土が6層堆積する。6層は南壁際、3・5層はほぼ水平に堆積し、4層はその間層として中央部のみ認められる。1・2層は掘方北部の上層に認められる。1・3・5層は埋土中に褐色土ブロック、2・4・6層は炭化物を含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込み、壁面は直立する。壁の残存高は最大で0.54mである。

**床面** ほぼ平滑で、わずかに南方へ傾斜する。貼床は褐色土で、掘方底面の中央部に敷設されているが、一部北壁に接する。床面で検出した遺構は炉1基、土坑15基、壁際溝1条、溝3条である。炉の位置から竪穴建物の東側が入口の可能性が高い。竪穴の四隅に近い位置に配置されるP1・P2・P3・P4あるいは、P2・P5・P11・P14が主柱穴と考えられる。P2は一つの遺構としたが、断面で見ると明らかに2つの遺構であり、2時期の柱穴が重なっていることも考えられる。ただし、対応するP5と同様に、柱穴の掘方としては若干浅い。両者が建て替えの痕跡とすれば、重複から後者の方が新しい。なお、P1～P3・P5～P7・P13で柱痕跡を確認したが、P6については上層構造との関係は不明である。この他、北壁下端のやや内側で壁に沿う溝、北辺で主柱穴P1・P2と壁際溝をそれぞれ結び仕切り溝1・2・3を確認した。北壁に沿う溝は貼床の外周にも沿うことから、

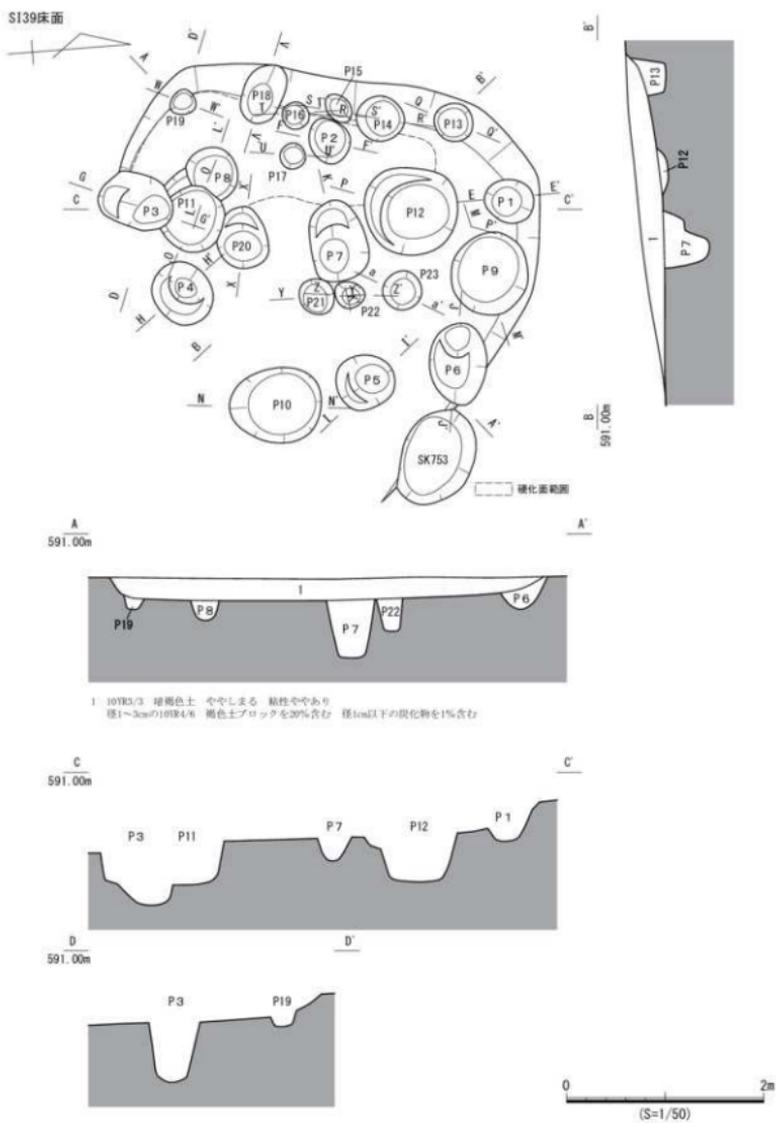


図 265 S139 遺構図 (1)



図 266 S139 遺構図 (2)

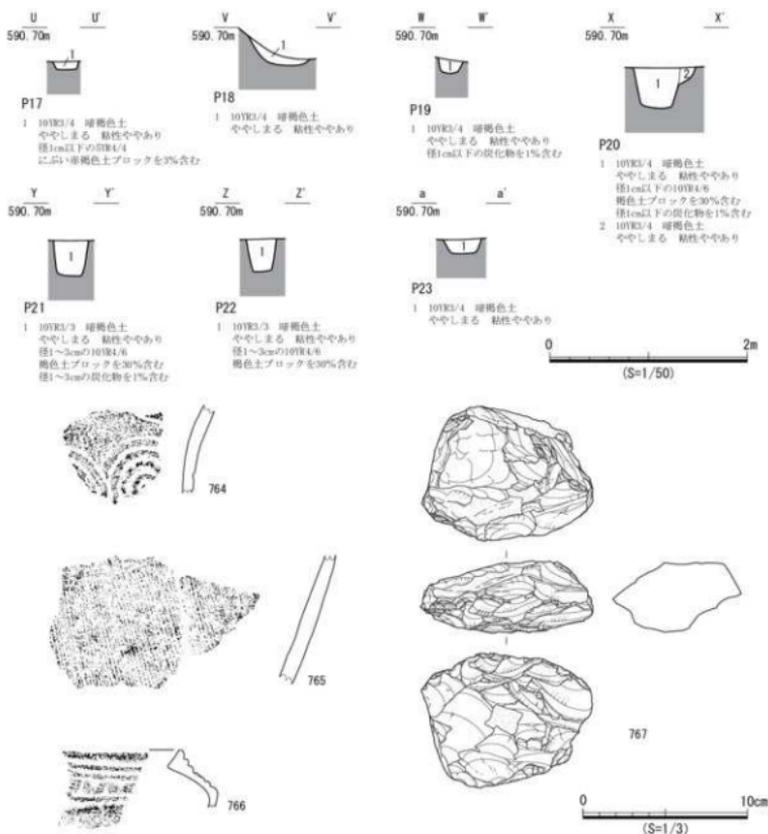


図 267 SI39 遺構図 (3)・出土遺物

建て替え前の壁際溝の可能性があり、その後掘方自体が拡張された可能性がある。

**炉** 建物中央部やや西寄りで見つかった石囲炉を抽出した。炉石内側の平面形は東西に長い長方形であり、入口側を東とみた場合、その軸に平行する方が長いことになる。貼土敷設後、石囲炉より一回り大きい掘方を掘削して礫を設置した後に土を充填し、中央部を火床としたとみられる。炉石は四方に直径が類似する長楕円礫を配置し、入口方向の角にのみ小礫を充填する。石囲炉の中央部に焼土が堆積する窪みがあるが、基盤面には明確な被熱は認められなかった。

**埋壘** 埋壘は確認できなかったが、P7が「入口土坑」と思われる。

**床下** 貼土除去後、掘方底面で遺構は確認できなかった。

**遺物出土状況** 堅穴建物の埋土c・e・g・i・l・4~6層・床面から縄文土器や石器が散在した

S141床面

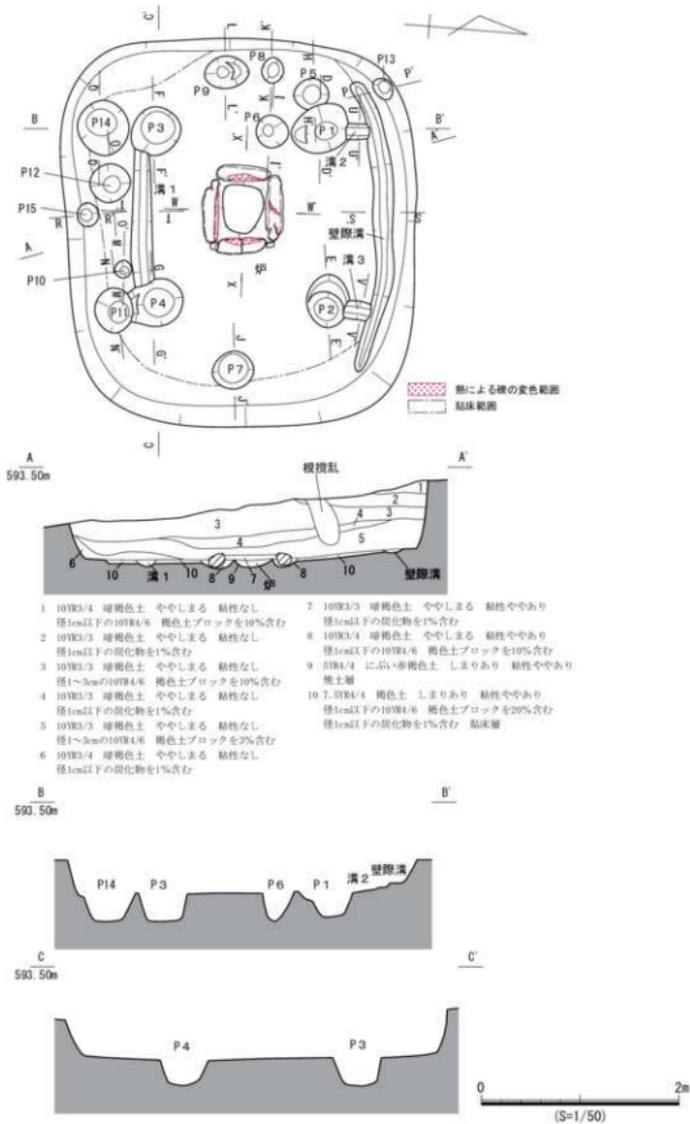


図 268 S141 遺構図 (1)



図 269 S141 遺構図 (2)

状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉と中期後葉であるが、床面遺構出土土器を含めてほとんどが中期後葉のものである。

**出土遺物** 768はZ 2群15類の複段内湾浅鉢で外面に半裁竹管状施文具による連続爪形文で入組木葉文を施す。口縁部が折れ曲がり、この屈曲部外面に沈線を施す。沈線より下方に多孔円孔が巡る。769・770はC群1c 2類である。769は外面に隆帯と連続刺突文・綾形沈線文を施す。770は外面に燃糸状突起が付く。また、低い隆帯や押引状刺突文・沈線文・交互刺突文を施す。771はC群2b類で外面に隆帯と連続刺突文・平行沈線を施す。772はC群3b 1類で外面に隆帯と半隆起線を施す。773はC群5a類で口唇部内外面に連続爪形文、口縁部外面に幅広の連続爪形文を施す。774はC群6類のミニチュア土器で外面に斜行沈線文を施す。775はC群10類で口縁部の外面に半隆起線を施す。776・777は打製石斧である。776は横長の剥片を利用し、縁辺を中心に直線的に剥離調整する。777は扁平礫を利用し、縁辺・基部・刃部に剥離調整する。778は磨石・敲石類で表裏面に磨痕・敲打痕、上部・下部に敲打痕を残す。

**時期** 遺構の重複関係は前期後葉以降のS140・S142より新しい。重複関係及び出土土器から中期後葉以降の遺構と判断した。

#### S146 (図 271・図 272)

**検出状況** AJ4～AK5グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SK685と重複関係があり、SK685よりも古い。平面形は各辺が直線的な隅丸方形に近い形状をとる。

**埋土** 暗褐色土が2層堆積し、埋土中に褐色土ブロックや炭化物を含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込み、壁面はやや開くが直立に近い。壁の残存高は最大で0.62mである。

**床面** ほぼ平滑で、南方向に傾斜する。床面で検出した遺構は、炉1基、土坑9基である。堅穴内の位置関係や掘方の形状から、P1・P2の2本柱とP3・P4・P7・P9の4本柱が候補に挙げられるが、後者はP9が堅穴掘方と重複することや、S146の掘方と若干軸が異なることから、後者を支柱穴とする別の堅穴建物を見落とした可能性がある。なお、P1とP9で柱痕跡、P2・P9で柱の当たりを確認した。壁際溝は確認できなかった。

**炉** 堅穴建物のほぼ中央で炉を検出した。浅い掘り込みのある地床炉で、焼土が堆積する。底面全体に熱による赤変が認められる。P5と重複するが、P5の性格は不明である。

**埋裏** 確認できなかった。

**床下** 貼床がないため、床下の調査は実施していない。

**遺物出土状況** 堅穴建物の埋土c・d・1・3層・床面から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、すべて中期前葉のものである。

**出土遺物** 779～782はC群5a類である。779は波状口縁で、外面にI字爪形文と円形刺突文列を施す。780は外面に刻みのある突帯とI字爪形文を施す。781は内面の頸胴部界に稜をもつ。外面にI字爪形文を施す。782は外面に縦長の節の目立つ縄文を施す。783・784石匙である。783は横長の剥片を素材とし、下部に外湾する刃部を作り出す。784は横長の剥片を素材とし、下部に直線的な刃部を作り出す。785は磨石・敲石類で表裏面に敲打痕・磨痕、両側面と上面・下面に敲打痕を残す。

**時期** 遺構の重複関係があるSK685は時期不明遺構である。出土土器から中期前葉以降の遺構と判断した。

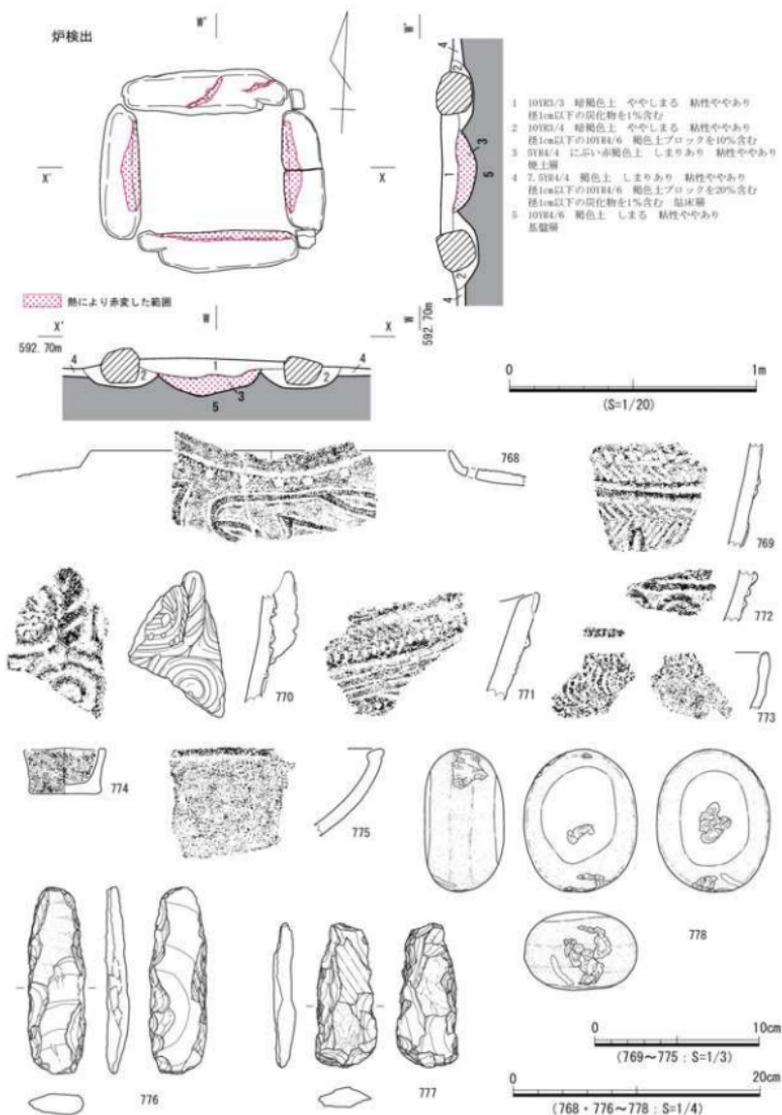


図 270 S141 遺構図 (3) ・出土遺物

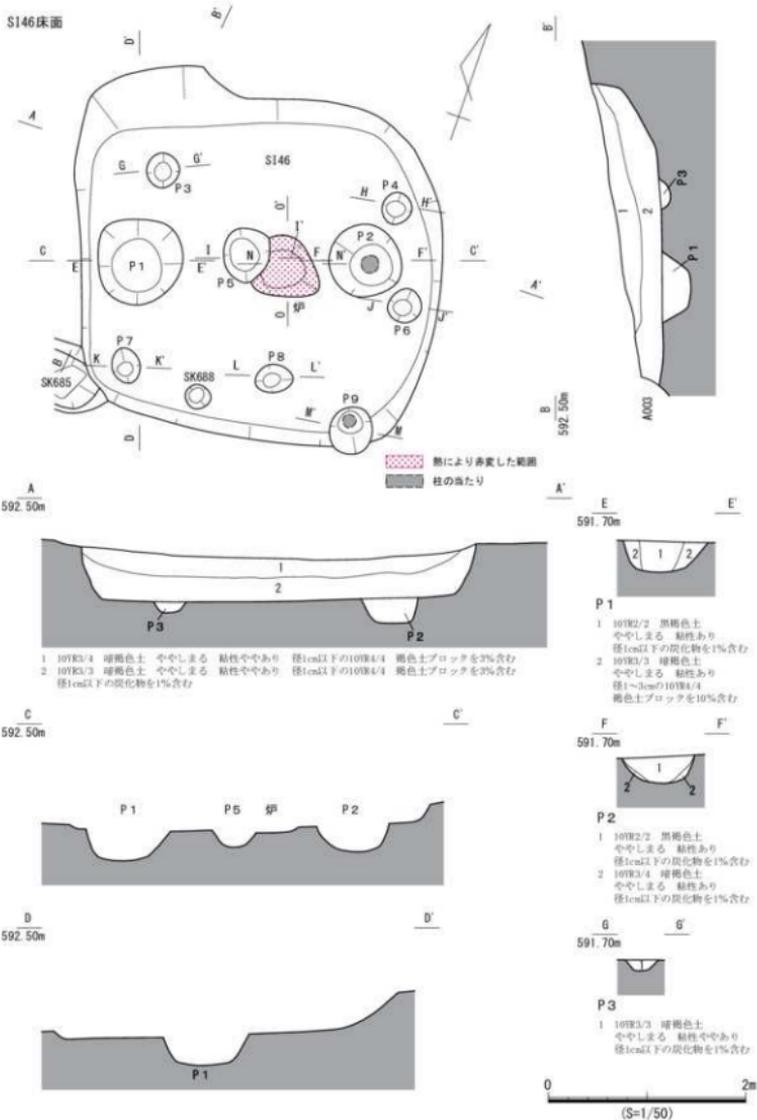


図 271 S146 遺構図 (1)

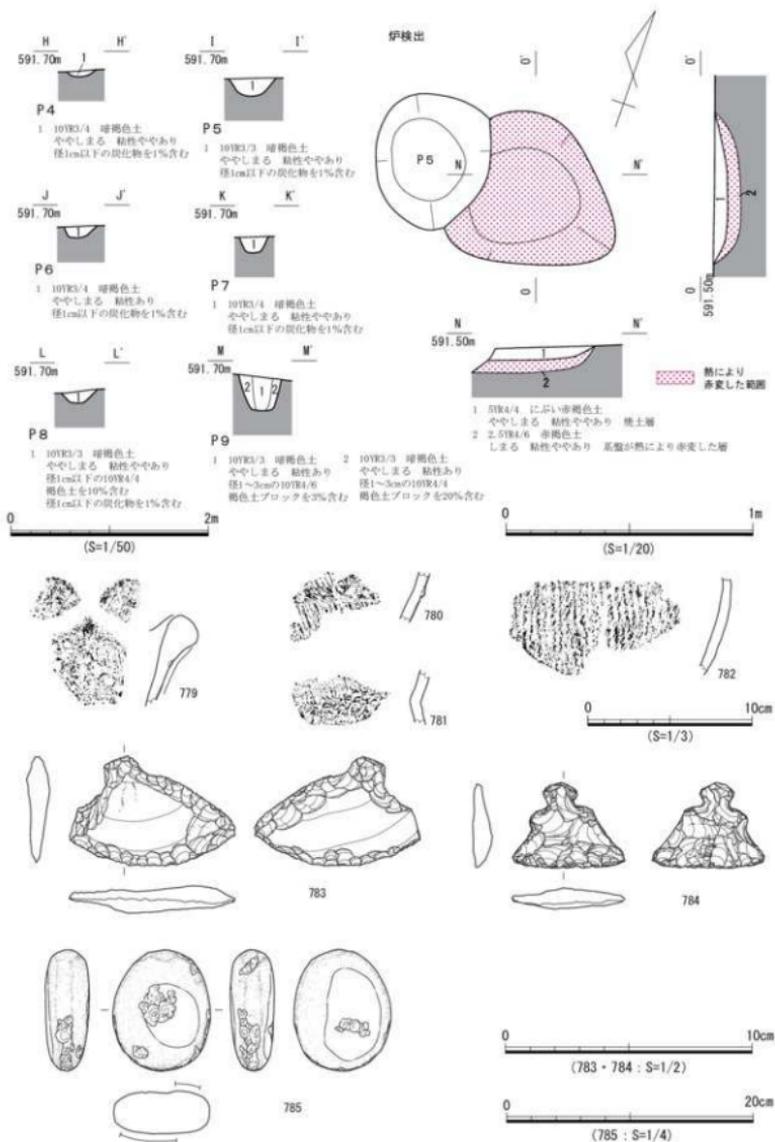


図 272 S146 遺構図 (2)・出土遺物

## SI48 (図 273～図 281)

**検出状況** AI11～AJ12 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。北部はSK348、南部はSI55と重複し、SK348より古くSI55よりも新しい。平面形や遺構の重複、床面遺構の状況から、本来SI48の平面形は円形に近い形状であり、重複するSI55の床面の高さが偶然SI48と類似していたことも災いして、南側のプランを掘り広げてしまった可能性がある。

**埋土** 黒褐色土と暗褐色土が7層堆積する。壁際埋土がやや傾斜して堆積する。遺構の東西や北側から流れ込んだような堆積が認められる。埋土中に1～3・5～7層は褐色土ブロック、1・2層は炭化物、4層はにぶい赤褐色土ブロック(焼土)を含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込み、壁面は直立気味に立ち上がる。壁の残存高は最大で0.72mである。

**床面** ほぼ平滑で、南東方向にわずかに傾斜する。床面で検出した遺構は、炉1基、土坑35基、壁際溝2条、その他の溝7条である。主柱穴は複数の候補がある。まず、P1・P2・P3・P4という4本柱の配置である(柱配置A)。この配置の軸方位は、溝3や溝4と揃う。また、同じ4本柱の配置で、P2・P5・P17・P21(柱配置B)とP5・P6・P7・P16(柱配置C)が考えられる。柱配置Aと柱配置CではP2が重複しているが、同じ位置で柱が重複したと思われる。P5については掘方底面が2段になっているため、2基の遺構の重複を見落としたと考える。柱配置BとCでは、P6とP17、P7とP21の重複から、Bの方が古い。また、柱配置B・Cの軸方位と一致する溝は溝1・溝5・溝6・溝7であるが、溝5よりP4の方が古いことから、柱配置A→Bが想定される。以上から、柱配置はA→B→Cの順に変遷したと推定される。なお、床面で検出した溝のうち、P17と重複する溝3は性格不明、溝2は掘り過ぎた掘方南部の壁面に伴う壁際溝の可能性もある。この他、P21に接する位置で検出した溝は、SI44の調査中に検出したSI55の貼床に沿うことから、SI55の壁際溝と判断した。壁際溝は南辺を除く範囲で確認したが、先述したように溝2は壁際溝の一部である可能性がある。また、壁際溝1の南端が掘方内側へわずかに屈曲するが、この部分が掘り過ぎる以前の掘方壁面の位置なのかもしれない。なお、掘方に沿って壁際溝と重複する小穴(P9など)が複数認められるが、堅穴建物の構造との関係は不明である。

**炉** 床面中央部で石囲炉を検出した。石囲炉より一回り大きい掘方を掘削した後に、環状に礫を配置し、その外側に暗褐色土を充填する。礫はすべて濃飛流紋岩の川原石であり、主となる5つの礫の長軸によって平面形が五角形となる火床を作出するが、北東部と南東部及び東部の空間に小礫が充填されている。また、東端には、火床に関係しない配石が存在する。石囲炉の内側には焼土が堆積するが、基盤上面に明瞭な被熱痕は認められなかった。

**埋壘** 確認できなかった。

**床下** 貼床がないため、床下の調査は実施していない。

**遺物出土状況** 床面直上の北端と南端で、深鉢が口縁部を下にした状態で出土した(801)。この他に床面直上で深鉢の破片(789・803・805)がまとまって出土したが、完形になるものは認められなかった。また、804などに隣接して石皿(817)が出土した。使用面が上を向いた状態で出土したものの出土位置が掘方壁面に近いことから、使用状態はとどめていないと考えられる。床面検出遺構のP13から788が出土した。これ以外は堅穴建物の埋土a～g・j・3・4層・床面から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期中葉から中期後葉であるが、ほとんどが中期

中葉のものである。

**出土遺物** 786 はC群4 a 類で屈曲した口縁部の外面に縄文と半截竹管状施文具による区画と、区画内縁に沿って楔状の刺突を施す。口縁部内面は肥厚する。787~792 はC群1 a 3 類である。787 は外面に隆帯による区画を施し、区画内に斜行する平行沈線を施す。788・789 は楕円形土器で胴部外面に隆帯による楕円形区画を施し、その内側に縦方向の平行沈線を施す。790 は頸部外面に口縁と平行する隆帯、口縁部から頸部の隆帯にかけて斜格子状の隆帯を貼付する。791・792 は外面に横位の隆帯を貼付し、それより下方に縦方向の平行沈線を施す。793・794 はC群1 c 1 類である。793 は外面に斜格子状の隆帯を貼付する。794 は外面に平行沈線による縦位区画文と横位沈線文を施す。795~797 はC群1 c 2 類である。795・796 は外面に隆帯と沈線による渦巻文と縦方向の沈線文を施す。797 は外面に平行沈線による綾杉状の沈線文を施す。798 はC群2 a 類で外面に横位の幅広く低いリボン状突帯を貼付する。突帯より下方は隆帯と平行沈線による曲線状の文様を施す。2 条の隆帯間に押引状刺突文を施す。799・800 はC群2 b 類である。799 は外面に隆帯と平行沈線による曲線状の文様を施す。800 は外面に低い隆帯による曲線状の文様を施す。801 はC群3 b 1 類で外面に爪形文付の基本隆帯に

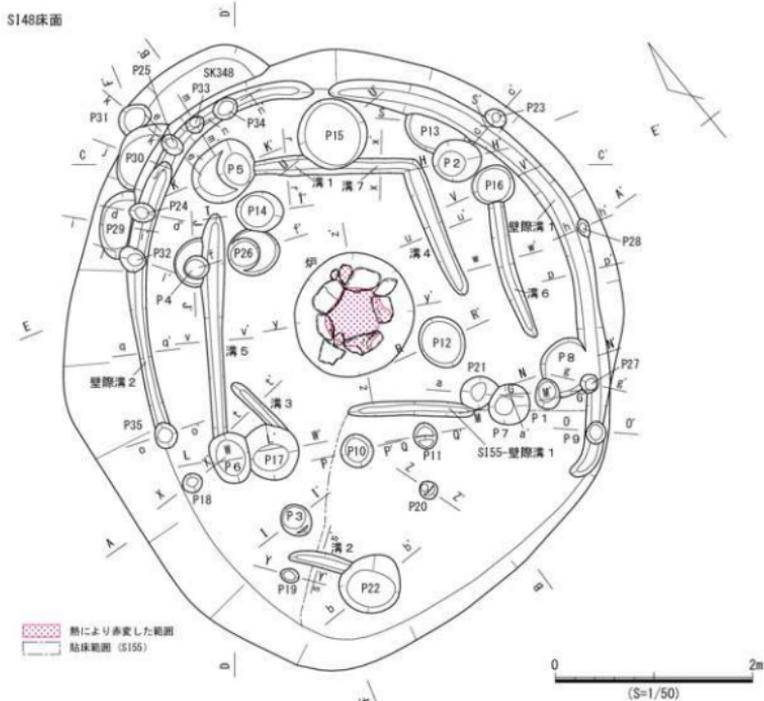


図 273 S148 遺構図 (1)

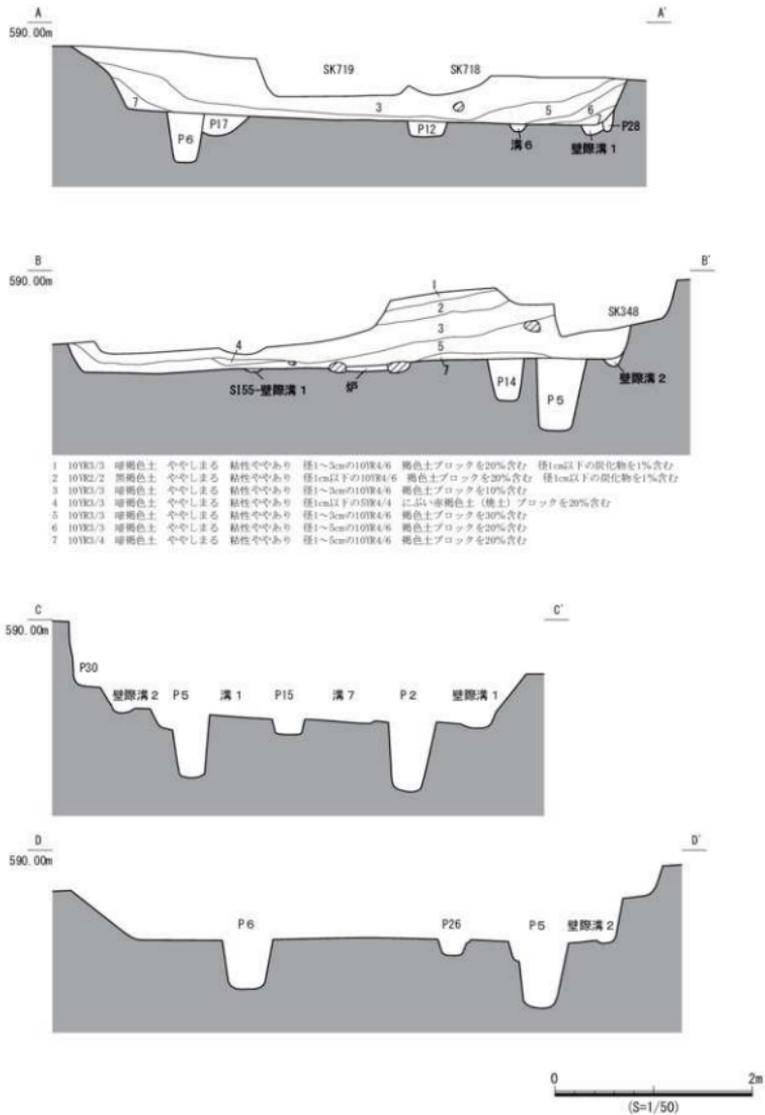


図 274 S148 遺構図 (2)

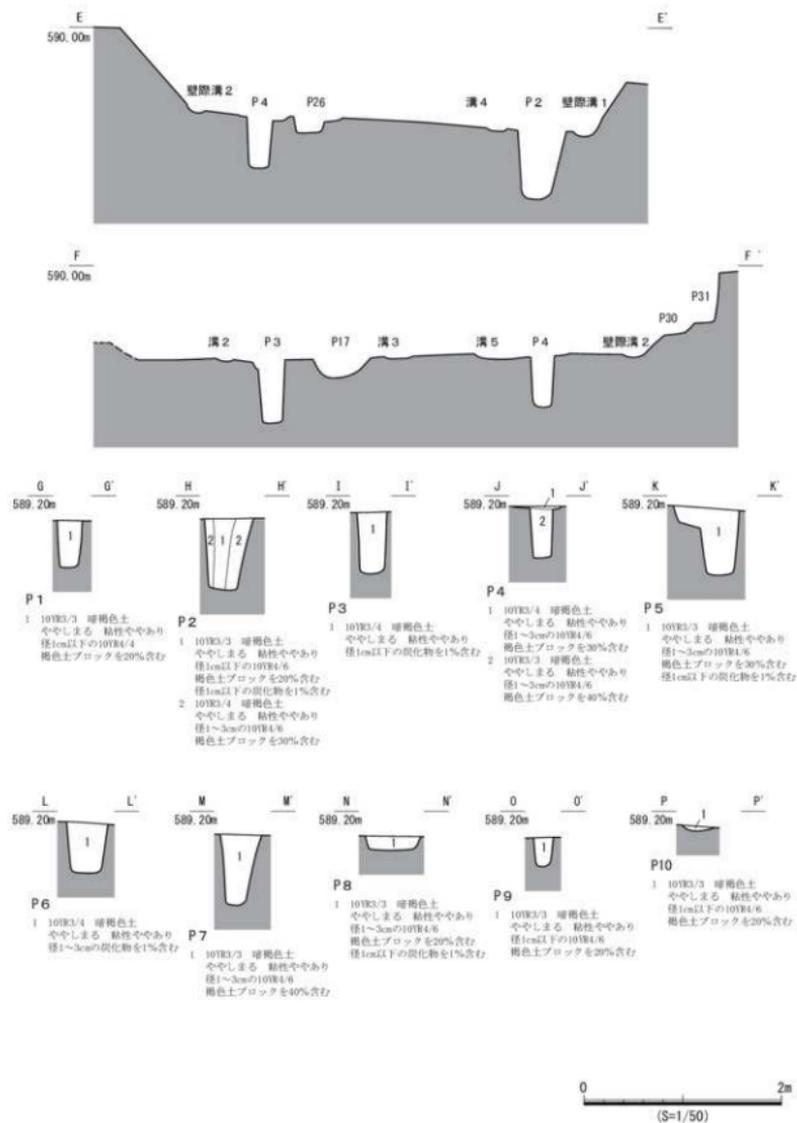


図 275 S148 遺構図 (3)

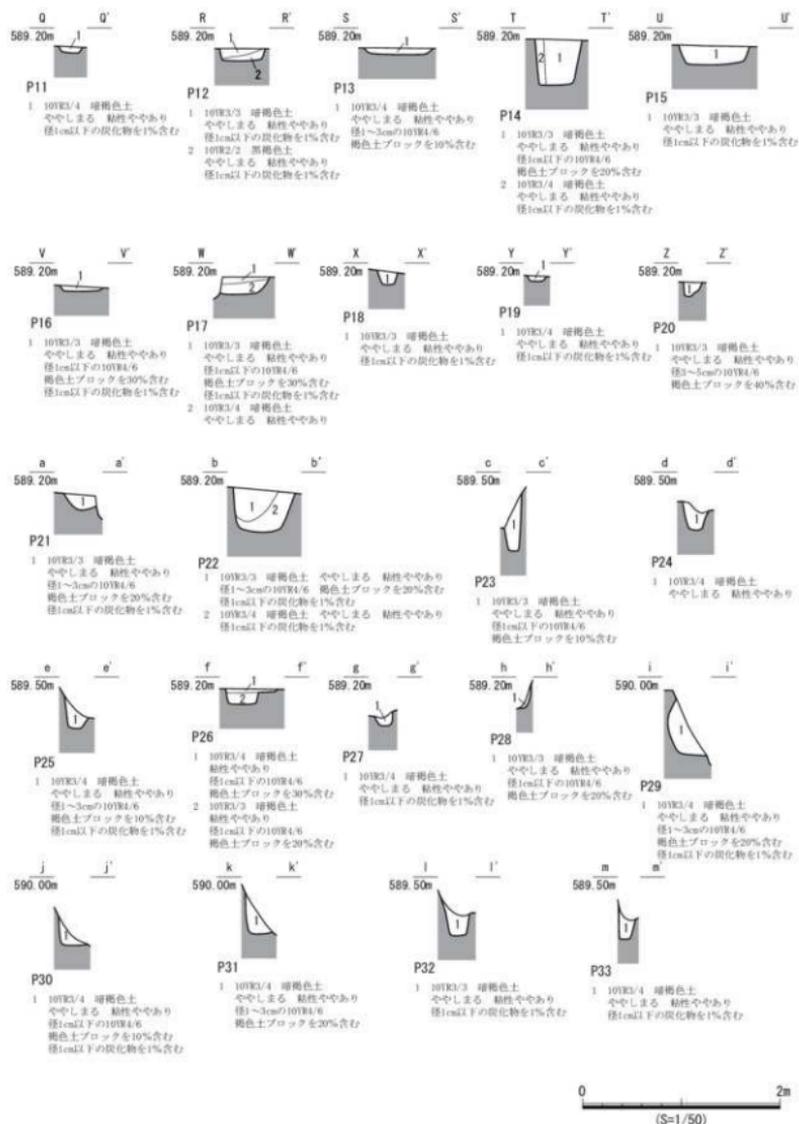
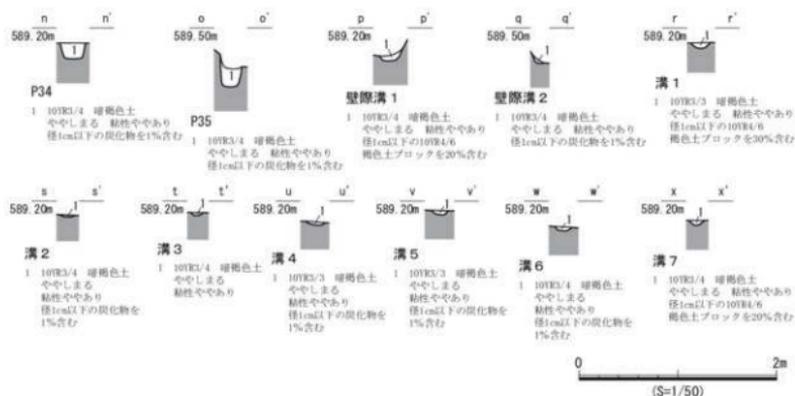


図 276 S148 遺構図 (4)



## 炉核出

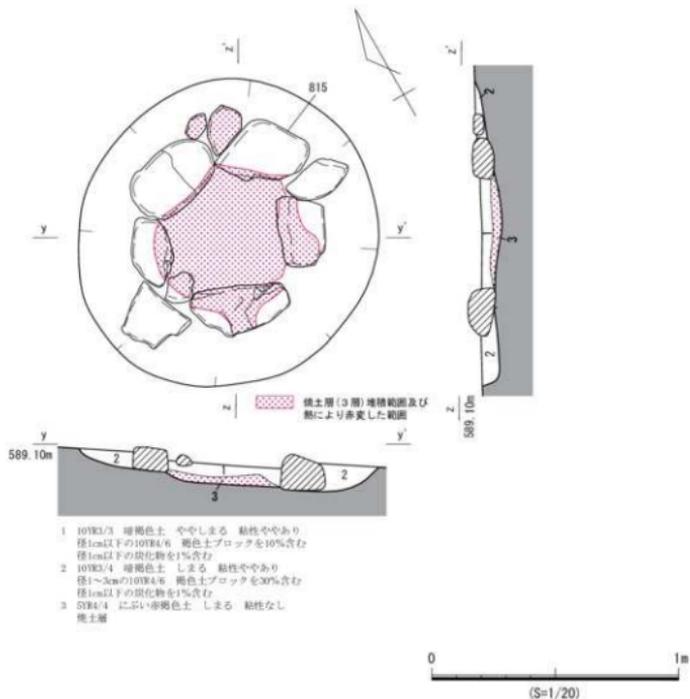
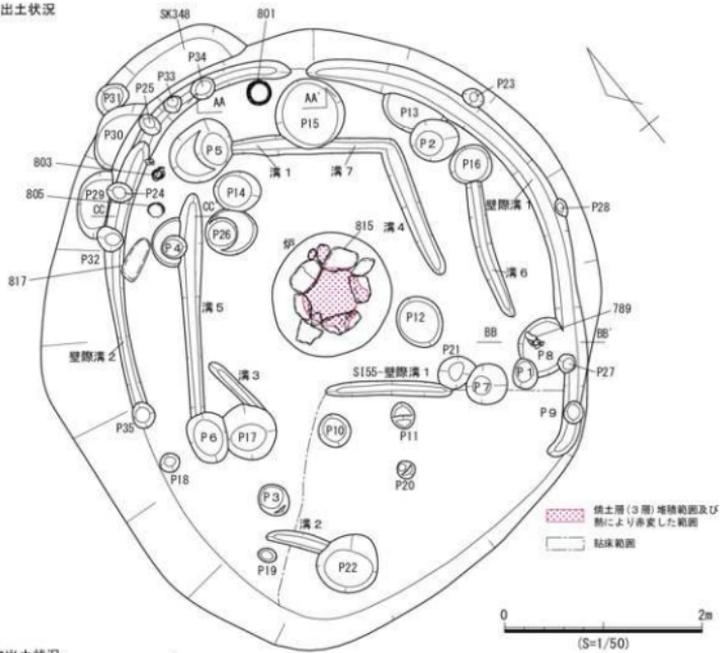


図 277 S148 遺構図 (5)

S148遺物出土状況



S148遺物出土状況

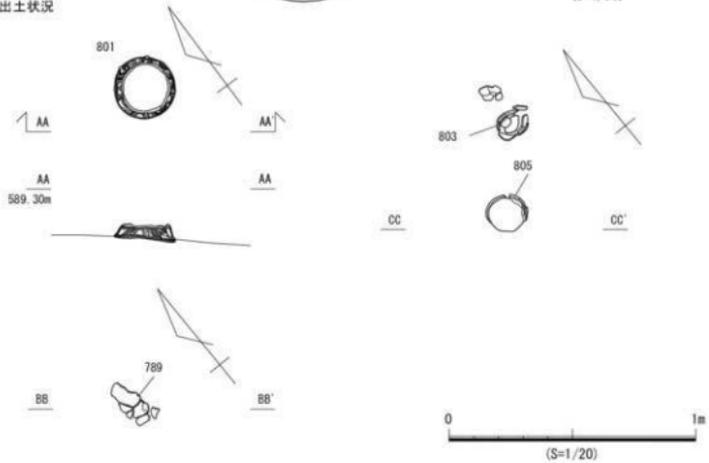


図 278 S148 遺構図 (6)

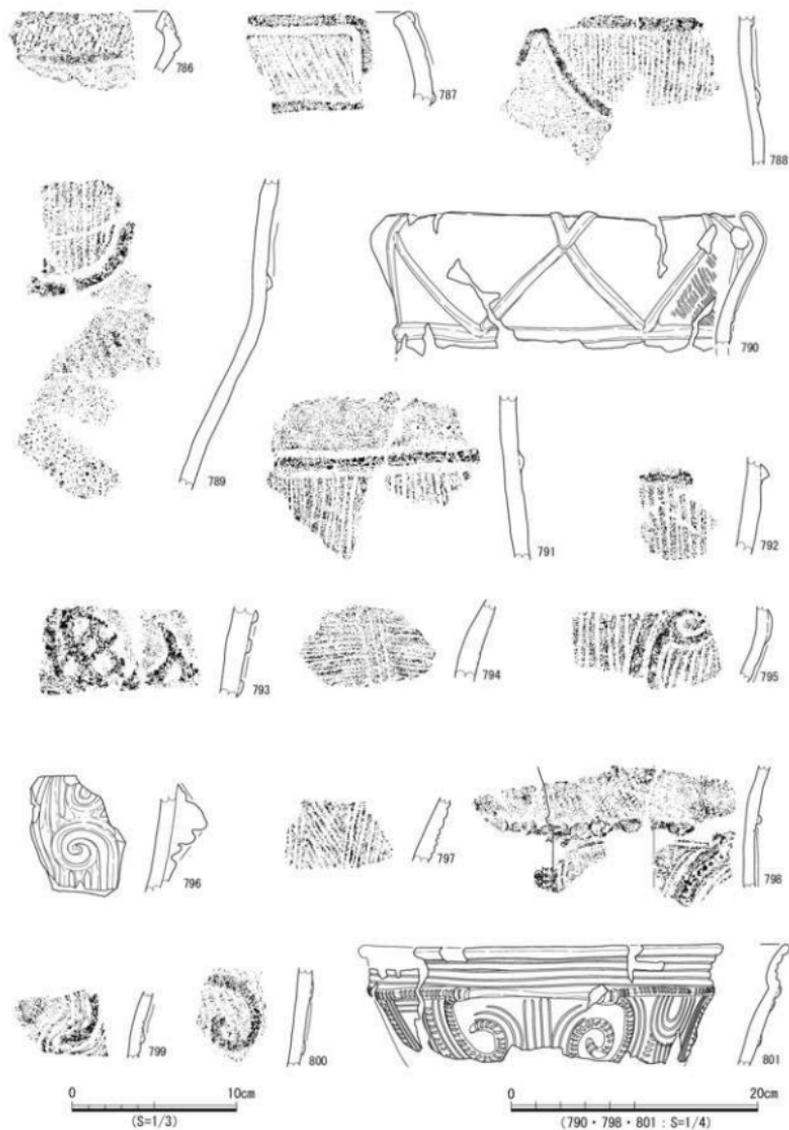


図 279 S148 出土遺物 (1)

よる横位区画と渦巻文を施し、その間を半隆起線と爪形文で埋める。802 はC群6類のミニチュア土器で底面外面に網代痕を残す。803・804 はC群7類である。803 は外面に縄文、804 は外面に燃糸文を施す。805 はC群8類である。平底の底部で底部外面に縄紐の跡が残る。806～808 はC群10類の浅鉢である。806 は口縁部の外面に口縁に平行する半隆起線と楔状の刺突を施す。口唇部に平行沈線を施す。807 は外面に口縁部の外面に口縁に平行する半隆起線による槽凹区画を施す。口縁部は短く屈曲する。808 の外面は無文で、口縁部は短く屈曲する。809 は凹基無茎石罫である。基部の挟りは「く」の字状で、脚部端は尖る。810 は石匙で横長の剥片を素材とし、下部に直線的な刃部を作り出す。811 はスクレイパーで縦長の剥片を素材とし、縁辺左部に直線的な刃部、縁辺上部から右部に曲線的な刃部を作り出す。812 は打欠石錘である。長楕円礫を利用し、紐掛かり部は両面から打ち欠き作出する。813・814 は磨石・敲石類である。813 は表裏面に磨痕、両側面に敲打痕・磨痕、上面・下面に敲打痕を残す。814 は表面に敲打痕・磨痕、裏面に磨痕、右側面に敲打痕を残す。815～817 は石皿・台石類である。815 は平板の石皿で表面に磨痕を残す。816 は台石で表面に敲打痕を残す。817 は表裏面・両側面に磨痕、表面・左側面・上面・下面に敲打痕を残す。平板の石皿として利用後、台石として利用されたと考えられる。

**時期** 前期後葉以降のS155より新しいことや床面直上の出土土器から、中期中葉の遺構と判断した。

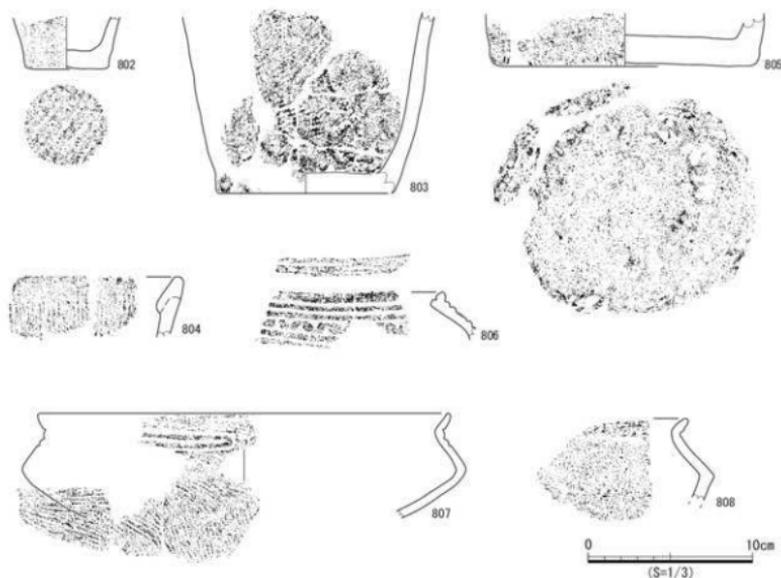


図 280 S148 出土遺物 (2)

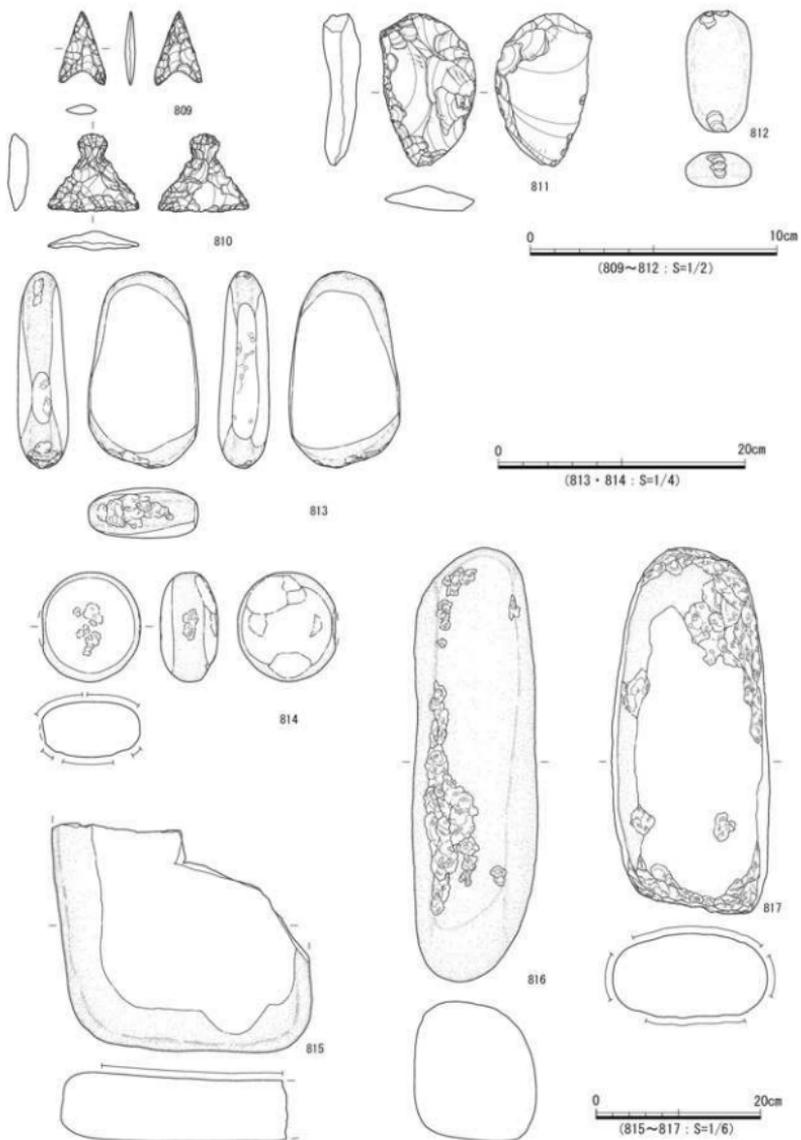


図 281 S148 出土遺物 (3)

## SI50 (図 282~図 288)

**検出状況** AJ7・8グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI51は本遺構とほぼ重なっており、本遺構より新しい。また、SK705・SK684・ST24とも重複関係があり、SK705・ST24より古く、SK684よりも新しい。東西の径が8m以上あることや床面で検出した壁際溝の状況から、SI51を含めた円形や方形の堅穴建物が複数重複している可能性が高い。

**埋土** 南北方向の土層で、暗褐色土がほぼ水平に3層堆積する状況を確認した。1層・2層に褐色土ブロックや炭化物、3層に炭化物を含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込み、北側の壁面はやや開く。南側の壁面は削平を受けているため不明である。壁の残存高は最大で0.68mである。

**床面** ほぼ平滑で、南東方向に傾斜する。床面で検出した遺構は炉3基、土坑36基、壁際溝3条、溝6条である。まず、溝1・溝2・溝4で囲まれた範囲については、一辺4m程度の隅丸方形の堅穴建物があつたことが想起される。検出した硬化範囲は、この建物に属する可能性が高い。一方、壁際溝1と3については、壁際溝2や溝5・6を含めて一連の大型建物になることも考えられるが、P16から東の掘方の形状が以西とは方向性が異なることから、この部分から東が別の建物になる可能性がある。また、複数の炉跡が認められることから、ほぼ同じ高さの床面をもつ堅穴建物が重複していた可能性が高く、SI51も含めて4軒程度が重なっていたと考えられる。その中でも、溝1・溝2・溝4で囲まれた範囲は、建物埋土の状況から最も古い可能性が高く、SI51が最も新しい。以上のような状況から、床面遺構の所属を特定するのは困難であり、図示した遺構についても、SI51床面遺構を含めて所属関係が十分整理できていない可能性が高い。

**炉** 床面に熱による赤変が3箇所認められ、この範囲を炉とした。いずれも掘り込みがなく、床面が直接被熱している。最も残りが良い炉3が、最終段階の堅穴建物に伴う炉と考えられる。

**埋壘** 確認できなかった。

**床下** 貼床がないため、床下の調査は実施していない。

**遺物出土状況** 堅穴建物の埋土b・c・g・p・1層・床面から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期中葉から中期後葉であるが、ほとんどが中期前葉のものである。この他に床面検出遺構のP12から縄文土器(818・831)が出土した。

**出土遺物** 818はZ2群3a2類で直立する口縁部外面に口縁と平行する細い突帯を3条貼り付け、突帯上を鋸歯状に刻む。口唇部は内面に突帯を貼付するため肥厚する。肥厚した口唇部に刻みのある突帯を貼付する。819はZ2群7b類で外面に半截竹管状施工具による横位矢羽状の集合沈線とボタン状貼付文を施す。口唇部に半截竹管状施工具による刻みを入れる。820はZ2群7c類で外面に浮線文を貼付する。821はC群1a2類で外面に横位の幅広で低いリボン状突帯を貼付する。突帯より上方は縦方向の平行沈線、下方は縦方向の平行沈線を施す。822はC群1c2類で外面に隆帯と沈線による横方向の沈線文を施す。823・824はC群3a2類である。823は外面に口縁と平行する爪形文や半隆起線文を施す。824は外面に半隆起線文によるB字状の区画文を施し、区画内に格子目文を入れる。825~832はC群4a類である。825・826は口縁部の外面に平行沈線と平行沈線の縁に沿って楔状の刺突を施す。口縁部内面は肥厚し屈曲する。827は外反する口縁部の外面に縄文と平行沈線による区画と、区画内縁に沿って楔状の刺突を施す。口縁部内面は肥厚する。828は外傾する口縁部の外

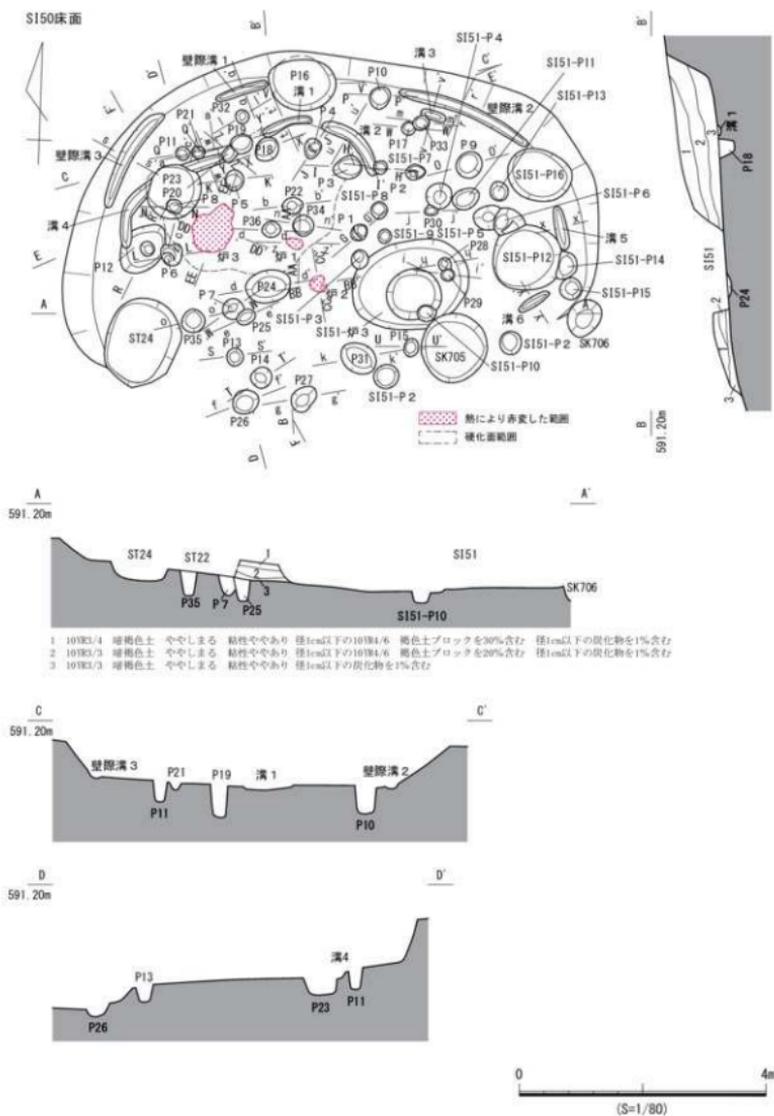


図 282 S150 遺構図 (1)

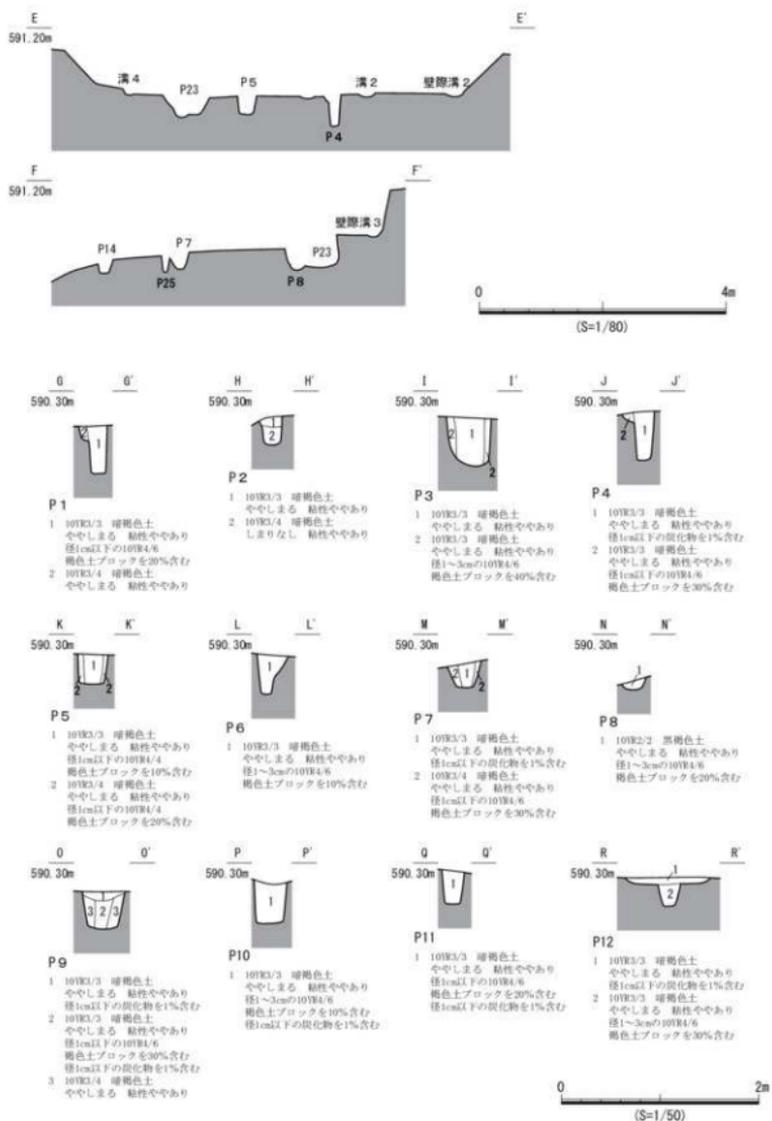


図283 S150遺構図(2)



図 284 S150 遺構図 (3)

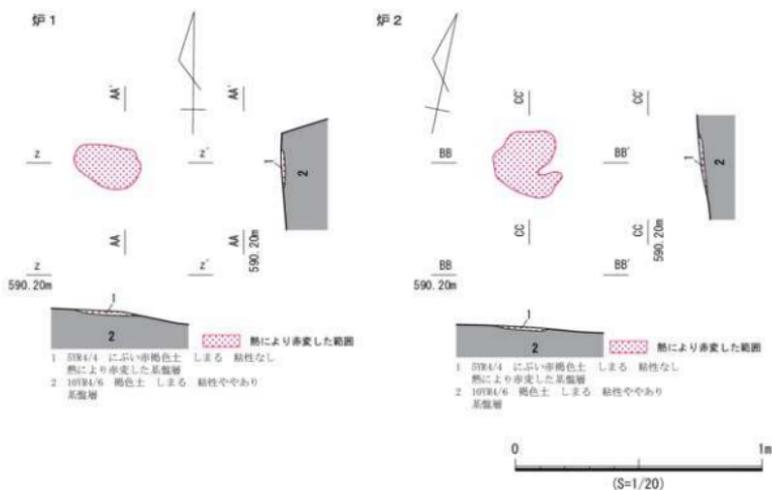


図 285 S150 遺構図 (4)

面に縄文と連続爪形文を施し、連続爪形文間に楔状の刺突を施す。829 は口縁部の外面に連続爪形文を施す。口縁部内面は屈曲する。830 は肥厚した口縁部の外面に連続爪形文を施す。頸部に平行沈線を施す。831 は口縁部の突起の外面に玉抱状の刺突及び三叉状の印刻、内面に三叉状の印刻を施す。また、肥厚した口縁部の外面に連続爪形文を1条施す。832 は外反する口縁部の外面に平行沈線と沈線間に楔状の刺突を施す。833～836 はC群5 a 類である。833 は口縁部の外面に幅広の爪形文を施す。口唇部に刻みを入れる。内面に縦長の節の目立つ縄文を施す。834 は外面に幅広の爪形文と円形刺突文列を施す。835 は波状口縁の外面に縦方向の背の高い刻目凸帯と平行沈線による連弧文を施す。836 は外面に平行沈線による連弧文を施す。837 はC群3 b 2 類で外面に口縁に平行する隆帯を貼付し、その上に刻みを入れる。口縁部より下方は沈線による工字状文を施す。838～840 はC群3 b 3 類で外面に地文として縄文を施し、その上に平行沈線による連弧文を施す。841 はC群7 類である。底面は平底で胴部外面に縄文を施す。842～845 はC群10 類の浅鉢である。842・843 は外面に半隆起線による曲直線を施す。844 は口縁部の外面に基本隆帯を貼付し、その上に綾杉状の刻みを入れる。また、半隆起線による横位区画と渦巻文を施す。845 は口縁部の外面に半隆起線を1条施す。846 は石匙で横長の剥片を素材とし、下部に曲線の刃部を作り出す。847 は打欠石錘で長楕円礫を利用し、紐掛かり部は両面から打ち欠き作出する。848 は磨石・敲石類で表面に磨痕、両側面に敲打痕・磨痕、下面に敲打痕を残す。

**時期** 遺構の重複関係は、中期前葉以降のST24・SK348・SK705より古く、前期末葉以降のSK684よりも新しい。重複関係及び床面遺構の出土土器から中期前葉の遺構と判断した。

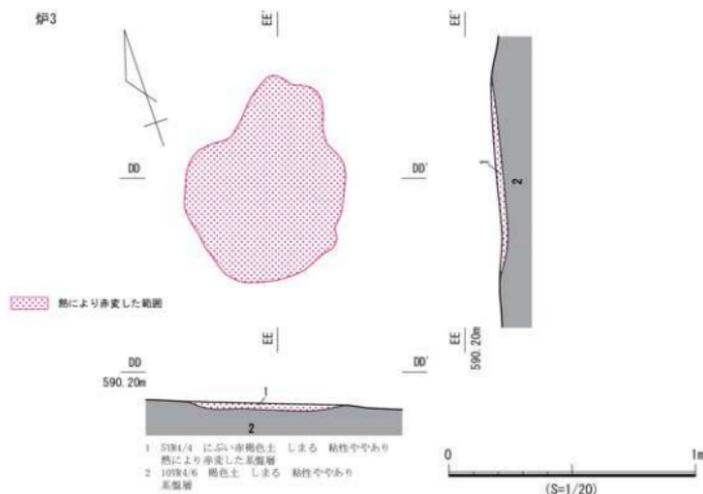


図 286 S150 遺構図 (5)



図 287 S150 出土遺物 (1)

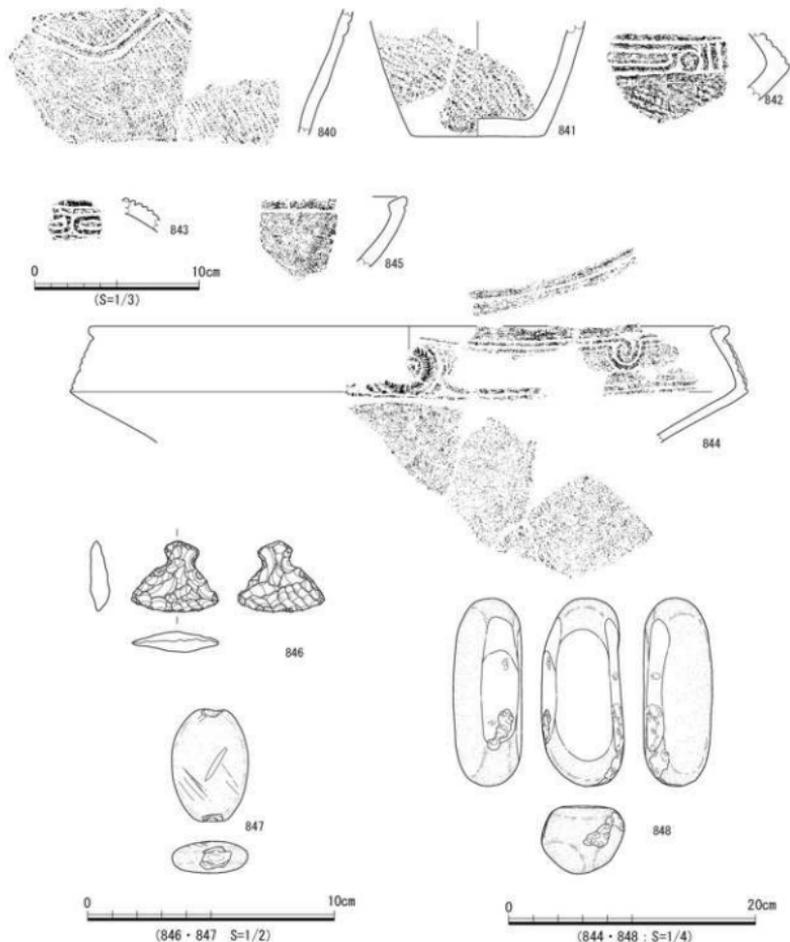


図 288 S150 出土遺物 (2)

S151 (図 289~図 293)

**検出状況** AJ8・AK8グリッド、Ⅲ層上面で検出した。S150・SK705・SK706と重複関係があり、SK705・SK706よりも古く、S150よりも新しい。地形の傾斜により南側の掘方及び床面が消失しているが、北辺・東辺は直線的であり、残存する東辺は丸みをもつ不定な形状をとる。

**埋土** 暗褐色土が2層堆積し、埋土中に褐色土ブロックを含む。1層は東壁際から中央部にかけての広い範囲に堆積しており、2層は東部の壁際に認められる。

壁 III層を掘り込み、北側の壁面はやや開く。壁の残存高は最大で0.53mである。

床面 ほぼ平滑で、南方向に傾斜する。貼床（3層）は堅穴建物の掘方中央やや西寄りの一部に認められる。床面で検出した遺構は炉2基、土坑16基である。このうち、P1・P2は掘方南東隅の形状からすると掘方の外になる可能性もあるが、他に柱穴となり得る掘り込みがないためここに含めた。堅穴掘方の形状から、P1・P2・P8・P13の4基がまず支柱穴の候補として挙げられる。しかし、P8・P13については近接した位置に複数の土坑があるため、支柱穴と特定することは困難である。

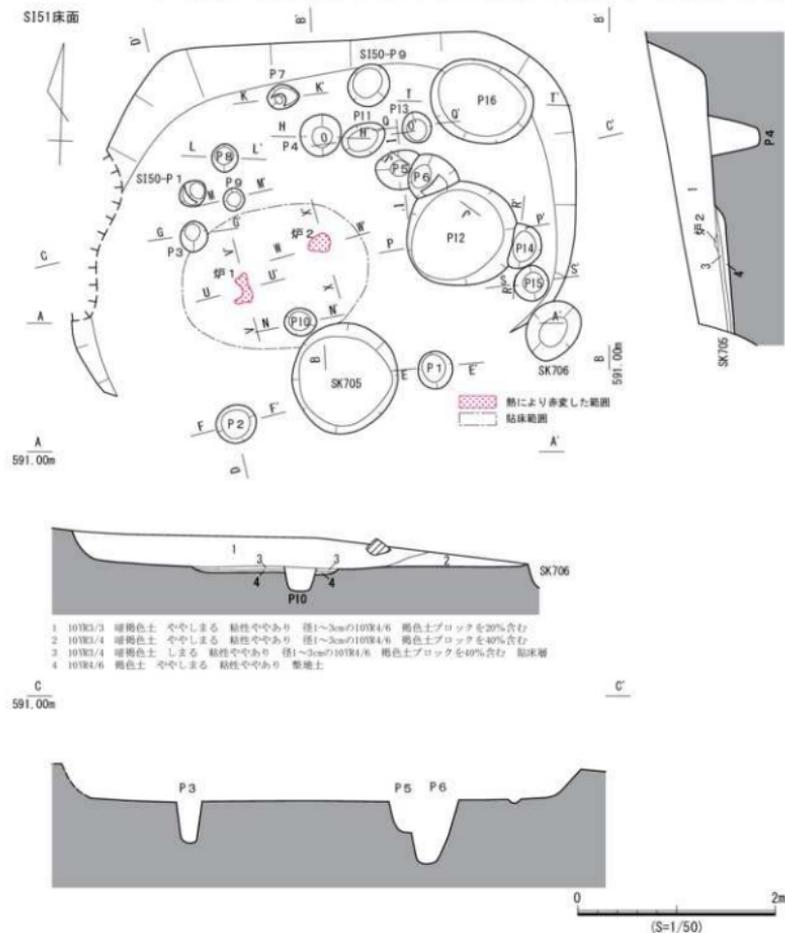


図289 SI51遺構図(1)



図 290 S151 遺構図 (2)

また、竪穴掘方が東西に長いことから4本柱にP14を含めることも考えられるが、その場合は西側の柱穴を見落としたことになる。なお、P1・P2が単独であることから柱穴で建て替えの有無を判断することは難しいが、炉の状況からその可能性は高いと考えられる。

**炉** 貼床面に熱による赤変が2箇所認められ、この範囲を炉とした。いずれも掘り込みは認められない。

**埋壘** 確認できなかった。

**床下** 貼床下にはわずかに整地土があり、その下面で炉3を検出した。基盤を円形に掘り窪めた底面に被熱による赤変が認められ、焼土が堆積していた。この炉が検出した位置で機能していたことを想定する場合、窪んだ床面をさらに掘り窪めて炉を設置していたことになり、非常に不自然である。炉1・2の周辺のみ貼床があることや焼土の検出状況から、新しい炉の設置に当たり炉3を含む範囲を掘り窪め貼床を敷設したことが考えられる。

**遺物出土状況** 竪穴建物の埋土b・c・e・1・3層・床面から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期前葉から中期後葉であるが、前期後葉と中期前葉のものが多い。

**出土遺物** 849はZ2群7c類で外面に地文として半截竹管状施文具による集合沈線を施し、その上に浮線文を貼付する。850はZ2群9b類で外面に半截竹管状施文具による集合沈線を施す。851はC群1c2類で外面に把手が付く。把手より下方に棒状施文具による交互刺突列を施す。852～854はC群3a2類である。852は外面に蓮華文や半隆起線の区画を施し、その内側に格子目文を施す。853は外面に蓮華文や半隆起線を施す。852は853と接合関係がないが、出土位置が近く、胎土や器厚や文様が

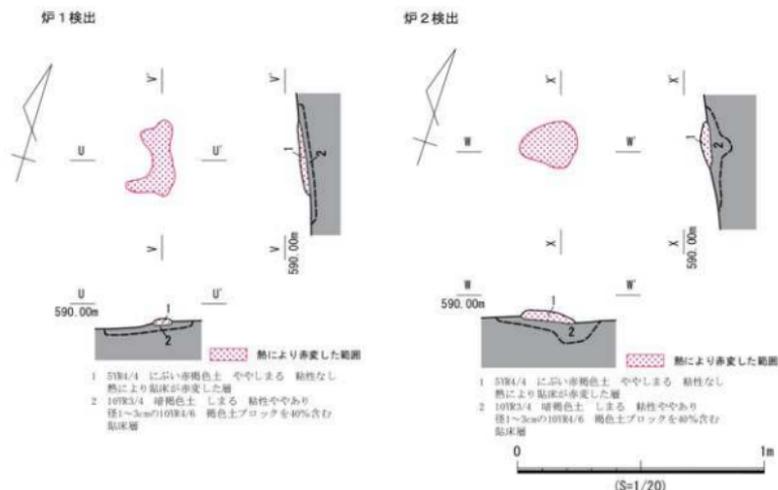
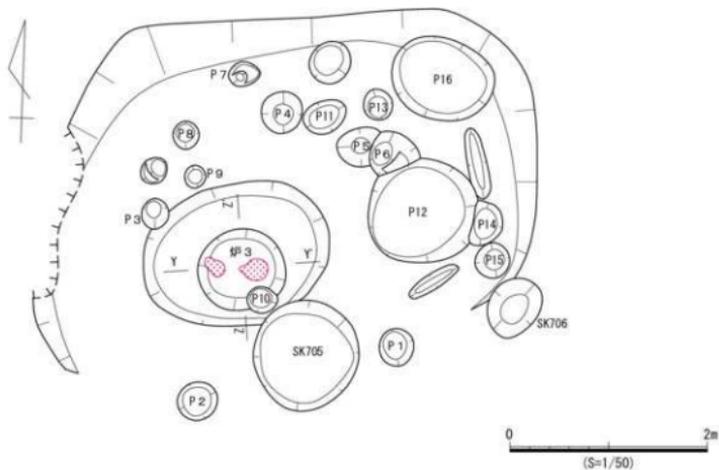


図291 S151遺構図(3)

S151掘方底面



炉3検出

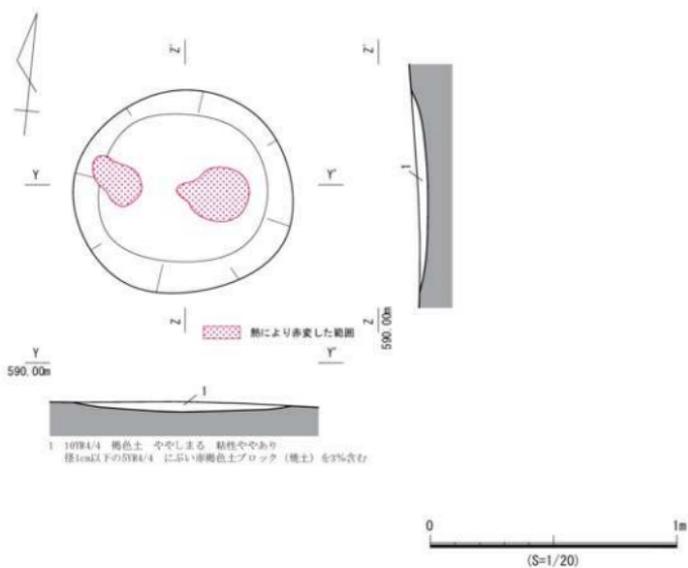


図 292 S151 遺構図 (4)

類似することから同一個体の可能性が高い。854 は外面に縦位の半隆起線文と格子目文を施す。855・856 はC群4 a 類である。855 は外面に環状に近い突起を貼付し、半隆起線で横位区画を施し、区画内に縦位の沈線を施す。区画より下方は区画内縁に沿って楔状の刺突を施す。856 は外面に半隆起線を施し、半隆起線の縁に沿って楔状の刺突を施す。856 は855 と接合関係がないが、出土位置が近く、胎土や器厚や文様が類似することから同一個体の可能性が高い。857 はC群5 a 類で内湾した口縁部の外面に幅広の連続爪形文と円形浮文列を施す。口唇部に刻みを入れる。858 はC群3 b 3 類で外面に地文として縄文を施し、その上に平行沈線による連弧文を施す。859・860 はC群7 類である。859 は口縁部が肥厚し、小突起が付く。860 は口縁部が肥厚する。859 と860 に接合関係はないが、出土位置が近く、胎土や器厚や文様が類似することから同一個体の可能性が高い。861 は凹基無茎石鏃である。基部の抉りは丸く、脚部端は平らである。862 は石匙である。縦長の剥片を素材とし、下部に内湾する刃部を作り出す。863 は楔形石器で上部・下部に階段状や潰れ状の剥離が認められる。右部はスポール状に剥離した足跡が認められる。864 は定角式の磨製石斧で全体に磨痕・線状痕を残す。865 は块状耳飾で全体に磨痕・線状痕を残す。右半分を欠損したため、右側縁を研磨整形したが、裏面からの穿孔途中で欠損したものと考えられる。

**時期** 遺構の重複関係は、中期前葉以降のSK705・SK706より古く、中期前葉のS150よりも新しいことから中期前葉以降の遺構と判断した。

#### S152 (図294～図298)

**検出状況** AH8～AI9グリッド、Ⅲ層上面で検出した。北側はSK614、東側はSK620と重複関係があり、それらよりも古い。平面形は、四辺が直線的な隅丸方形である。

**埋土** 黒褐色土・暗褐色土・褐色土が9層堆積する。8層・9層は壁際の堆積で、これを除いた7層と5層により掘方の大半が埋没するが、7層は掘方中央の南北方向に細長い範囲のみ堆積しており、不自然な堆積状況を示す。残りの1～4層は、5層～9層の堆積によって生じた中央部の窪みを埋めるように堆積する。1～3・5・8層は埋土中に褐色土ブロック、2～5層は炭化物を含む。

**壁** Ⅲ層を掘り込み、壁面は直立気味に立ち上がる。壁の残存高は最大で0.62mである。

**床面** ほぼ平滑である。貼床はない。床面で検出した遺構は炉1基、土坑22基である。主柱穴の候補として、まず南東部のP4とP20が挙げられる。P4に対応する柱穴としては、炉の位置から判断するとP1・P3と思われるが、北東部についてはP2・P8も可能性がある。重複するP1とP6ではP1が新しく、P3とP13ではP3の方が新しいことから、P2より新しいP8がこの柱配置に対応する蓋然性が高い。また、P1・P3・P4・P8を主柱穴とした場合、炉がこの配置のほぼ中央に配置されることもこのことを裏付ける。一方、先述したP6やP13、P2については重複状況からP20と対応する建て替え前の柱配置と考えられ、P6とP13の間にあるP21(P22)、P2とP20の間にあるP12による6本柱の柱配置となる可能性がある。なお、P9は最も深い掘り込みをもつ土坑であるが、これに対応する柱配置は確認できなかった。この他、P15・P19が入口の対ビット、P16は「入口土坑」と思われる位置に配されるが、いずれも他の遺構と比べ浅い。このことから、6本柱の柱配置の柱穴が浅いものが多いことを含め、当初の床面を掘り下げて4本柱の柱配置の建物が建てられたことも想定できる。また、P5・P7・P14・P18は、一定の間隔で壁際に設置されており、竪穴建物の構造と何らかの関係がある可能性がある。壁際溝は確認できなかった。



図 293 S151 出土遺物

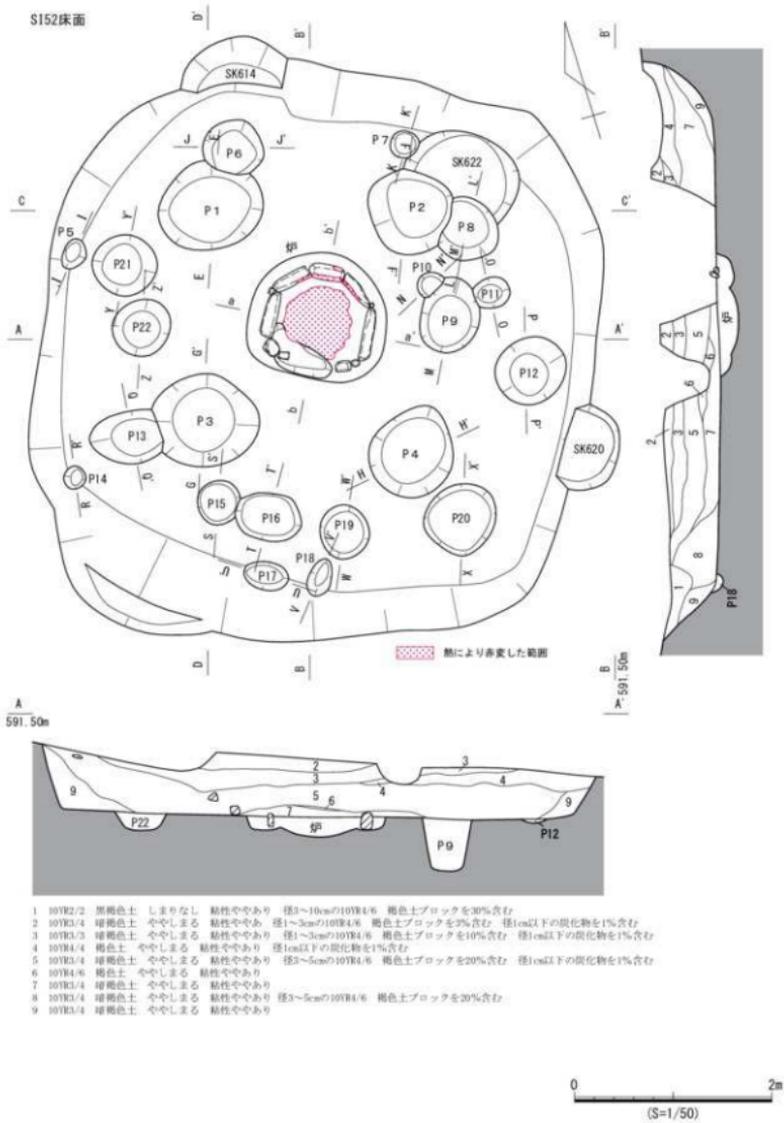


図294 S152遺構図(1)

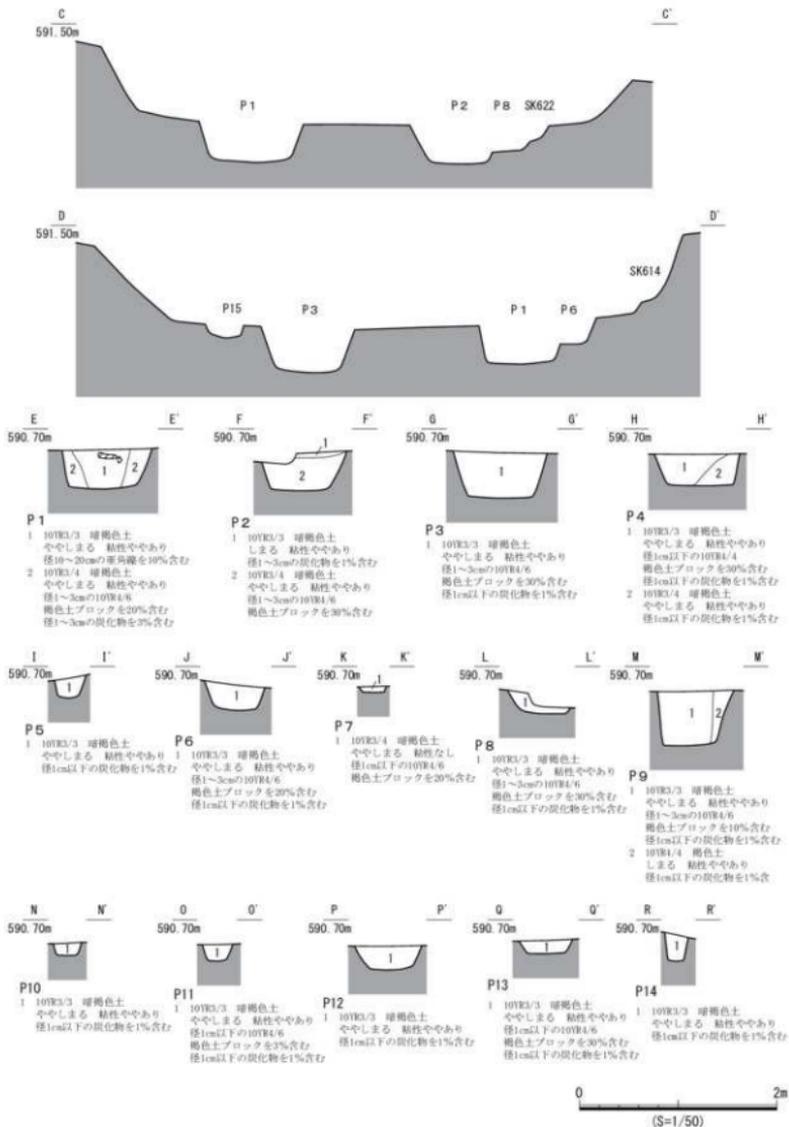


図 295 S152 遺構図 (2)

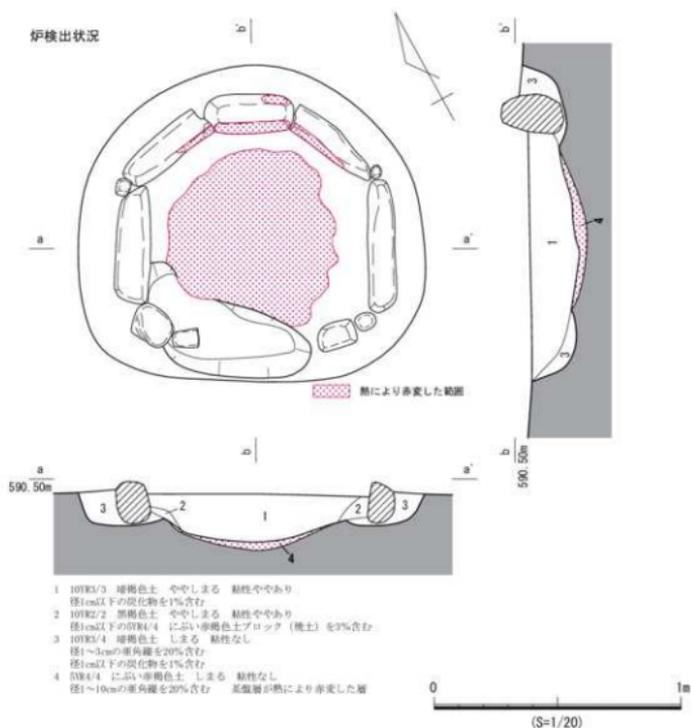
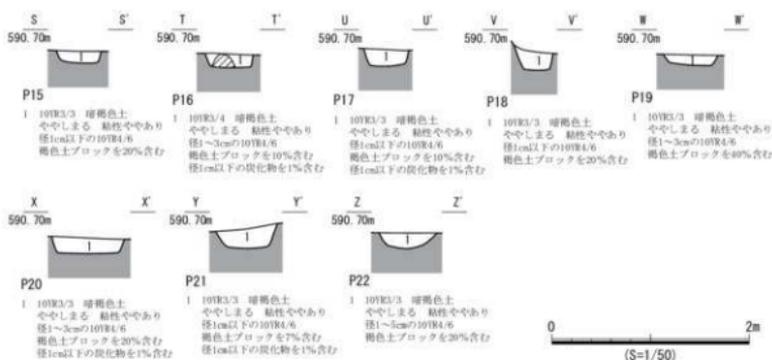


図296 S152 遺構図(3)

**炉** 掘方床面の中央やや北寄りで炉を検出した。長楕円礫を配した石囲炉である。石囲炉より一回り大きい掘方を床面に掘削した後、礫の長軸が火床を向くよう炉石を配置する。石囲いの平面形は多角形を志向しているとみられるが、その多角形の西側と東側、南西と南東の角には小礫が充填されている。なお、平面形は八角形若しくは六角形と思われるが、南側の炉石が抜き取られているため不明である。石囲炉の火床は掘りくぼめられており、底面には被熱が認められる。石囲炉の掘方と火床の土層から、炉石を設置後に火床部分を掘りくぼめたと考えられる。

**埋壘** 確認できなかった。P16は位置的に「入口土坑」の可能性はあるが、平面規模に比して浅い遺構であり、先述した床面の掘り下げを伴う建て替えが想起される。

**床下** 貼床がないため、床下の調査は実施していない。

**遺物出土状況** 堅穴建物の埋土d・h・i・5・7層・床面から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期中葉から中期後葉であるが、大半は中期中葉から後葉のものである。この他にP16から深鉢の破片(873)が内面に上にした状態で出土した。

**出土遺物** 866はC群1a3類で外面に隆帯と縦位の沈線による楕円文を施す。867はC群1c2類の突起部分で外面に隆帯による渦巻文、内面に曲直線の隆帯を貼付する。868・869はC群2b類である。868は外面に隆帯により縦位区画する。869は外面に隆帯と隆帯に沿う平行沈線を施す。870・871はC群3b2類である。870は外面に半隆起線による曲直線を施す。内折した口唇部に沈線と刻みを施す。871は外面に背の高い隆帯を貼付し、その上に刻みを入れる。872・873はC群3b3類である。872は外面に幅広の隆帯を貼付し、その上にへら刻みを入れる。隆帯間に半隆起線を施す。873は外面に口縁に沿う2条の隆帯を貼付し区画する。区画より下方は隆帯による曲直線を施す。874はスクレイパーである。縦長の剥片を素材とし、縁辺左部・右部を剝離調整し、下部に両面からの剝離調整により曲線的な刃部を作り出す。875は磨石・敲石類で表面と両側面に敲打痕・磨痕、裏面に磨痕を残す。

**時期** 遺構の重複関係は、前期中葉以降のSK614や中期中葉以降のSK620よりも新しい。重複関係及び床面遺構の出土土器から中期後葉と判断した。

P16遺物出土状況

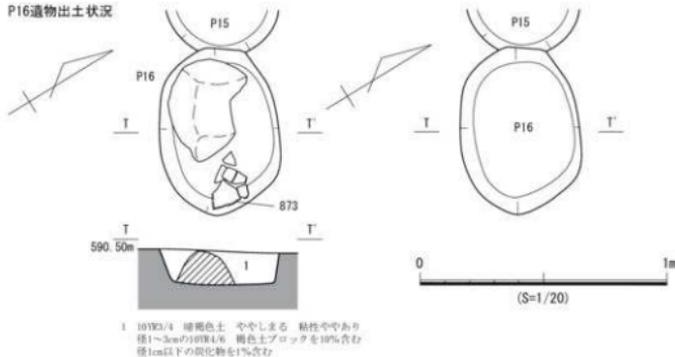


図297 S152遺構図(4)

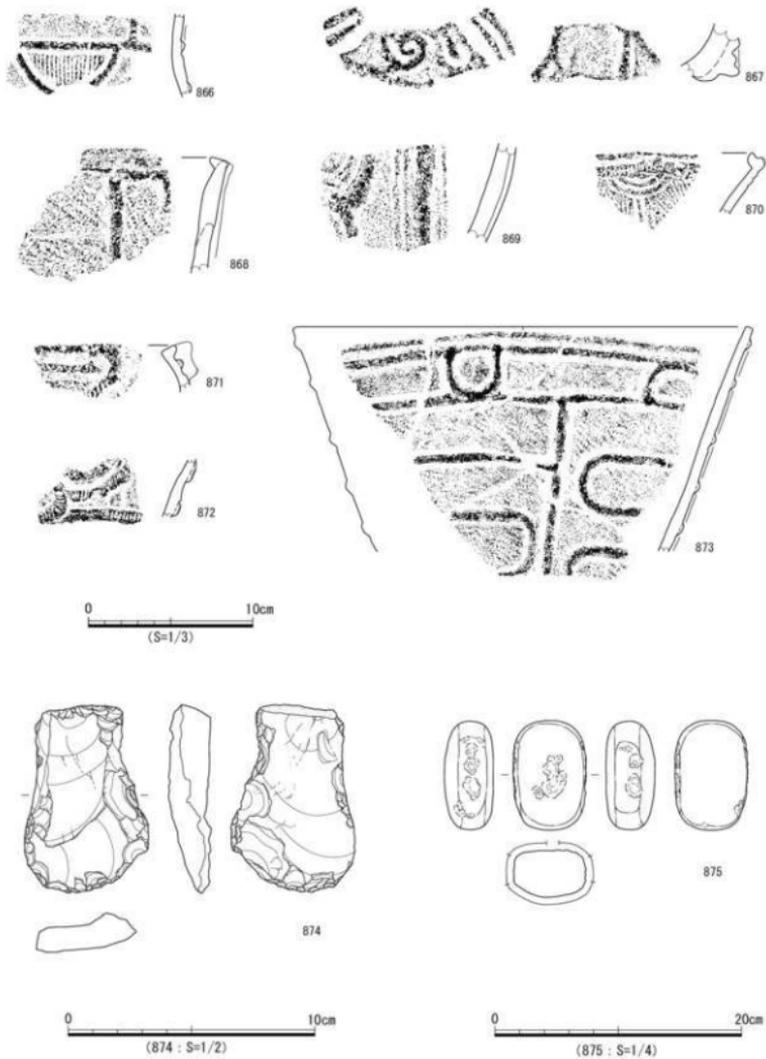


図 298 S152 出土遺物

## (2) 土器埋設遺構

## SJ3 (図299)

**検出状況** AH6 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。S135・SK581と重複関係があり、いずれより古い。平面形は円に近い形状である。

**土器埋設状況** 埋土は暗褐色土が3層堆積し、1・2層は炭化物、3層は褐色土ブロックを含む。土坑掘方の中央の3層の上面から中期中葉の深鉢(876・877)が1個体分口縁部を下にして出土した。

**出土遺物** 876・877はC群3b1類で外面に爪形文付の基本隆帯による横区画と渦巻文を施し、その間を半隆起線と爪形文で埋める。

**時期** 876・877から縄文時代中期中葉の遺構と判断した。

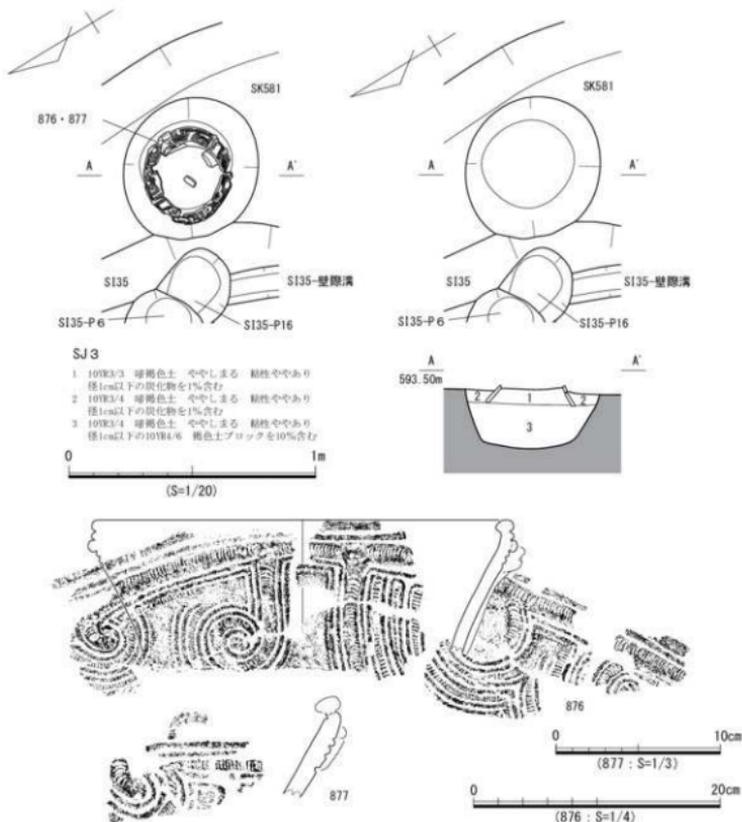


図299 SJ3遺構図・出土遺物

## (3) 土坑墓

## ST13 (図 300・図 303)

**検出状況** AH・AI13 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI19 やNW1 に切られるため、平面形は不明である。

**埋土** 暗褐色土と褐色土が2層堆積する。1層は暗褐色ブロック土を含む。1層上面で50cmほどの円礫1点が出土した。平坦な面を上にした状態で出土しており、墓標・抱石の可能性がある。

**遺物出土状況** 埋土中から縄文土器が散在した状態で出土した。時期を特定できる土器は、前期後葉と中期中葉のものである。

**出土遺物** 878はC群1a3類で外面に半截竹管状施文具による連続爪形文を施す。

**時期** SI19 との重複関係から、中期中葉以前の遺構と判断した。

## ST14 (図 300・図 303)

**検出状況** AH16 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形は楕円に近い形状である。

**埋土** 暗褐色土が2層堆積する。1層・2層に褐色土ブロックと炭化物を含む。

**遺物出土状況** 2層から縄文土器の浅鉢の約半分(879)が外面を上にした状態で出土した。頭部等を被覆するための土器の可能性がある。この他に埋土中から縄文土器・石器が散在した状態で出土した。時期を特定できる土器は、前期後葉と中期前葉のものである。

**出土遺物** 879はC群10類の浅鉢で外面の口唇部から口縁部にかけて半截竹管状施文具と棒状施文具による縦方向の沈線と三角印刻を施す。

**時期** 埋土から出土した土器(879)から、中期前葉の遺構と判断した。

## ST19 (図 300・図 303)

**検出状況** AD9・10 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SK426 と重複関係があり、SK426 より新しい。平面形は円形に近いが、西辺のみ直線的である。

**礎・遺物出土状況** 埋土は褐色土の単層である。上面北部で径30cm程度の扁平円礫1点が平坦な面を上にした状態で出土した。その他に縄文土器や石器がa・b・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉と中期中葉のものがある。

**出土遺物** 880はC群2a類で外面にリボン状突帯を貼付する。881は薄手で扁平な作りの小型の磨製石斧である。表面に節理面と磨痕・線状痕、裏面に磨痕が認められる。

**時期** 出土土器から中期中葉以降の遺構と判断した。

## ST22 (図 300・303)

**検出状況** AJ7・AK7 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。ST24、SI50 と重複し、いずれより新しい。平面形は円形に近いが、東辺のみ直線的である。

**礎・遺物出土状況** 埋土は黒褐色土、暗褐色土が3層堆積する。2層は褐色土ブロック、3層は褐色土ブロックと炭化物を含む。掘方中央の底面に近い位置で、径20cm程度の楕円礫1点と径10cm程度の亜円礫3点が出土した。その他に縄文土器や石器がa・b・c・1・2層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉のものである。

**出土遺物** 882はZ2群7c類で外面に集合沈線を施し、その上に浮文を貼付する。

**時期** 出土土器は前期後葉であるが、中期前葉のSI50よりも新しいことから中期以降の遺構と判断し

た。

### ST24 (図 301・図 303)

**検出状況** AK7グリッド、Ⅲ層上面で検出した。ST22、ST42と重複し、ST22より古く、ST42より新しい。平面形は南北に長い隅丸長方形である。

**礎・遺物出土状況** 埋土は暗褐色土が3層堆積する。2層と3層は炭化物を含む。掘方中央の3層上

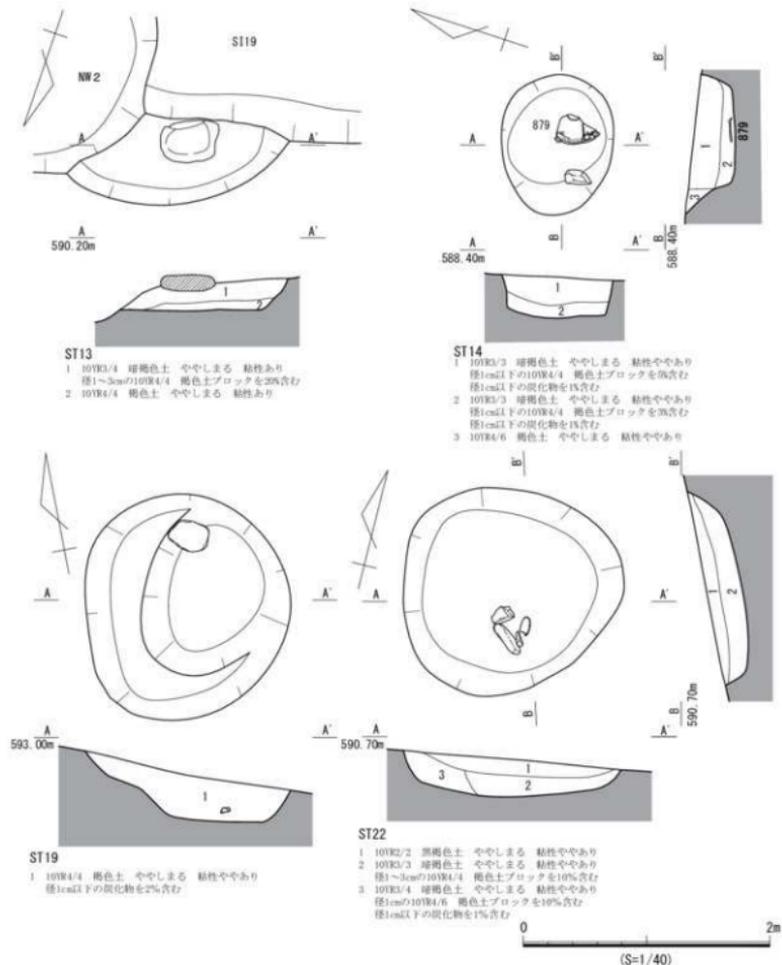


図 300 ST13・ST14・ST19・ST22 遺構図

面で径40cm程度の扁平な円礫2点が平坦な面を上にし重った状態、これに接して径20cm程度の円礫1点が平坦な面を上にした状態で出土した。その他、縄文土器や石器がb・d・1・2層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉と中期であるが、ほとんどが前期後葉のものである。

**出土遺物** 883はZ2群3a1類で外面に口縁に平行する低い突帯を3条巡らし、突帯上にユビオサエのような幅広の刻みを施す。884はZ2群14類で底部は平底で外面の接地部は外側に張り出す。

**時期** 中期以降のST22より古く、前期後葉のST42より新しい。出土土器に中期を含むため、中期以降の遺構と判断した。

#### ST32 (図301・図303・図304)

**検出状況** AH6グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI33・SK580・SK581・SK582と重複関係があり、いずれよりも古い。平面形は円に近い形状であるが、西部にテラス状の張り出しが認められる。

**礎・遺物出土状況** 埋土は暗褐色土の単層で、炭化物を含む。掘方中央から径30cm程度の磨石(888)1点、縄文土器の深鉢の胴部片(885)が内面を上にして底面から浮いた状態で出土した。また、(885)の上面に重なるようにして径25cm程度の石皿(889)と扁平な亜円礫1点が出土した。その他に土器や石器がd・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉から中期後葉までであるが、ほとんどが中期後葉のものである。

**出土遺物** 885はC群1c3類で外面は縄文地で、隆帯による渦巻文や縦位区画文を施す。886はC群1c2類で口縁部の内外面が肥厚する。外面に縦位の条線や沈線を施す。887はC群2a類で外面にリボン状突帯を貼付する。888・889は磨石・敲石類である。888は表面・下面に敲打痕、右側面に剥離痕を残す。889は上面に磨痕、表面・下面に剥離痕や剥離による潰れを残す。

**時期** 重複関係は中期中葉のSI33、中期後葉以降のSK581・SK582よりも古い。885から中期後葉の遺構と判断した。

#### ST34 (図301・図304)

**検出状況** AI8グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI52と重複関係があり、SI52より新しい。平面形は各辺が丸みをもつ円に近い形状である。

**礎・遺物出土状況** 埋土は黒褐色土と暗褐色土が3層堆積する。1層は褐色土ブロック、2層は炭化物を含む。掘方西部の3層から径40cm程度の亜角礫1点が底面より若干浮いた状態で出土した。その他、縄文土器や石器がb・d層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉から中期中葉までであるが、ほとんどが中期中葉のものである。

**出土遺物** 890はC群10類で外面に口縁と平行する隆帯や沈線を施す。

**時期** 中期後葉のSI52より新しいことや出土土器から中期後葉以降の遺構と判断した。

#### ST35 (図301・図304)

**検出状況** AF9グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SK628と重複関係があり、SK628より古い。平面形は楕円に近い形状である。

**礎・遺物出土状況** 埋土は暗褐色土の単層で、亜角礫を含む。掘方の中央1層から径20cm程度の扁平な円礫1点が平坦な面を上にした状態で出土した。また、礎の下から縄文土器の深鉢(891~894)が外面を上にし、底面から浮いた状態で1個体分出土した。その他に縄文土器や石器がb・1層から散

在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期のものである。

**出土遺物** 891～894はC群7類である。891・892は外面に横位の陰帯を貼付し、その上に縄文を施す。893は口縁の外面が肥厚する。外面全体に縄文を施す。894は平底の底部で底部の外面に網代痕を残す。胴部の外面に縄文を施す。895はC群8類で外面は無文である。

**時期** 891などから中期の遺構と判断した。

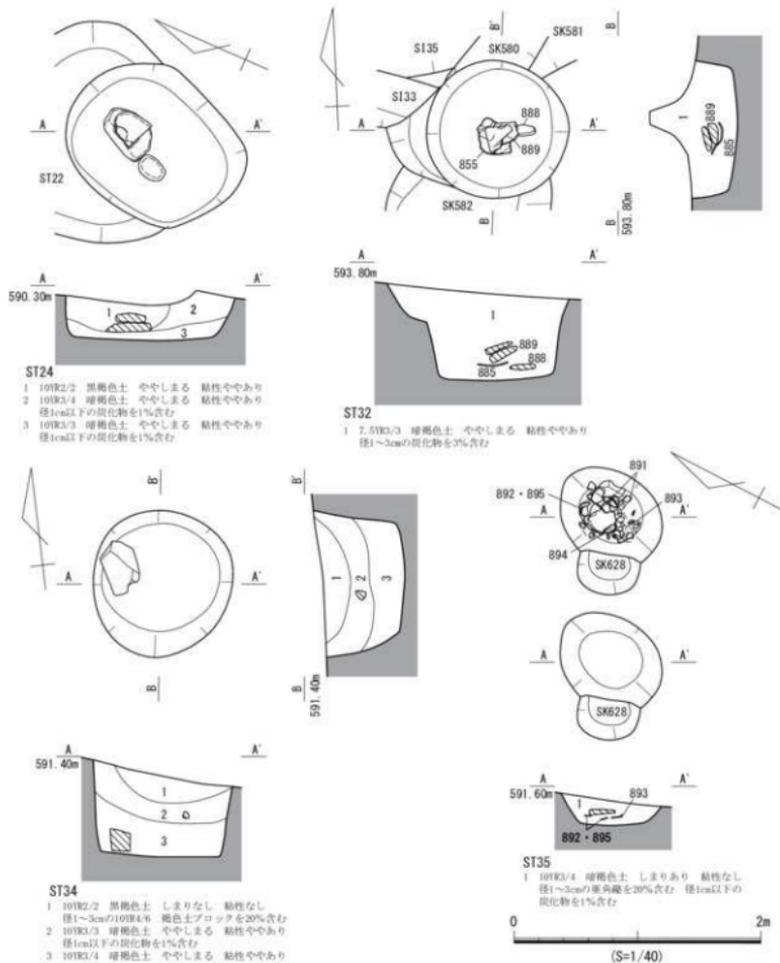


図 301 ST24・ST32・ST34・ST35 遺構図

## ST36 (図 302・図 305)

**検出状況** AI9・AJ9 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SK619 と重複関係があり、SK619 より古い。平面形は楕円に近い形状である。

**礎・遺物出土状況** 埋土は暗褐色土と黒褐色土が3層堆積する。2層は炭化物を含む。掘方の南東部の3層から径40cm程度の長円礎1点が底面から浮いた状態で出土した。礎は上面に熱による赤変が認められた。その他に縄文土器がb・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期中葉のものである。

**出土遺物** 896はC群1a3類で外面に隆帯と沈線による櫛描文を施す。

**時期** 出土土器から中期中葉以降の遺構と判断した。

## ST37 (図 302・図 305)

**検出状況** AH7・AI7 グリッド、SK602 底面で検出した。平面形は北西-南東方向に長い楕円に近い形状である。

**礎・遺物出土状況** 埋土は暗褐色土と黒褐色土が3層堆積する。1層は炭化物を含む。掘方の北西部の1・2層から径50cm程度の石皿(898)と円礎2点、長楕円礎2点が、礎の長辺と本遺構の長軸が揃うように出土した。その他に縄文土器や石器がa・1・2層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉と中期中葉のものである。

**出土遺物** 897はC群1c2類で外面に平行沈線文や半円形の貼付文を施す。898は有縁の石皿で表面に磨痕を残す。

**時期** 出土土器から中期中葉以降の遺構と判断した。

## ST40 (図 302・図 305)

**検出状況** AG11 グリッド、SK660 底面で検出した。SK660 と重複関係があり、SK660 より古い。平面形は円に近い形状である。

**礎・遺物出土状況** 埋土は暗褐色土の単層で、褐色土ブロックを含む。掘方中央の上面で径30cm程度の扁平な円礎1点、径10cm程度の円礎1点が出土した。その他に石器が1層から出土した。

**出土遺物** 899は短冊形の打製石斧である。横長剥片を素材とし、両側面を直線的に整える。900は平板の石皿で表面に磨痕を残す。

**時期** 重複関係がある中期のSK660より古いことから中期以前の遺構と判断した。

## ST43 (図 302・図 305)

**検出状況** AI11~AJ12 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI48、SK716 と重複関係があり、SK716 より古く、SI48 より新しい。平面形は北西部が消失しており、その他の辺は丸みをもつ。

**礎・遺物出土状況** 埋土は暗褐色土の単層で、褐色土ブロックを含む。北部から径25cm程度の円礎1点、径10cm程度の長楕円礎1点が平坦な面を上にした状態で出土した。また、縄文土器の深鉢(901~903)1個体が内面を上にした状態で出土した。その他に縄文土器や石器がa・b・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期中葉のものである。

**出土遺物** 901~903はC群2a類である。901は樽形の器形で外面に横位のリボン状突帯を貼付する。地文に縄文を施す。902・903は外面にリボン状突帯を貼付する。地文に縞糸文を施す。902・903は、接合関係はないものの胎土や器厚や文様が類似することから同一個体の可能性がある。

**時期** 中期後葉以降のSK716より古く、中期中葉のSI48より新しい。901などから中期中葉の遺構と判断した。

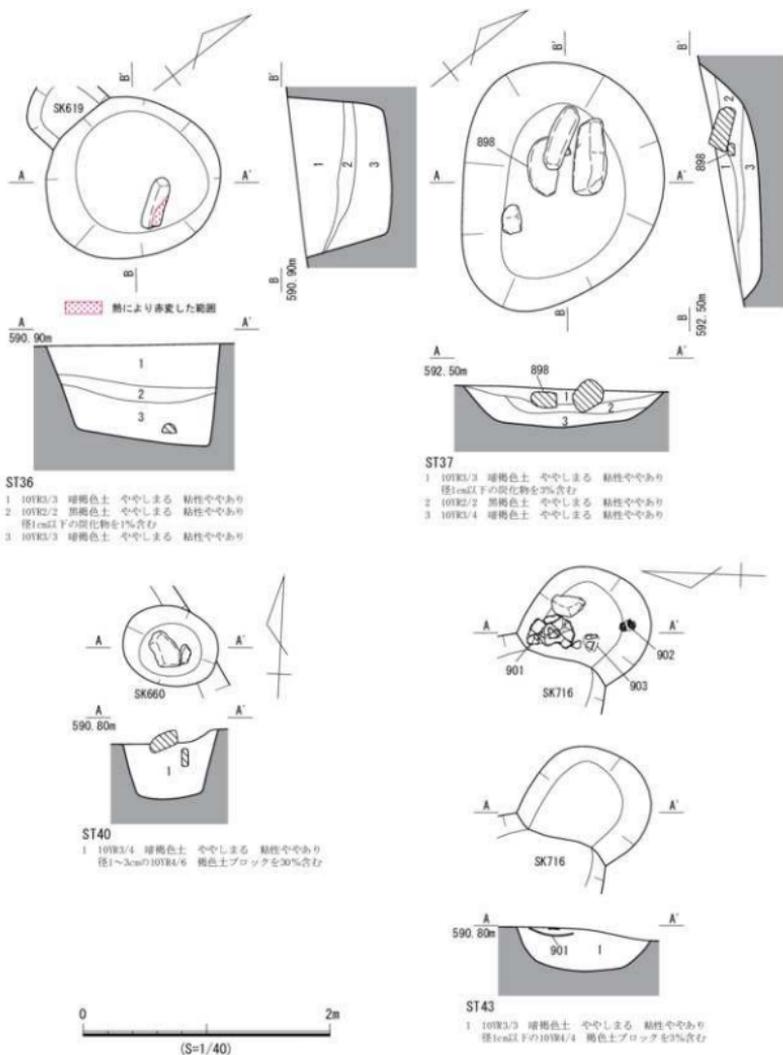


図 302 ST36・ST37・ST40・ST43 遺構図

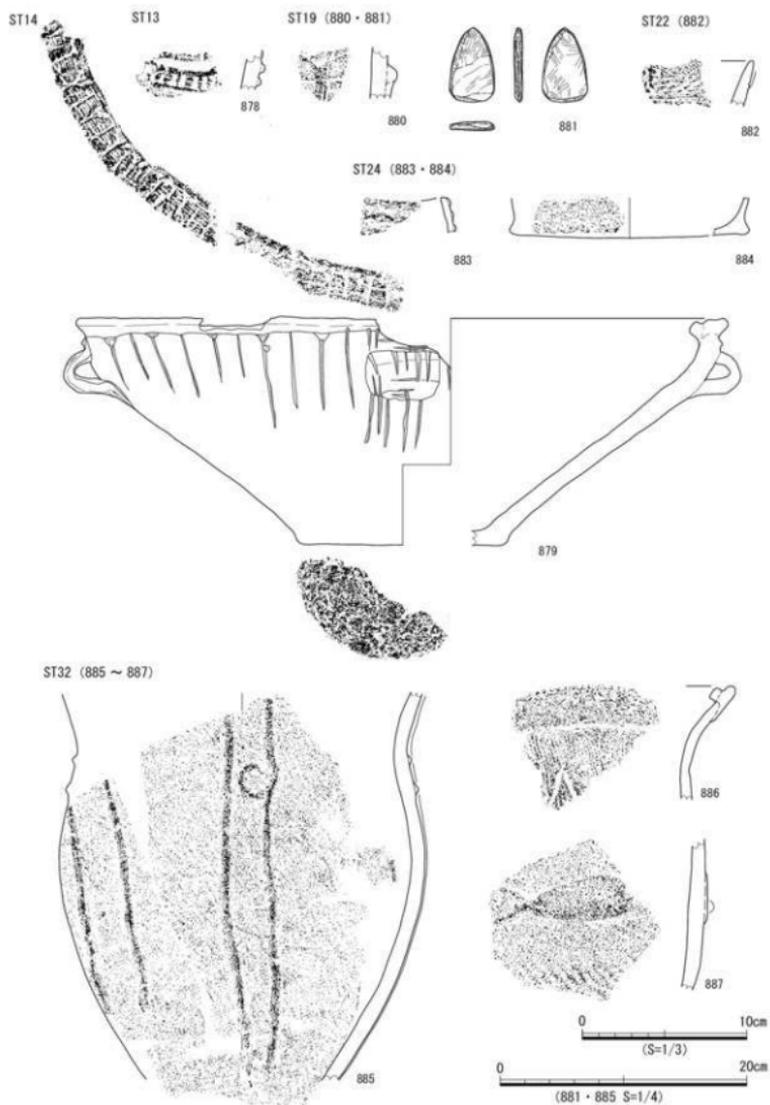
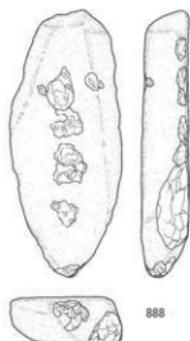


図303 ST出土遺物(1)

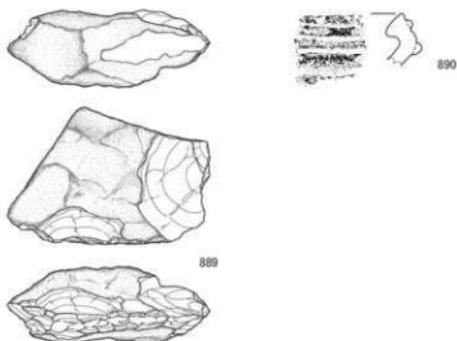
ST32 (888・889)



888

889

ST34 (890)

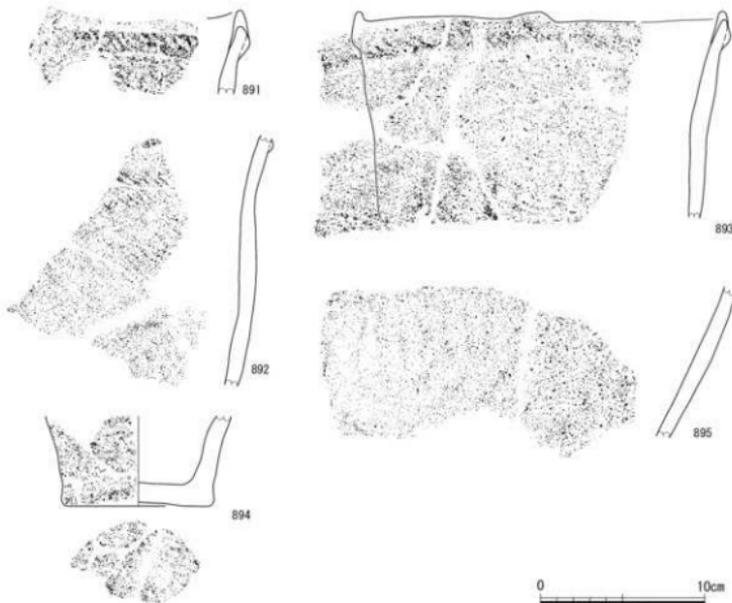


890



(888・889 S=1/4)

ST35 (891 ~ 895)



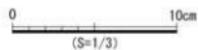
891

892

894

893

895



(S=1/3)

図304 ST出土遺物(2)

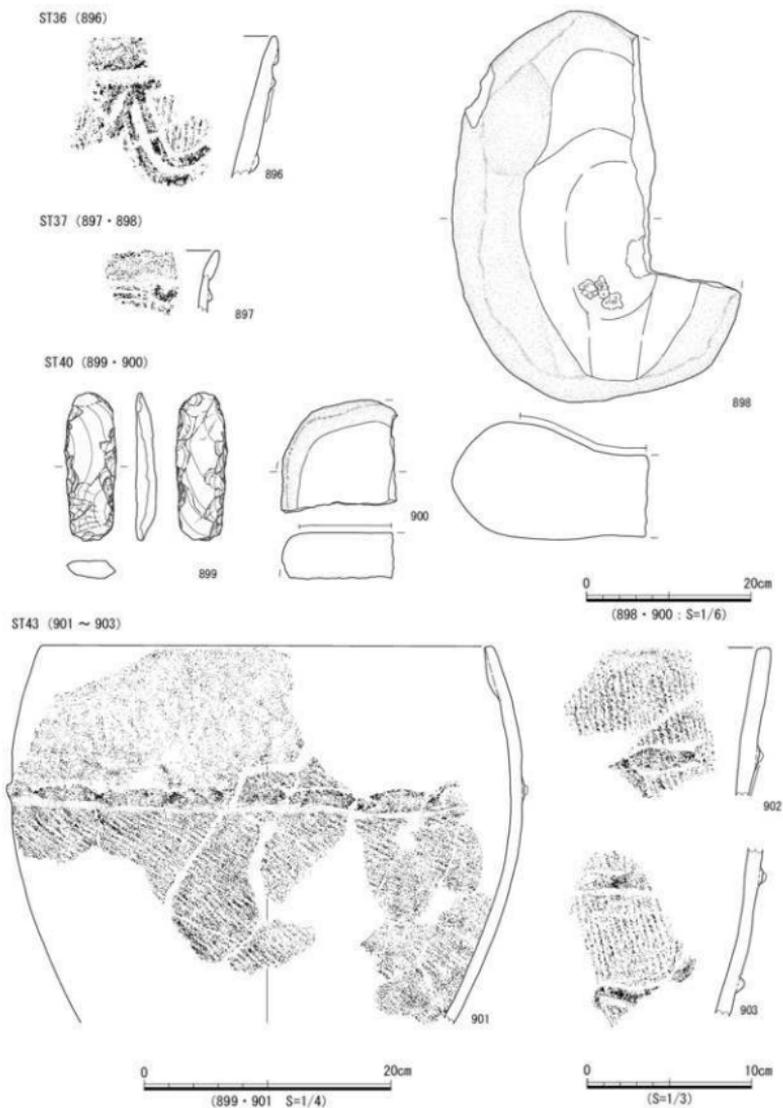


図 305 ST 出土遺物 (3)

## (4) 土坑

## SK31 (図 306・図 312)

**検出状況** AH12 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形は楕円に近い形状である。

**埋土** 暗褐色土が5層堆積する。1層・2層に褐色土ブロックを含む。

**遺物出土状況** 埋土中から縄文土器・石器が散在した状態で出土した。時期を特定できる土器は、中期後葉のものである。

**出土遺物** 904・905はC群1c2類である。904は外面に棒状施文具による綾杉状の沈線を施す。縦方向の隆帯に半截竹管状施文具による刻みを入れる。905は外面に棒状施文具による綾杉状の沈線を施す。縦方向の隆帯と渦巻の隆帯を貼り付ける。

**時期** 埋土から出土した土器(904・905)から、中期後葉の遺構と判断した。

## SK32 (図 306・図 312)

**検出状況** AH12 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形は楕円形である。検出時は円形に近い形状と2m近い直径であったことから堅穴建物と考えたが、床面や底面で遺構を確認できなかったことから土坑とした。

**埋土** 暗褐色土が3層堆積し、いずれの層にも褐色土ブロックを含む。また、1層に炭化物を含む。

**遺物出土状況** 埋土中から縄文土器・石器が散在した状態で出土した。上層からの出土が多い。時期を特定できる土器は、前期後葉と中期後葉のものである。

**出土遺物** 906はC群2a類で外面に半截竹管状施文具による沈線を施し、リボン状の突帯を貼り付ける。907はC群3c類で半截竹管状施文具により工字文状の沈線を施す。

**時期** 埋土から出土した土器(906・907)から、中期後葉の遺構と判断した。

## SK33 (図 306・図 312)

**検出状況** AJ16 グリッドで検出した土坑である。SI14 埋土上面で検出した。平面形は円に近い形状である。

**埋土** 暗褐色土が2層堆積する。2層に炭化物を含む。

**遺物出土状況** 埋土中から縄文土器・石器が散在した状態で出土した。時期を特定できる土器は、前期後葉と中期後葉のものである。

**出土遺物** 908はZ2群3a1類で外面に突帯による横線文を3条施し、突帯上半截竹管状施文具により縦に短い刻みを入れる。909はC群3a2類で外面に半截竹管状施文具による半隆起線文と連続爪形文を施す。

**時期** 埋土から出土した土器から中期前葉の遺構と判断した。

## SK259 (図 307・図 312)

**検出状況** AH12 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。ST9と重複関係があり、ST9より新しい。平面形は東西方向に長い楕円に近い形状である。

**埋土** 暗褐色土と褐色土が3層堆積する。1層は炭化物、2層は褐色土ブロックを含む。

**遺物出土状況** 縄文土器がb・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期中葉と中期後葉のものである。

**出土遺物** 910はC群3b1類で外面に基本隆帯と半隆起線文を施す。隆帯上に綾杉状の刻み、半隆

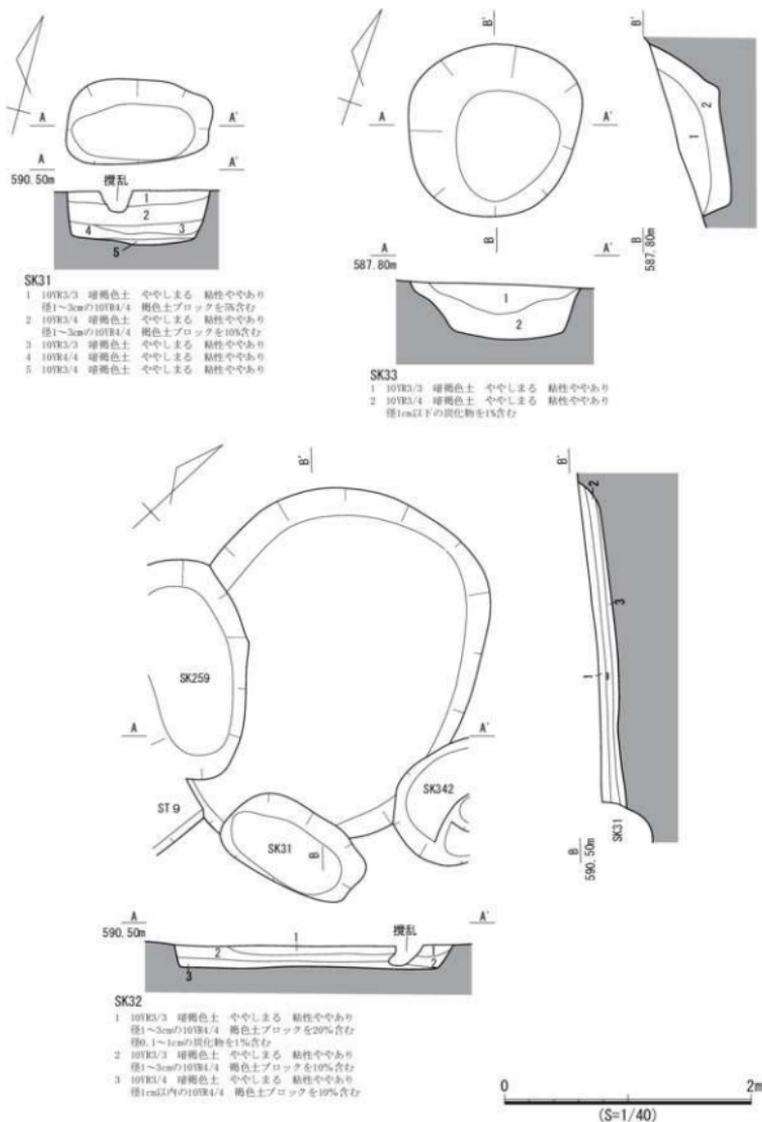


図 306 SK31・SK32・SK33 遺構図

起線間に刻みを入れる。911はC群3b3類で外面に突起や沈線や歯状施文具による刺突を施す。

**時期** 重複関係がある前期後葉のST9より新しい。また、出土土器から中期後葉以降の遺構と判断した。

#### SK422 (図307・図312)

**検出状況** AE8グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形は北西から南東方向に長い楕円に近い形状である。

**埋土** 褐色土の単層で、褐色土ブロックを含む。

**遺物出土状況** 縄文土器や石器がa層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期と中期後葉のものである。

**出土遺物** 912はC群1c2類で外面に縦位の隆帯と斜行沈線を施す。

**時期** 出土土器から中期後葉以降の遺構と判断した。

#### SK582 (図307・図312)

**検出状況** AH6グリッド、Ⅲ層上面で検出した。ST32と重複関係があり、ST32より新しい。平面形は円に近い形状である。

**埋土** 黒褐色土と褐色土が3層堆積し、1層は褐色土ブロック、2・3層は炭化物を含む。なお、1層には立石状の礫が認められこれを立てるための掘方と考えるが、2・3層とは別遺構であったと考えられる。

**遺物出土状況** 掘方の中央から縄文土器と石器がb・c・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉と中期後葉のものがあり、ほとんどが中期後葉である。

**出土遺物** 913はC群1c2類で外面に縦位区画の隆帯と区画内に縦位の沈線や蛇行沈線を施す。

**時期** 中期後葉のST32より新しいことや出土土器から中期後葉以降の遺構と判断した。

#### SK584 (図307・図312)

**検出状況** AH6グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形は西辺と東辺が直線的で隅丸方形に近い形状をとる。

**埋土** 暗褐色土が3層堆積し、いずれも炭化物を含む。

**遺物出土状況** 縄文土器と石器がc・d・1・2層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期と中期後葉のものである。

**出土遺物** 914はC群1c2類で外面に隆帯と斜行沈線を施す。915はC群10類で底部は平底である。胴部外面に縄文を施す。

**時期** 出土土器から中期後葉の遺構と判断した。

#### SK605 (図308・図312)

**検出状況** AH7・AG8グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SK603、SK607と重複関係があり、SK607より古く、SK603より新しい。平面形は全体的に隅丸方形に近いが、東部は丸みがある。

**埋土** 暗褐色土の単層で、褐色土ブロックを含む。

**遺物出土状況** 縄文土器と石器がb・c・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期中葉のものである。

**出土遺物** 916はC群1a3類で外面に隆帯と押し状の刺突文による横位区画文や沈線や貼付文を施

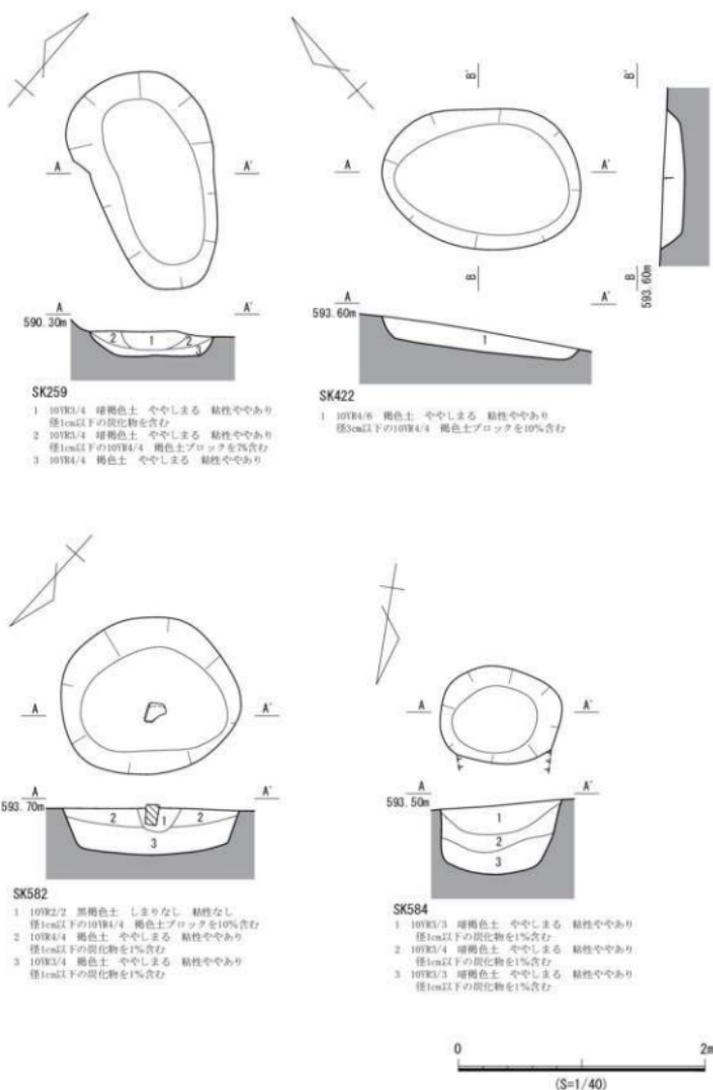


図 307 SK259・SK422・SK582・SK584 遺構図

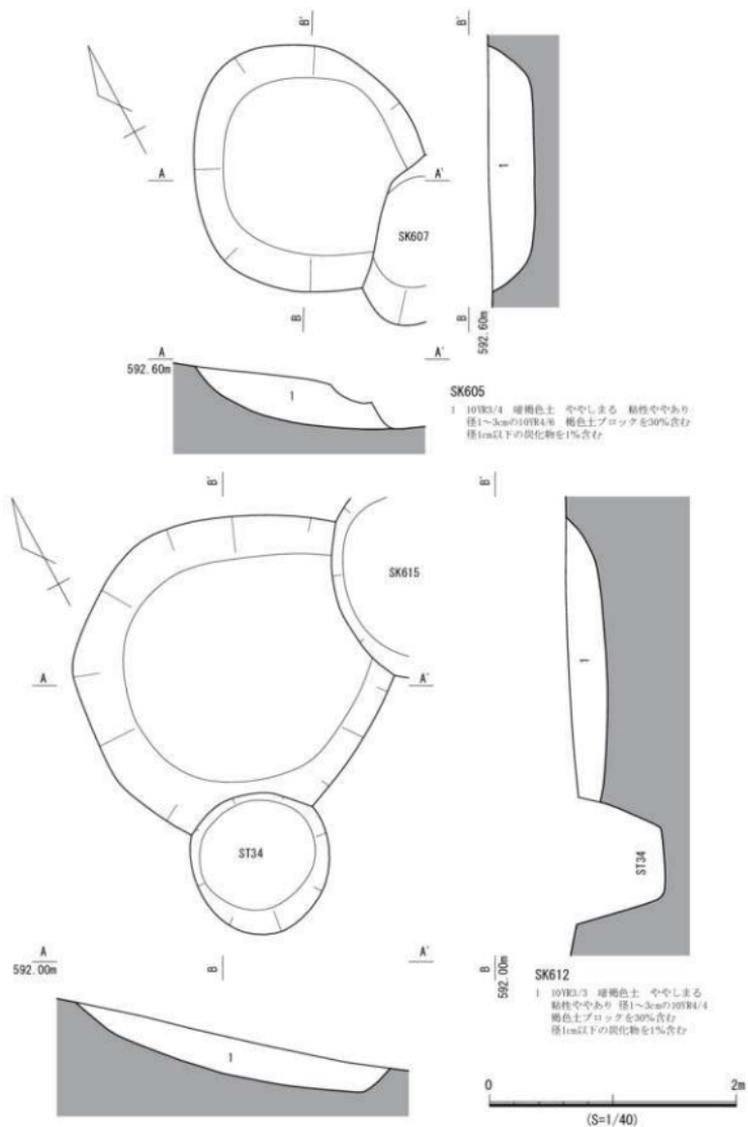


図 308 SK605・SK612 遺構図

す。

**時期** 中期中葉のSK603よりも新しいことや出土土器から中期中葉以降の遺構と判断した。

**SK612 (図 308・図 312)**

**検出状況** AH8・AI8グリッド、Ⅲ層上面で検出した。ST34・SK615と重複関係があり、いずれより古い。平面形は南部のみ直線的であるが、円に近い形状をとる。

**埋土** 暗褐色土の単層で、褐色土ブロックと炭化物を含む。

**遺物出土状況** 縄文土器と石器がa・b・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉と中期中葉と中期後葉のものである。

**出土遺物** 917はC群2a類で外面に横位のリボン状突帯を貼付する。918はC群3b3類で外面に半隆起線を施す。919はC群10類で口縁部の外面を隆帯により区画する。

**時期** 中期後葉以降のST34や中期後葉のSK615よりも古いことや出土土器から中期後葉の遺構と判断した。

**SK614 (図 309・図 312)**

**検出状況** AH8・9、AI8グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI52、SK615と重複関係があり、SK615より古く、SI52より新しい。平面形は南辺がSK615と重複し、その他の3辺は丸みをもつ不定な形状である。

**埋土** 黒褐色土が2層堆積し、1層は褐色土ブロック、2層は炭化物を含む。堆積や掘方の形状から1層と2層は別遺構であった可能性がある。

**遺物出土状況** 縄文土器と石器がa・b・c・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期のものである。

**出土遺物** 920はZ2群3d類で外面に素文の突帯を貼付する。

**時期** SI52との重複関係から中期後葉の遺構と判断した。

**SK615 (図 309・図 312)**

**検出状況** AH8・AI8グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SK612・SK614と重複関係があり、SK612・SK614より新しい。平面形は楕円に近い形状である。

**埋土** 黒褐色土と暗褐色土が4層堆積し、1層は炭化物、2・3層は褐色土ブロックを含む。

**遺物出土状況** 縄文土器と石器がc・2・3層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期中葉と中期後葉のものである。

**出土遺物** 921はC群2a類で外面に横位のリボン状突帯を貼付する。922はC群3b3類で外面に刻みのある隆帯と半隆起線を施す。

**時期** 中期後葉のSK612・SK614より新しいことや出土土器から中期後葉以降の遺構と判断した。

**SK620 (図 309・図 312)**

**検出状況** AI9グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI52と重複関係があり、SI52より新しい。平面形は隅丸方形に近い形状である。

**埋土** 褐色土と黒褐色土が2層堆積し、炭化物を含む。

**遺物出土状況** 縄文土器と石器がb・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期後葉のものである。

**出土遺物** 923はC群3b3類で外面に刻みのある隆帯を横位に施す。

**時期** 中期後葉のSI52よりも新しいことや出土土器から中期後葉以降の遺構と判断した。

SK628 (図309・図312)

**検出状況** AF9グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形は円形に近いが、北東部のみ突出気味になる不定な形状である。

**埋土** 暗褐色土の単層で、褐色土ブロックを含む。

**遺物出土状況** 掘方中央で径20cm程度の扁平円礫が1点、底面から浮いた状態で出土した。その他に縄文土器が1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期のものである。

**出土遺物** 924はC群8類で口縁部の外面が肥厚する。外面は無文である。

**時期** 出土土器から中期以降の遺構と判断した。

SK638 (図309・図312)

**検出状況** AH9・10グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI38と重複関係があり、SI38より新しい。平面形は北部のみ直線的な円に近い形状である。

**埋土** 黒褐色土と暗褐色土が2層堆積し、2層は炭化物を含む。堆積状況とその掘方の形状から1層と2層は別遺構であった可能性がある。

**遺物出土状況** 掘方北部から径20cm程度の円礫が1点出土した。その他縄文土器と石器がc・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期中葉と中期中葉と中期後葉のものである。

**出土遺物** 925はC群7類で外面に縄文を施す。926はC群8類で外面は無文である。口唇部に沈線を施し、沈線内を刺突する。

**時期** 中期後葉のSI38より新しいことや出土土器から中期後葉以降の遺構と判断した。

SK642 (図310・図313)

**検出状況** AH10・AI10グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI38・SI39と重複関係があり、SI38・SI39より古い。平面形は隅丸方形に近い形状である。

**埋土** 暗褐色土と黒褐色土が3層堆積し、1層にはふい赤褐色土ブロックを含む。

**遺物出土状況** 縄文土器と石器がa・b・c・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期前葉から後葉のものまでであるが、ほとんどが中期前葉から中葉のものである。

**出土遺物** 927はC群1c2類で外面に隆帯による渦巻文を施す。928はC群3a2類で外面に爪形文と半隆起線文を施す。929・930はC群4a類である。929は外面に隆帯や平行沈線や三角印刻を施す。

930は外面に平行沈線を施す。

**時期** 中期後葉のSI38や中期後葉以降のSI38よりも古いことや出土土器から中期後葉以前の遺構と判断した。

SK675 (図310・図313)

**検出状況** AI6・AJ6グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形は東西に長い楕円に近い形状である。

**埋土** 暗褐色土の単層である。

**遺物出土状況** 縄文土器と石器がa・b・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉と前期末葉と中期前葉のものである。

**出土遺物** 931はC群3a1類で外面に半隆起線文と細線文を施す。

**時期** 出土土器から中期前葉以降の遺構と判断した。

**SK701 (図310・図313)**

**検出状況** AK7・AK8グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI50、SI51と重複関係があり、いずれより新しい。平面形は北辺と南辺が直線的で、その他の2辺は丸みをもつ楕円に近い形状である。

**埋土** 黒褐色土の単層で、褐色土ブロックと炭化物を含む。

**遺物出土状況** 縄文土器と石器がa・b・c・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期前葉と中期中葉のものである。

**出土遺物** 932はC群3b2類で外面に櫛歯状施文具による刺突のある基本隆帯、半隆起線文や沈線を施す。933はC群4a類で外面に連続爪形文を施す。

**時期** 重複する中期前葉のSI50、SI51より新しいことや出土土器から中期中葉以降の遺構と判断した。

**SK705 (図310・図313)**

**検出状況** AK8グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI51と重複関係があり、SI51より新しい。平面形は東西に長い楕円に近い形状である。

**埋土** 黒褐色土の単層で、炭化物を含む。

**遺物出土状況** 縄文土器と石器がa・b・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期後葉のものである。

**出土遺物** 934はZ2群3a2類で外面に突帯を貼付し、突帯上に斜めの刻みを入れる。

**時期** 出土土器は前期後葉のものであるが、重複関係がある中期のSI51より新しいことから中期以降の遺構と判断した。

**SK716 (図311・図313)**

**検出状況** AI11・AJ11グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI48・ST43・SK348と重複関係があり、いずれよりも新しい。平面形は北西-南東方向に長い楕円に近い形状である。

**埋土** 暗褐色土の単層で、褐色土ブロックを含む。

**遺物出土状況** 縄文土器がb・c・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、前期と中期中葉のものである。

**出土遺物** 935はC群1a3類で外面に隆帯と押し状の刺突、平行沈線を施す。936はC群3b2類で外面に半隆起線文と爪形文を施す。937はC群2b類で外面に撚糸文を施す。

**時期** 重複関係がある中期中葉のSI48やST43より新しいことや出土土器から中期中葉以降の遺構と判断した。

**SK717 (図311・図313)**

**検出状況** AJ11グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI48・SK718・SK719と重複関係があり、SK718・SK719より古く、SI48より新しい。平面形はSK718・SK719と重複するため形状は不明であるが、残存状態から楕円の可能性がある。

**埋土** 黒褐色土の単層で、褐色土ブロックと炭化物を含む。

**遺物出土状況** 縄文土器と石器がb・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期中葉のものである。

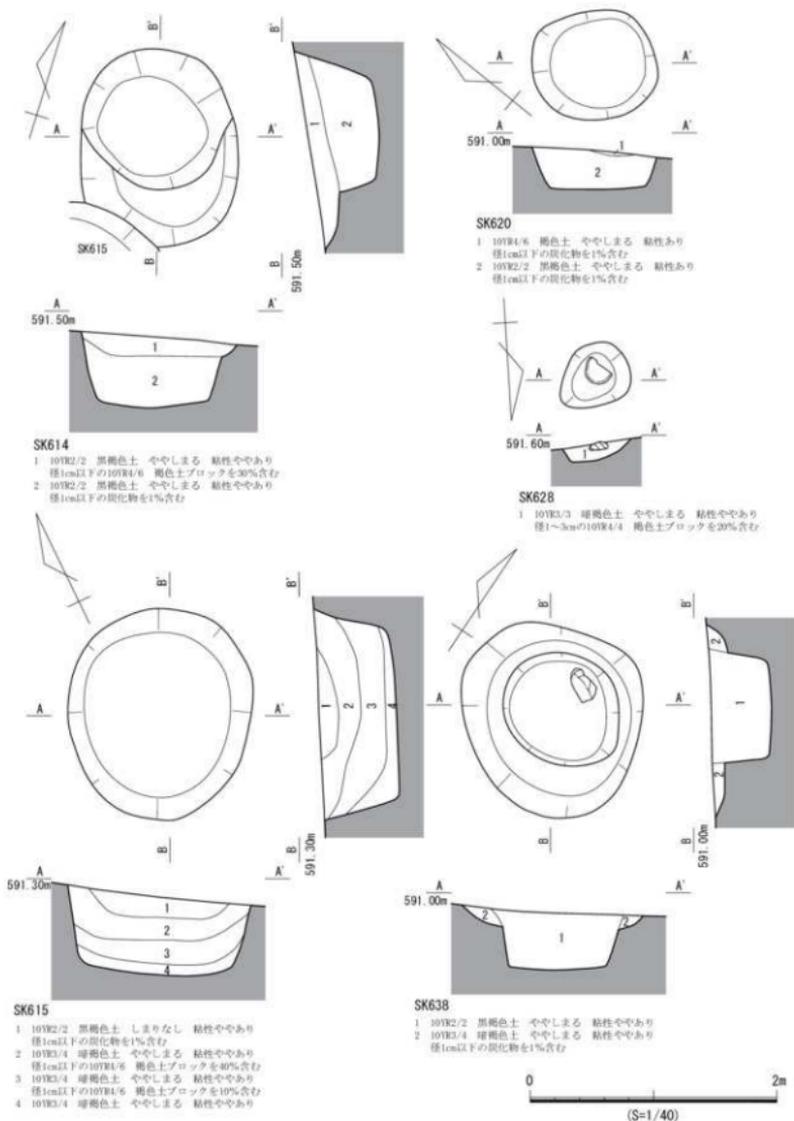


図 309 SK614・SK615・SK620・SK628・SK638 遺構図

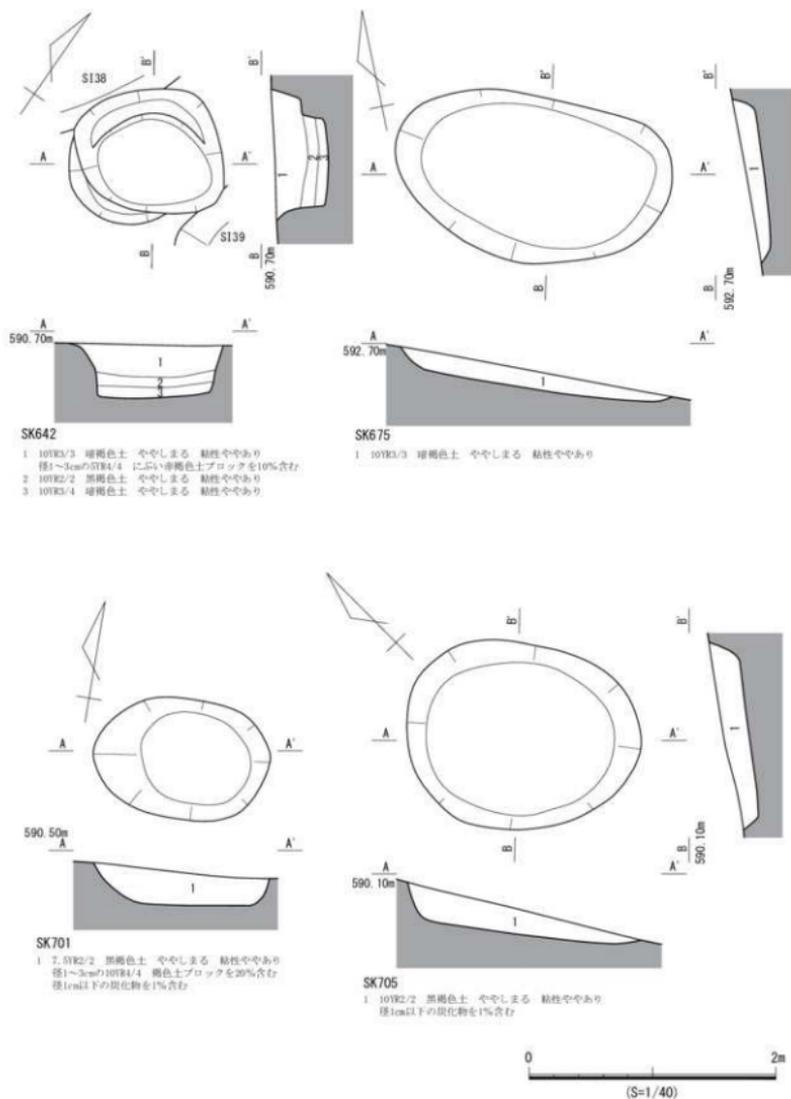


図 310 SK642・SK675・SK701・SK705 遺構図

**出土遺物** 938 はC群1 a 3類で外面に刺突文、隆帯による渦巻文や区画文を施す。区画内は斜行沈線を施す。939・940 はC群2 c類で外面に櫛歯状施文具による刺突文、隆帯による横クランク状の渦巻文を施す。939・940 は接合関係がないものの、胎土や器厚や文様が類似することから、同一個体と考えられる。

**時期** 重複関係があるSI48・SK718・SK719はいずれも中期中葉の遺構である。重複関係や出土土器から中期中葉以降の遺構と判断した。

#### SK718 (図311・図313)

**検出状況** AJ11・12グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI48・SK717・SK719と重複関係があり、いずれよりも新しい。平面形は円に近い形状である。

**埋土** 黒褐色土と暗褐色土が2層堆積し、炭化物を含む。

**遺物出土状況** 縄文土器かと石器がa・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期中葉のものである。

**出土遺物** 941 はC群1 c 2類で外面に隆帯による渦巻文、沈線による腕骨文を施す。942 はC群3 b 2類で外面に隆帯と沈線を施し、隆帯上を刻む。

**時期** 重複関係があるSI48・SK718・SK719はいずれも中期中葉の遺構である。重複関係や出土土器から中期中葉以降の遺構と判断した。

#### SK719 (図311・図313)

**検出状況** AJ11グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI48・SK717・SK718と重複関係があり、SK718より古く、SI48・SK717より新しい。平面形はSK718と重複するため形状は不明であるが、残存状態から楕円の可能性がある。

**埋土** 暗褐色土の単層で、褐色土ブロックと炭化物を含む。

**遺物出土状況** 縄文土器と石器がb・1層から散在した状態で出土した。時期が特定できる土器は、中期中葉のものである。

**出土遺物** 943 はC群1 a 3類で外面に押引状の刺突文や隆帯を施す。944 はC群3 b 2類で外面に隆帯や半隆起線を施す。隆帯上は櫛歯状施文具による刺突文を施す。

**時期** 重複関係があるSI48・SK718・SK719はいずれも中期中葉の遺構である。重複関係や出土土器から中期中葉以降の遺構と判断した。

#### 注

1) 縄文時代前期の竪穴建物では、飛騨地域や富山県において竪穴建物の床面で検出した遺構で竪穴建物の主柱穴の間に配置される貯蔵穴の事例が、以下の文献で紹介されている。

三島誠 2017「飛騨地域における縄文時代前期中葉から後葉の竪穴建物について」『岐阜県文化財保護センター研究紀要』第3号

金三津道子 2015「第四章総括 1 平岡遺跡の集落構造」『平岡遺跡』、公益財団法人富山県文化振興財団埋蔵文化財調査事務所

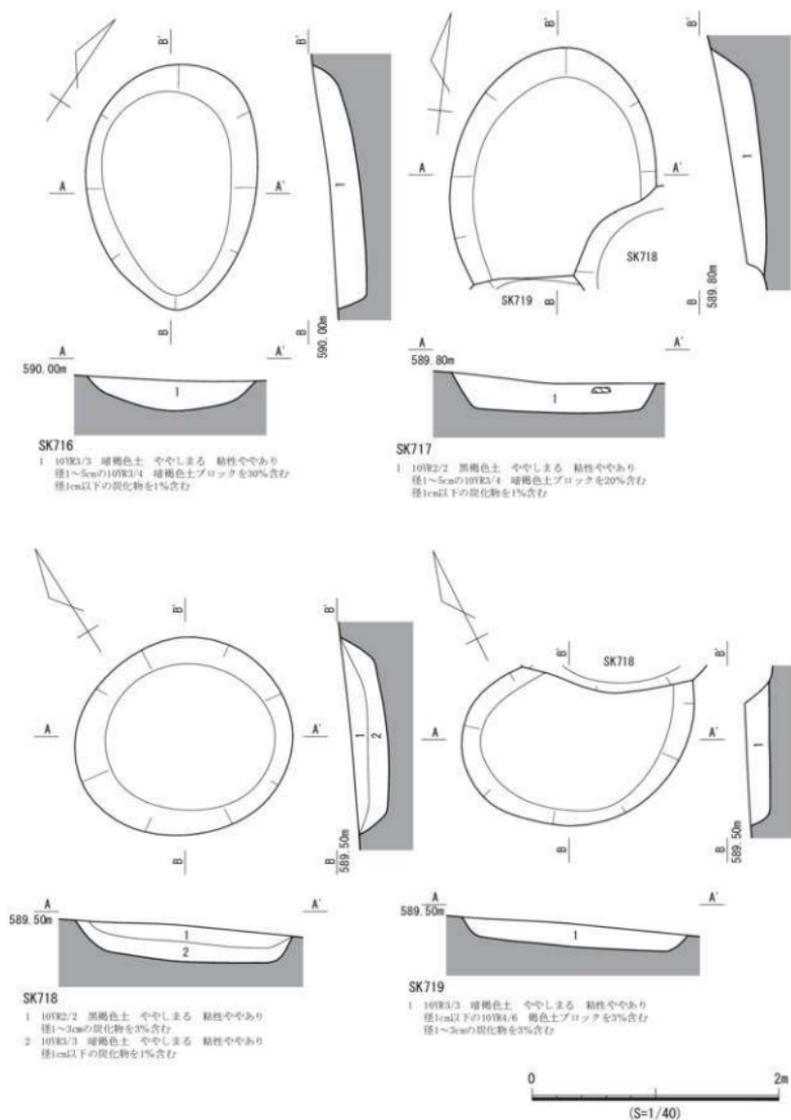


図 311 SK716・SK717・SK718・SK719 遺構図

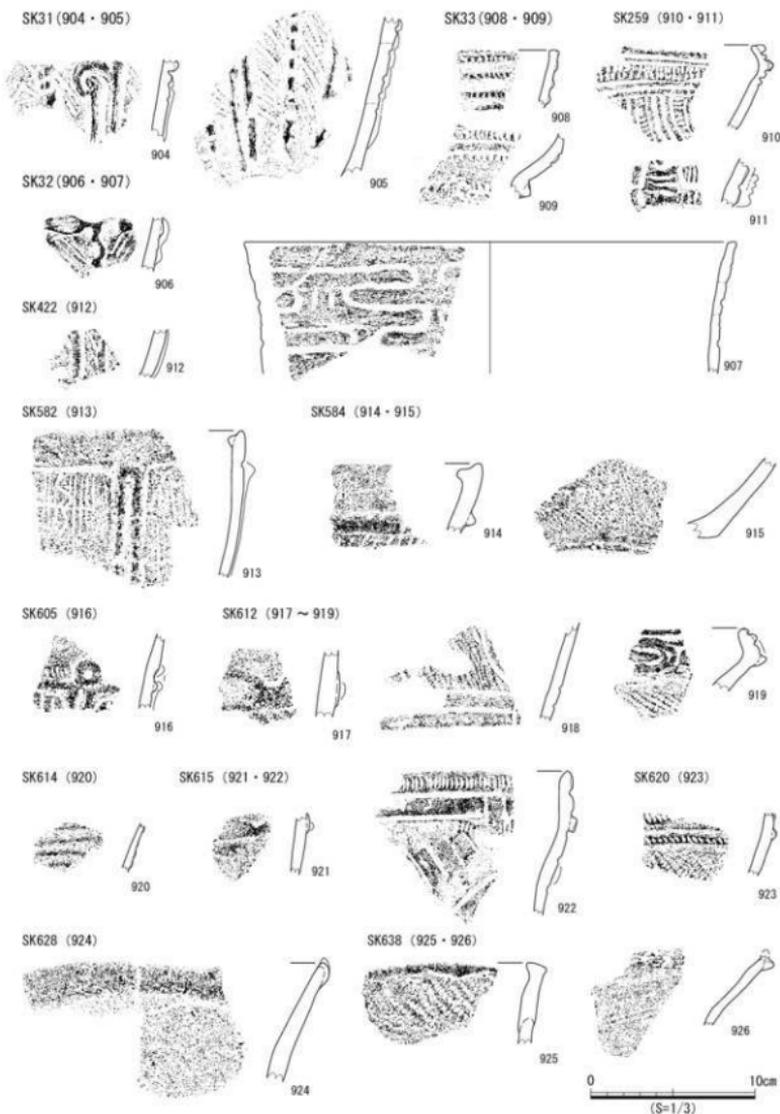


図 312 SK 出土遺物 (1)

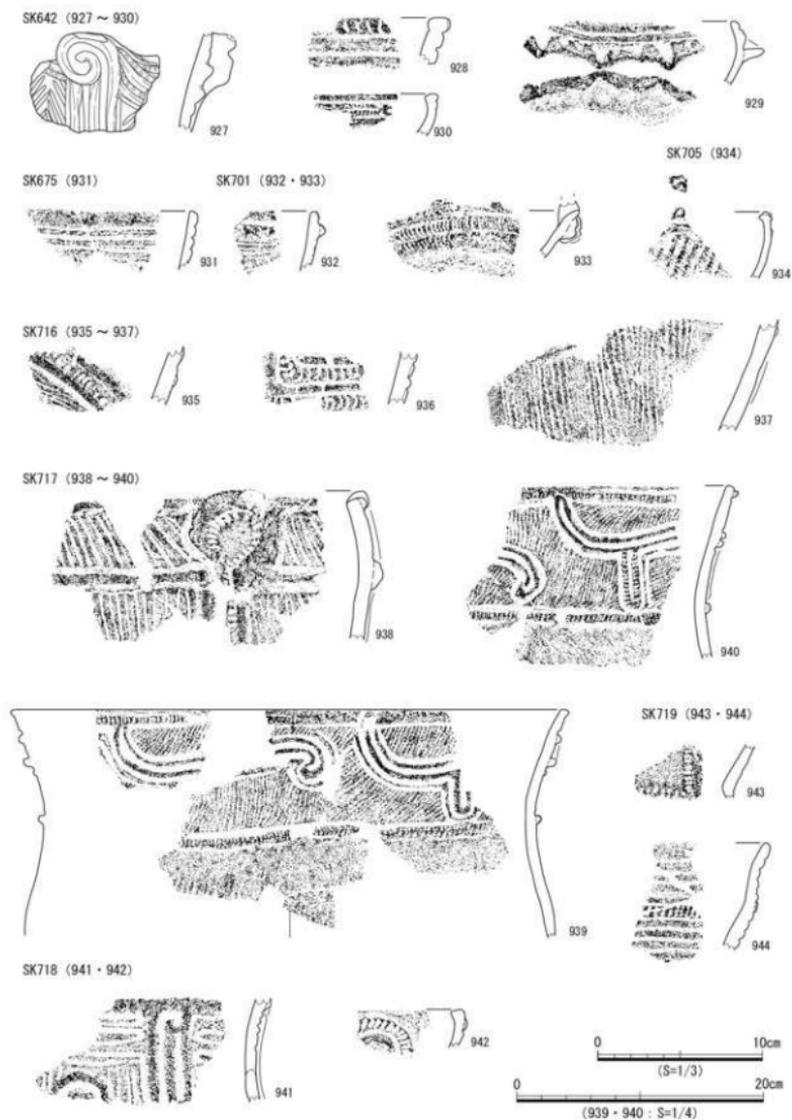


図 313 SK 出土遺物 (2)

## 第4節 弥生時代から古墳時代の遺構・遺物

## 1 弥生時代の遺構

## (1) 土坑墓

## ST15 (図314・図315)

**検出状況** AJ15・AJ16 グリッド、ST15 埋土上面で検出した。掘方の平面形は楕円形に近い。

**埋土** 暗褐色土が2層水平に堆積する。2層は褐色土ブロックを含む。

**遺物出土状況** 弥生土器の甕が1層から3個体(945~947)出土した。945は胴部下半のない個体で外面を上にした状態で946の上面を覆う。945の口縁部は東方向に向き、945の北部は947の内側に入る。946は胴部下半のない個体で、個体の西部は直立した状態、個体の北部は947の内側に入る状態、東部は断面図に見られるように土坑の中央に入る状態で出土した。947は掘方北部の埋土上層で横位に口縁部が土坑の中央を向き、ほぼ完形で土圧により潰れた状態で出土した。この他に縄文土器や石器が散在した状態で出土した。また、掘方の東部・西部・南部の1層から礫が出土した。

**出土遺物** 945~947は弥生土器の甕である。945・946は口縁部をわずかに肥厚させ、段をもつ。口縁端部には刻み目を施す。口縁部と胴部の内外面には板ナデ調整後、ヘラ状工具で横羽状文を施す。947は横羽状文甕特有の口縁部の肥厚や口縁端部の刻み目を施さない。口縁部と胴部の内外面には板ナデ調整後、ヘラ状工具で横羽状文を施す。底部外面に木葉文を残す。

**時期** 945~947から弥生時代中期中葉の遺構と判断した。

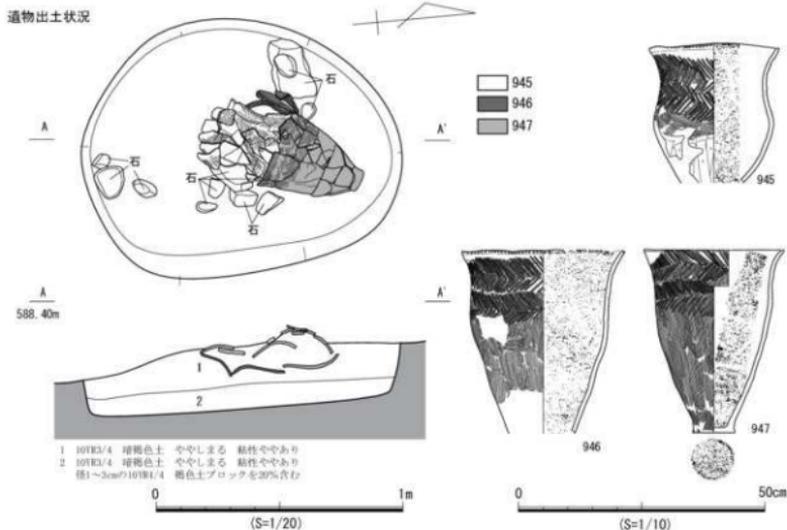


図314 ST15 遺構図



図 315 ST15 出土遺物

## 2 古墳時代の遺構

## (1) 墳墓・方形周溝墓

## SZ1 (図316~図318)

**検出状況** AI14~AK14 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。南東に下る傾斜地に立地する。

**方台部** 傾斜の下方で周溝が途切れる。墳丘盛土は確認できなかった。周溝の平面形状は半円に近い不定な形状をとる。方台部で東西方向に長軸をもつ土坑2基を確認した。方台部のほぼ中央で検出したことから主体部とした。主体部の深さは0.2mと浅いことから本来は墳丘があった可能性が高い。主体部1・主体部2は重複関係があり、主体部1が主体部2よりも新しい。主体部1掘削時に主体部2の埋土まで掘り込んだ部分があり、主体部2の埋土の一部が消失している。

**周溝** 暗褐色土が5層堆積する。1~3層は方台部側に偏って堆積し、4・5層は周溝の外側に堆積する。周溝の幅は1.2m~2.5mであり、周溝外周の北辺は丸みをもち、西辺は南へ突き出る不定な形

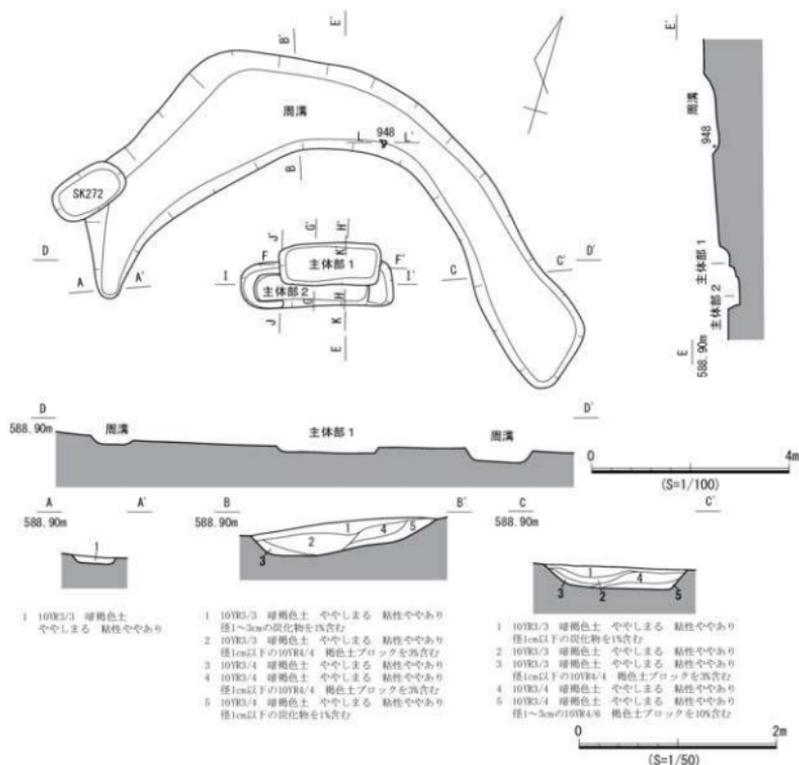


図316 SZ1遺構図(1)

状である。北辺と西辺を繋ぐ括れ部分の幅は狭い。深さは最大0.3mである。

**遺物出土状況** 北側の周溝の5層から土師器(948)が底面から若干浮いた状態で出土した。また、北側の溝のa層から白玉(949)、b層から白玉(950)が出土した。この他に周溝から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。

**出土遺物** 948は土師器の短頸壺である。外面は摩耗が激しく、器面調整は不明であるが、内面は横方向のナデ調整が認められる。北陸地方の白江式から古府クルビ式に比定できる<sup>1)</sup>。949・950は周溝から出土した玉類である。いずれも白玉で全体に磨痕・線条痕が認められる。穿孔方法は949が片側穿孔、950は両面穿孔である。

**時期** 948の土師器は溝の底面付近で出土していることから、溝が次第に埋没する段階の資料と考えられる。948には体部はないが口縁部が1個体分残存しており、斜面上方から流入したとは考えにくい。また、方台部側で出土していることや周溝底面から若干浮いた状態で出土したことから、墳丘上で葬送祭祀が行われ、これが投棄または転落した可能性がある。そのため、SZ1は948の時期から古墳時代初頭の遺構と考えられる。

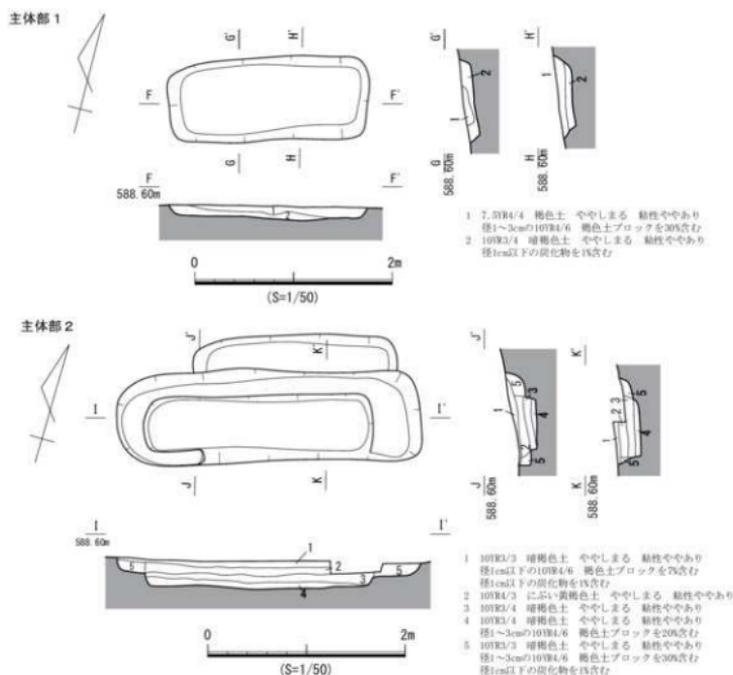


図 317 SZ1遺構図(2)

## 遺物出土状況

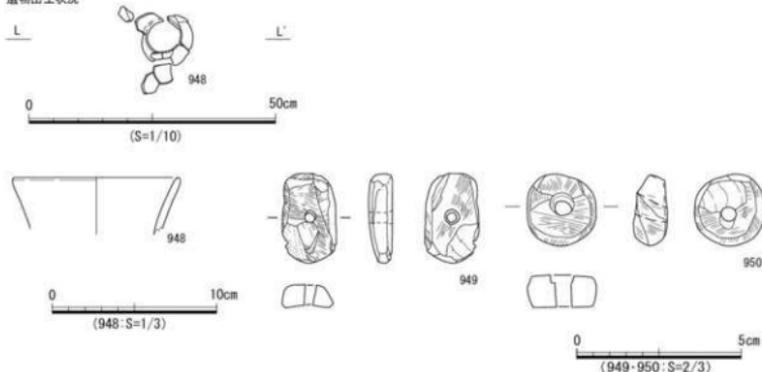


図 318 SZ 1 出土遺物

## 中切上野 5号古墳 (SZ 2) (図 319～図 321)

**検出状況** 県遺跡番号 (21203-00445) の周知の遺跡であり、発掘区内の位置ではAH3～AK5 グリッド、II a 層上面で検出した。平成 30 年度発掘区の西端に位置する。南側を下る傾斜地に立地する。

**方台部** 平面形は、各辺が直線的であることから方台部は方形と考えられる。墳丘は、旧表土上に墳丘外部を堤状に盛土 (6～9 層) し、その内側に 5 層を充填する。盛土の色調は褐色・明褐色であり、III 層の色調に類似する。墳丘の封土 (1 層) を除去後、方台部中央やや南寄りで東西方向に長軸をもつ長方形の主体部を確認した。褐色土・黄褐色土の 3 層が堆積する。1 層は亜円礫、2 層・3 層はブロック土を含む。

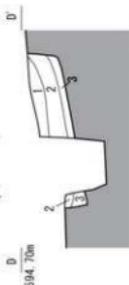
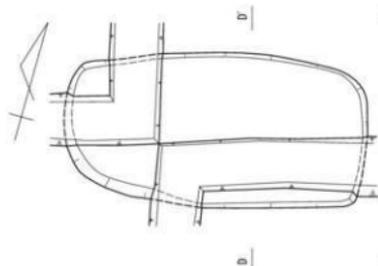
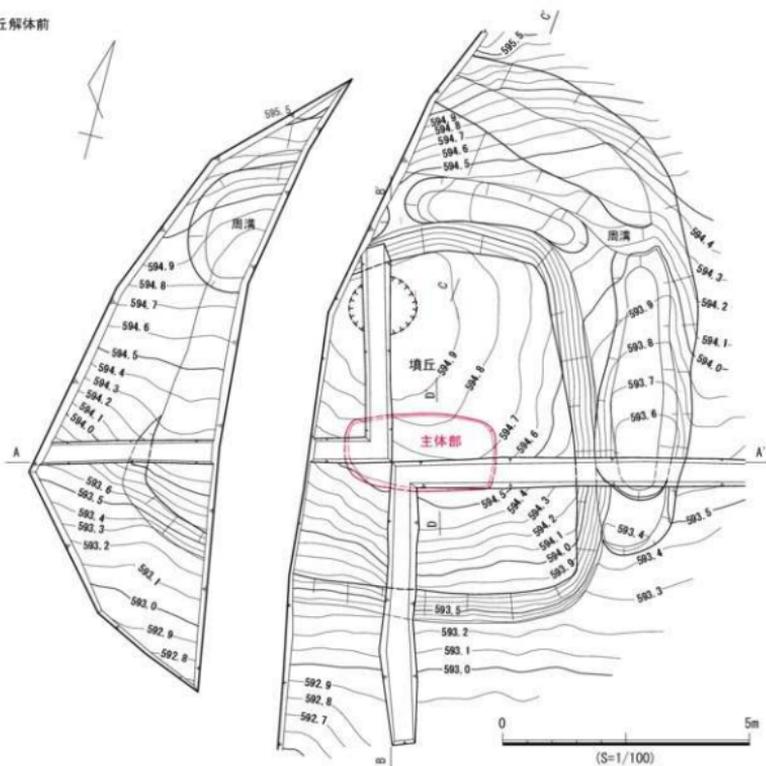
**周溝** 傾斜上方の北と東のみ残存しているが、南辺と西辺は斜面下方となるため、溝状に残らなかったと考えられる。墳丘寄りの底面には直線的な溝状の窪みがあり段差がある。東溝外側の掘方は緩やかに傾斜するが、墳丘寄りには墳丘と同じ急傾斜である。東溝の底面には直線的な溝状の窪みがあり段差がある。1・2 層は黒褐色土で II b 層と色調が類似する。3・4 層は暗褐色土で、基盤層起源の褐色土ブロックを含む。3 層・4 層は墳丘側に堆積することから、墳丘の流出土と考えられる。5 層は褐色土で基盤層起源の褐色土ブロックを含む。基盤層と類似する埋土である。周溝の幅は 2.12m～3.98m であり、北溝の幅が広く、東溝がやや狭い。なお、墳丘下部の調査を実施した際、周溝と軸が類似する溝 1 条 (SD 2) とこれと長軸方向が直交する土坑 (SK738) を確認した。SD 2 の方台部との位置関係から墳丘構築当初に掘削された周溝の名残と考えられ、その後、方台部の規格が変更されたことに伴い埋め殺されたと考えられる。周溝の深さは 0.44m～0.49m である。周溝内で埋葬施設と考えられるような土坑は確認できなかった。

**遺物出土状況** 周溝の埋土中から縄文土器や石器が散在した状態で出土した。

**出土遺物** 時期を特定できる遺物が出土していないため図化していない。

**時期** SZ 1 や中切上野 1 号古墳と一連の遺構群と考えられ、これらの遺構とそれほど時期差はないと考えられる。

墳丘解体前



**主体部**

- 1 10YR4/6 褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
径1cm以下の赤円礫を1%含む
- 2 7.5YR4/4 褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
径1cm以下の10YR4/6 褐色土ブロックを7%含む
- 3 10YR4/3 にごい黄褐色土 ややしまる 粘性ややあり  
径1cm以下の10YR4/6 明褐色土ブロックを10%含む



図 319 5号古墳 (SZ 2) 遺構図 (1)

墳丘解体後

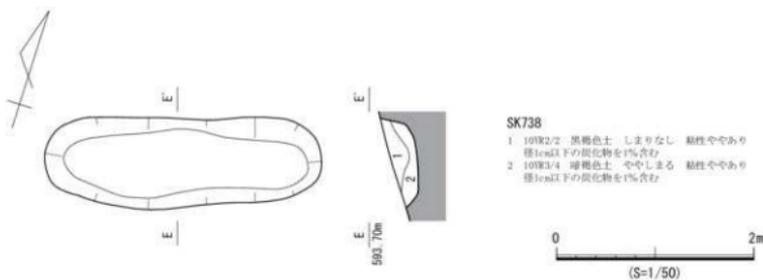
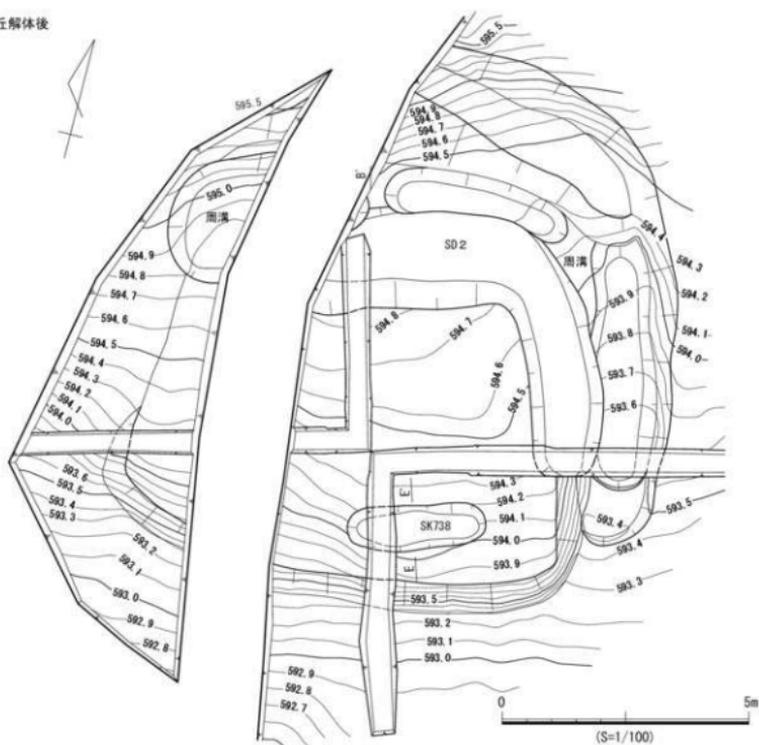


図 320 5号古墳 (SZ 2) 遺構図 (2)

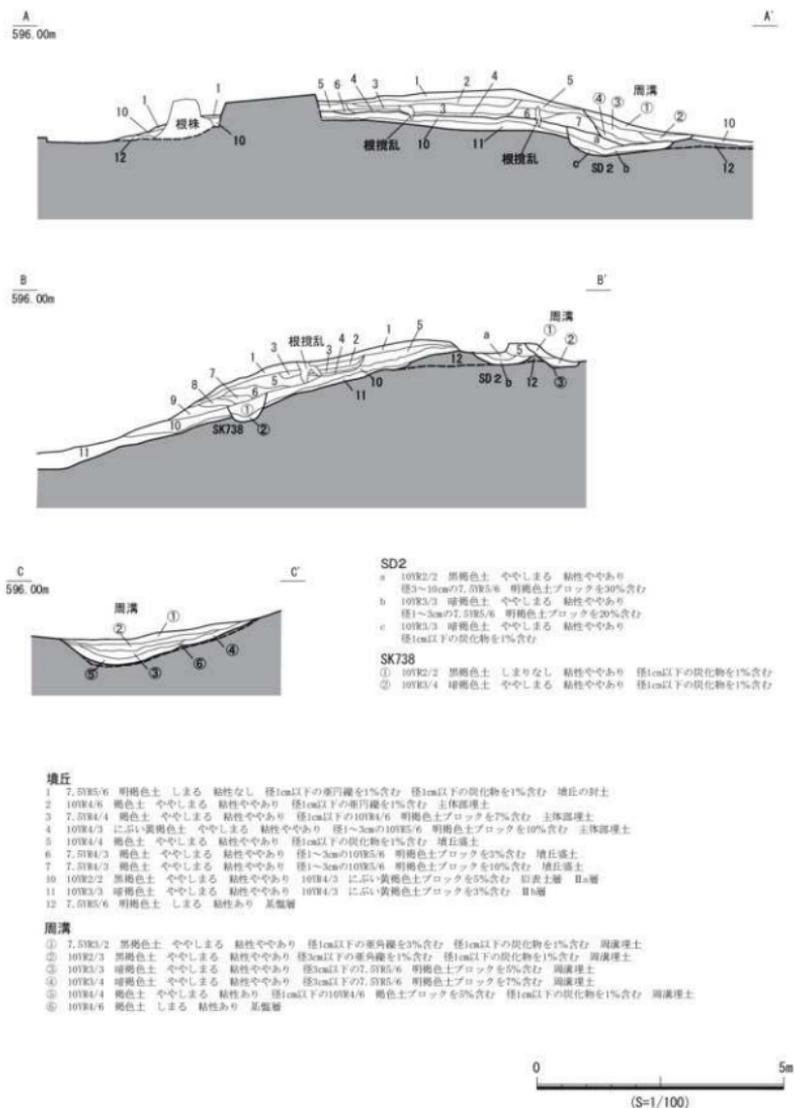


図 321 5号古墳 (SZ 2) 遺構図 (3)

## (2) 土坑墓

## ST29 (図 322)

**検出状況** AG7・8グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SI36と重複関係があり、SI36より新しい。平面形は丸みをもつ不定な形状をとり、北部が直線的である。

**礎・遺物出土状況** 埋土は暗褐色土の単層で、褐色土ブロックを含む。掘方南部で底面から浮いた状態で鉄刀(952)が1点出土した。その他にb層から古墳時代後期の須恵器(951)が1点出土した。

**出土遺物** 951は須恵器の蓋である。外面に回転ヘラ削り調整が認められる。952は鉄刀である。腹側・背側ともに関をもつ。刀の表裏面には木質が部分的に残存する。把部分の木質部は弧状の突出し、また腹側を残存することから、突出部をもつ落とし込み式の把の可能性がある。刀の茎部分のほぼ中央には把を固定するための目釘穴がある。

**時期** 須恵器は細片のため、詳細な時期は不明である。鉄刀は古墳時代前期の可能性があるが、突出部をもつ落とし込み式の把の類例がなく細別時期を特定できないため、古墳時代の遺構と判断した。

## 注

- 1) 高橋浩二氏の御教示による。
- 2) 岐阜県文化財保護センター2020『中切上野1号古墳』

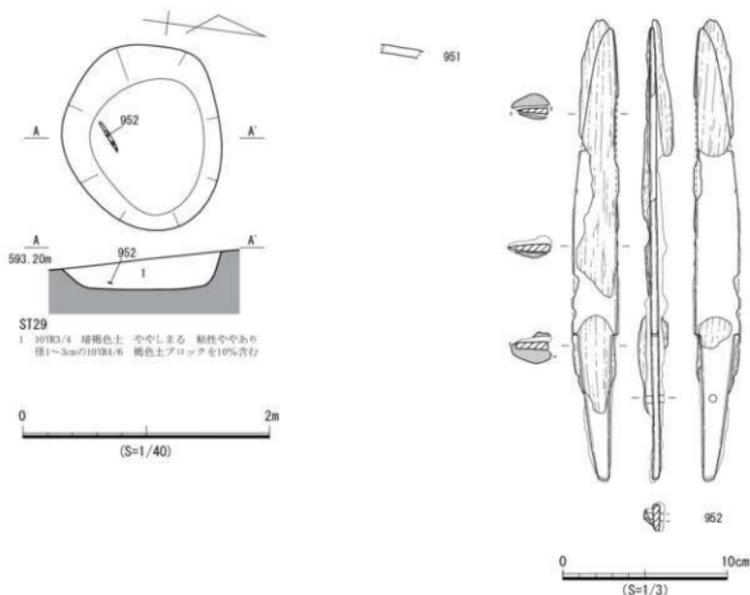


図 322 ST29 遺構図・出土遺物

## 第5節 古代の遺構・遺物

### 1 古代の遺構

#### (1) 土坑

##### SK333 (図 323・図 325)

**検出状況** AH18～AJ20 グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形は北西から南西方向に長く、南東部で屈曲する不定な形状である。

**埋土** 黒褐色土・暗褐色土・褐色土が堆積する。A断面の2層～5層・8層、9層、B断面の3層・4層・7層～10層・13層に褐色土ブロックを含む。

**遺物出土状況** 縄文土器・石器・灰軸陶器が埋土中に散在した状況で出土した。灰軸陶器は上層(a・b層)で出土した。

**出土遺物** 953は灰軸陶器の輪花碗である。体部に丸みがあり、口縁部が外反する。

**時期** 953は百代寺窯式期併行と考えられることから、11世紀以降の遺構と判断した。

##### SK334 (図 324・図 325)

**検出状況** AI20～BJ1グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SK326・SK336と重複関係があり、これらより古い。平面形はSK326・SK336に切られるため形状は不明である。

**埋土** 黒褐色土・暗褐色土が3層堆積する。2層・3層に褐色ブロック土を含む。

**遺物出土状況** c・3層から灰軸陶器(954～960)が出土した。この他に縄文土器・石器が埋土中に散在した状況で出土した。

**出土遺物** 954～960は灰軸陶器の碗である。954は口縁部の外反がほとんど認められない。体部と底部の間に低い高台を貼り付ける。955は口縁部の外反がほとんど認められない。956は低い高台で外側が角張る。957は口縁部がやや外反する。高台は外側が角張る。958は口縁部の外反がほとんど認められない。低い高台で内湾する。底部外面に判読不明の墨書又は記号が認められる。959は体部に丸みがあり、口縁部の外反がほとんど認められない。低い高台で、底部外面に判読不明の墨書が認められる。960は口縁部の外反がほとんど認められない。高台は外側が角張る。口縁部の内面では口縁部の一部に、外面では口縁部及び体部に各々煤が付着する。

**時期** 出土した灰軸陶器は折戸53号窯式期から東山72号窯式期併行と考えられることから、10世紀以降の遺構と判断した。

##### SK335 (図 324・図 325)

**検出状況** AI20グリッド、Ⅲ層上面で検出した。平面形は各辺が丸みをもつ楕円に近い形状である。

**埋土** 暗褐色土が2層堆積する。1層は褐色土ブロックを含む。

**遺物出土状況** 掘方の北部で底面に接した状態で灰軸陶器(961)が出土した。この他に縄文土器が埋土中に散在した状況で出土した。

**出土遺物** 961は灰軸陶器の短頸壺である。体部に丸みを持つ。

**時期** 961は出土状況から掘削時期に近い遺物と考えられる。961は百代寺窯式期併行と考えられることから、11世紀の遺構と判断した。

##### SK336 (図 324・図 325)

**検出状況** AI20～BJ1グリッド、Ⅲ層上面で検出した。SK326・SK336と重複関係があり、これらより新しい。平面形は東辺が発掘区外になるため不明であるが、北辺と南辺は直線的、西辺は丸みをもつ楕円に近い形状である。

**埋土** 黒褐色土・褐色土が7層堆積する。2層・7層は黒褐色土ブロック、4層・6層は褐色土ブロックを含む。

**遺物出土状況** 縄文土器・石器・灰釉陶器が埋土中に散在した状態で出土した。

**出土遺物** 962～966は灰釉陶器の碗である。962は輪花碗で体部に丸みがあり、口縁部の外反がほとんど認められない。体部と底部の間に低い高台を貼り付ける。963は体部に丸みがあり、口縁部の外反がほとんど認められない。高台は低く、内湾する。底部外面に煤が付着する。964は体部に丸みがあり、口縁部の外反がほとんど認められない。965は灰釉陶器の壺の底部である。966は灰釉陶器の広口壺である。体部に丸みを持つ。外面に平行タタキが認められる。

**時期** 出土した灰釉陶器は折戸53号窯式期から東山72号窯式期併行と考えられることから、10世紀以降の遺構と判断した。

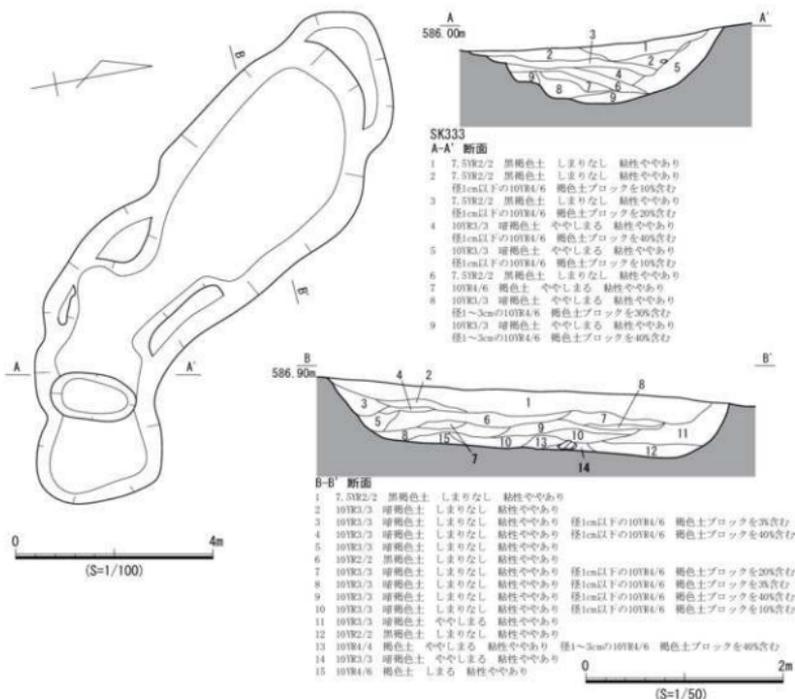


図 323 SK333 遺構図

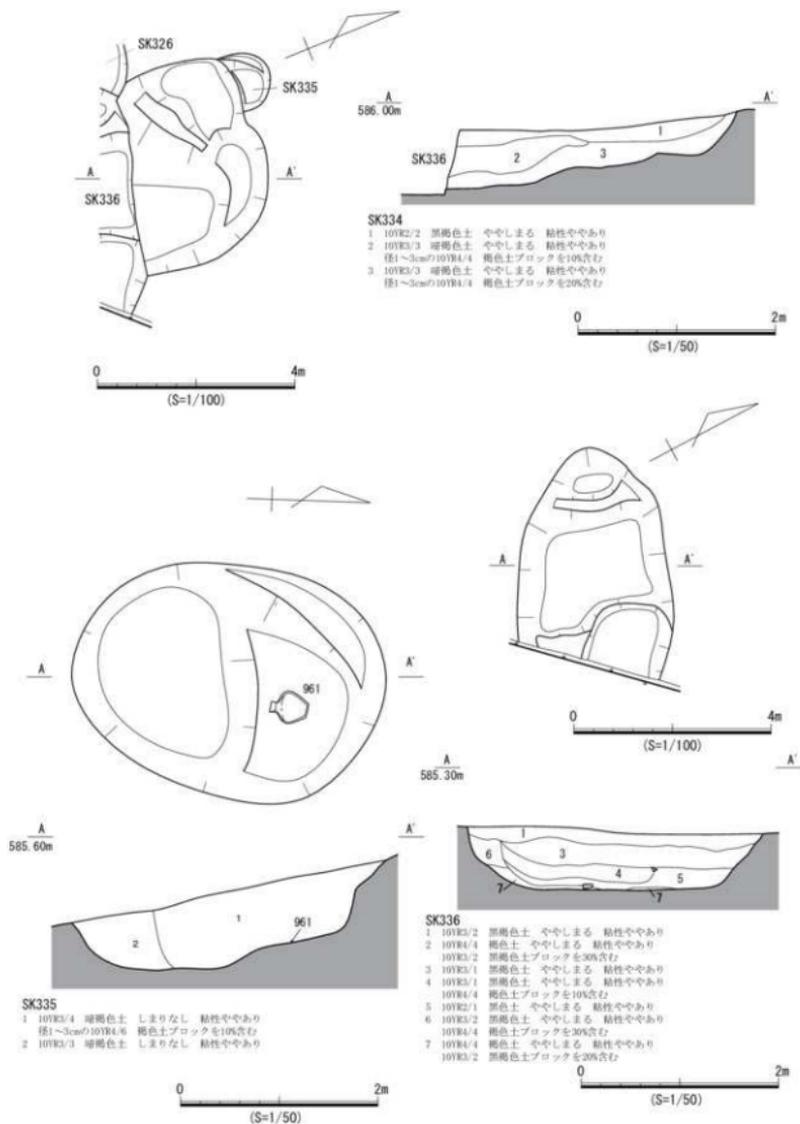


図 324 SK334~SK336 遺構図

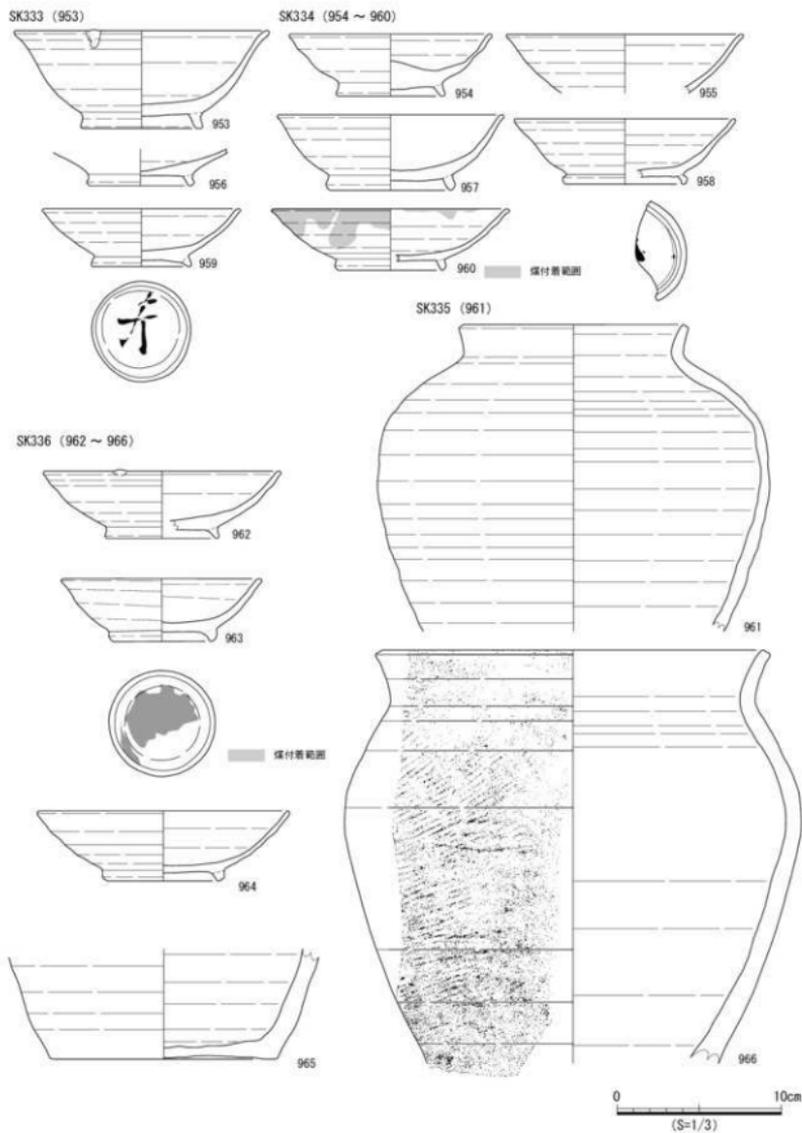


図 325 SK333～SK336 出土遺物

## 第6節 遺構外出土遺物

### 1 縄文土器 (図 326～図 340)

967～1012 は Z 1 群 (前期前葉～中葉) の土器である。967～970 は Z 1 群 1 a 類である。967 は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による 2 連規則の逆 D 字形刺突文を 2 列施す。口唇部に小突起が 1 つ付く。968 は外面に口縁と平行する 967 と同じ刺突文を 3 列施す。口唇部に小突起が 2 つ付く。967・968 の接合関係はないが、出土位置が近く胎土・器厚・文様が類似することから同一個体の可能性がある。969 は外面に半截竹管状施文具による 2 連規則の逆 D 字形刺突文を 1 列施す。口唇部に小突起が 2 つ付く。なお、967～969 は内面に条痕調整が認められないことや逆 D 字の爪形文であるため、Z 2 群に属する可能性がある。970 は外面に 967・968 と同様の D 字形刺突文を 3 列施す。内面に条痕調整が認められる。971 は Z 1 群 1 c 類である。外面に半截竹管状施文具による幅広の D 字形刺突文を 2 列施すが、半截竹管状施文具の端部のみ器面に接するため列点状になる。口縁部の内面に半截竹管状施文具による D 字形刺突を施す。内外面と口唇部に条痕調整が認められる。2 類にも同様の幅広の爪形文をもつものがあるが、内外面に条痕調整が認められることから本類とした。972～976 は Z 1 群 2 a 類である。972 は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による刺突を 3 列施す。内面に口縁と平行する半截竹管状施文具による刺突を 2 列施す。内外面と口唇部に条痕調整が認められる。爪形文はやや先端が毛羽立った半截竹管状施文具のため 2 b 類の可能性もあるが、内外面に条痕調整が認められることから本類とした。973 は外面にアナガラ属の貝殻腹縁文を横位に施す。口唇部に突起が 2 つ付く。内面に指頭圧痕が残る。974 は外面にアナガラ属の貝殻腹縁文を横位に施す。口唇部に突起が 1 つ付く。内面に指頭圧痕が残る。976 は外面にアナガラ属の貝殻腹縁文を横位に施す。977・978 は Z 1 群 2 b 類である。977 は外面に先端が毛羽立ったヘラ状施文具を用いた押し引き状の刺突文を 2 列施す。口唇部に刻みを入れる。内面に指頭圧痕が残る。978 は外面に先端が毛羽立ったヘラ状施文具を用いた押し引き状の刺突文を 2 列施す。口唇部に刻みを入れる。979～986 は Z 1 群 2 c 類である。979 は外面に半截竹管状施文具による刺突を縦位に 2 列施す。口唇部に刻みを入れる。内面に指頭圧痕が残る。980 は外面に半截竹管状施文具による斜めの刺突を横位に 2 列施す。981 は外面に半截竹管状施文具による刺突を 1 列施す。口唇部に刻みを入れる。982 は外面に半截竹管状施文具による縦の短沈線を横位に 1 列施す。983～986 は外面に半截竹管状施文具による刺突を 1 列施す。983～986 の刺突はハの字に近い形状のため、先端が二股に割れたヘラ状施文具の可能性もある。984 は内面に指頭圧痕が残る。987～990 は Z 1 群 3 a 類である。987・988 は縄文地の外面に口縁と平行する半截竹管状施文具によるコンパス文を 2 条施す。988 は器面に円形の穿孔が 1 箇所認められる。胎土中に繊維を含む。989 は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による連続爪形文による横線文を 1 条とコンパス文を 2 条施す。990 は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による連続爪形文による横線文を 2 条とコンパス文を 3 条施す。991・992 は Z 1 群 3 b 類である。991 は外面に半截竹管状施文具による平行沈線で木葉文を施す。胎土中に繊維を含む。992 は縄文地の外面に半截竹管状施文具による平行沈線で木葉文を施す。胎土中にわずかに繊維を含む。993～996 は Z 1 群 3 c 類である。993 は縄文地の外面に半截竹管状施文具による連続爪形文で横線文と格子目文を施す。胎土中に繊維を含む。994 は縄文地の外面に半截竹管状施文具による連続爪形文で 2 列単位の横線文を口縁部と頭部の間に間隔を空けて 3 条施す。横線

文間に支柱付の入組三角文を施す。内面はナデ調整する。胎土中に繊維を多く含む。995は縄文地の外面に半截竹管状施文具による連続爪形文で2列単位の横線文を2条施す。横線文間に支柱付の入組三角文を施す。胎土中に繊維を多く含む。994・995の接合関係はないが、出土位置が近く胎土・器厚・文様が類似することから同一個体の可能性がある。996は縄文地の外面に半截竹管状施文具による連続爪形文で横線文を3条施す。胎土中に繊維を多く含む。997～1000はZ1群4a類で口縁部が肥厚する。997は外面に半截竹管状施文具による爪形文と沈線文を施す。口唇部に櫛歯状施文具による刺突文を施す。998は外面に櫛歯状施文具による刺突文と集合沈線文を施す。999は肥厚した外面に櫛歯状施文具による刺突文を施す。肥厚部分より下位に縄文を施す。1000は肥厚した外面に櫛歯状施文具による刺突文を施す。1001～1003はZ1群4b類である。1001・1002は外面に櫛歯状施文具による刺突文と集合沈線文を施す。1002の口唇部に櫛歯状施文具による刺突文を施す。1003は波状口縁の外面に櫛歯状施文具による刺突文を施す。1004～1010はZ1群4c類である。1004は外面に半截竹管状施文具による爪形文と櫛歯状施文具による刺突文と集合沈線文を施す。1005・1006・1008は外面に櫛歯状施文具による刺突文と集合沈線文を施す。1007は外面に櫛歯状施文具による刺突文を施す。1003と1007の接合関係はないが、出土位置が近く胎土・器厚・文様が類似することから同一個体の可能性がある。1009は外面に先端の細い棒状施文具による刺突文と櫛歯状施文具による集合沈線文を施す。1010は外面に櫛歯状施文具による刺突文と集合沈線文で菱形文を施す。1011・1012はZ1群5類で外面に半截竹管状施文具による爪形の刺突列を2列施す。口唇部に刻みを入れる。1012は刺突列より下に縄文を施す。

1013～1189はZ2群(前期後葉～末葉)の土器である。1013～1022はZ2群1a類である。1013は波状口縁の外面に半截竹管状施文具による幅広の連続爪形文を1条施す。波状口縁の頂部下に円形の穿孔が1箇所ある。口唇部に半截竹管状施文具による刻みを入れる。1014・1015は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による幅広の連続爪形文を多条に施す。連続爪形文より下位に羽状縄文を施す。1014と1015の接合関係はないが、出土位置が近く胎土・器厚・文様が類似することから同一個体の可能性がある。1016は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による幅広の連続爪形文を多条に施す。口唇部に半截竹管状施文具による刻みを入れる。1017は波状の口縁部の外面に半截竹管状施文具による幅広の連続爪形文を1条施すが、半截竹管状施文具の端部のみ器面に接するため、列点状になる。頂部の爪形文より下に短線状の突帯を貼付する。口唇部に半截竹管状施文具による刻みを入れる。1018～1020は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による幅広の連続爪形文を施すが、半截竹管状施文具の端部のみ器面に接するため、列点状になる。いずれも口唇部に半截竹管状施文具による刻みを入れる。1020は口縁部下に円形の穿孔が1箇所ある。また、内面に条痕調整が認められる。1021は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による幅広の連続爪形文を多条に施す。口唇部に半截竹管状施文具による刻みを入れる。また、内面に口縁と平行する半截竹管状施文具による幅広の連続爪形文1条と条痕調整が認められる。D字の爪形文で条痕調整が認められるものの、幅広の連続爪形文であることから本類に含めた。1022は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による幅広の連続爪形文を施す。内面に指頭疔痕が残る。Z1群の可能性もあるが、条痕調整が認められないことから本類に含めた。1023～1032はZ2群2a類である。1023は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による連続爪形文を施す。内面に指頭疔痕が残る。1024は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による連続爪形文を施す。外面に赤彩が認められる。1025は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による連続爪形

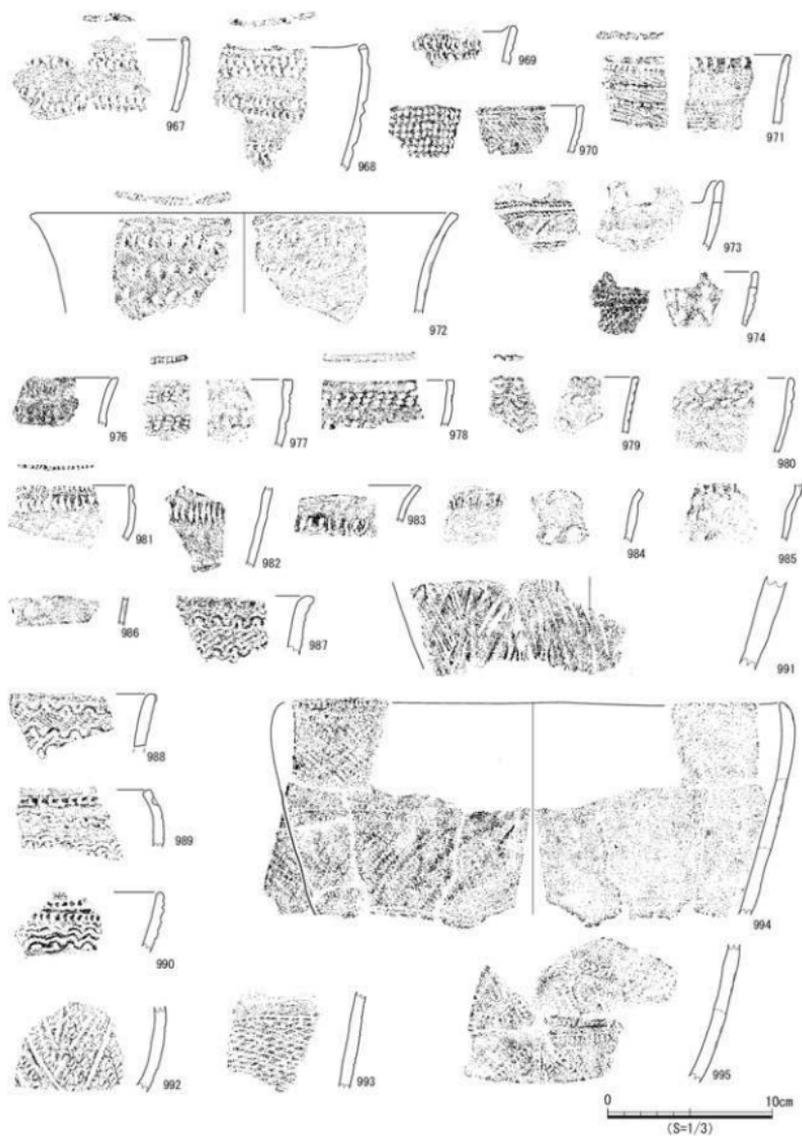


图 326 遺構外出土遺物 (1)

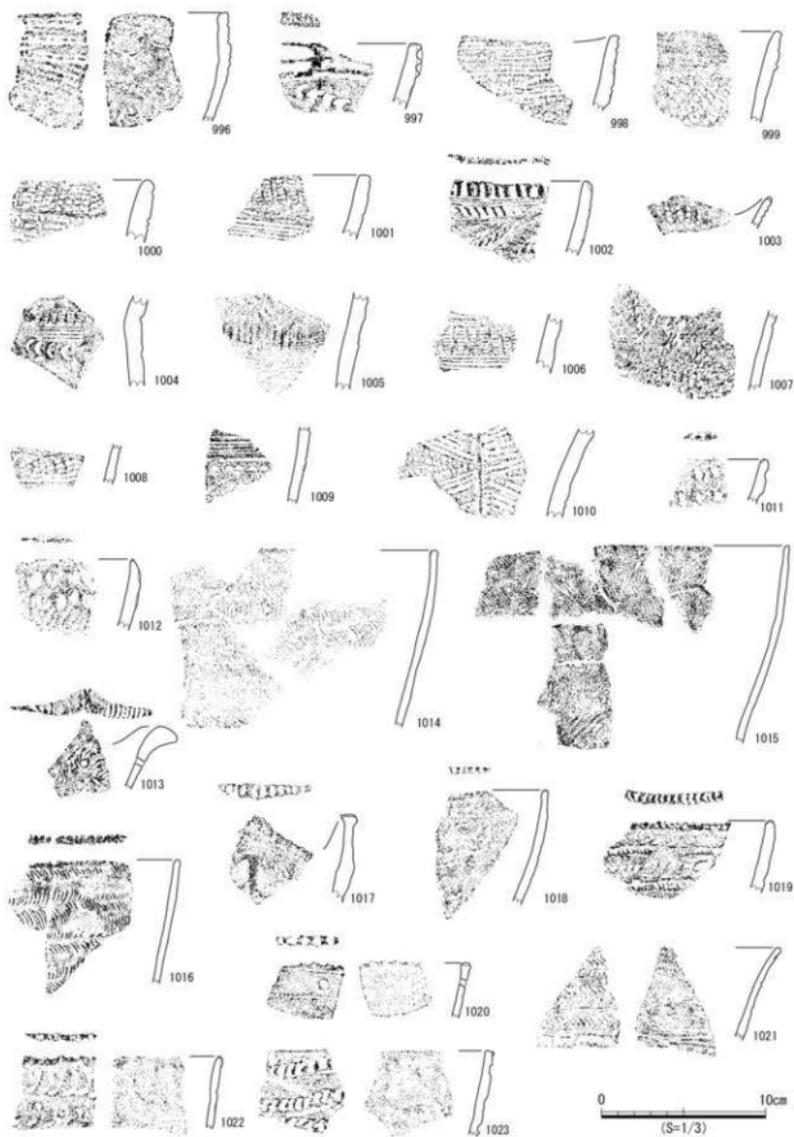


図 327 遺構外出土遺物 (2)

文を3条施す。1026~1028は外面に半截竹管状施文具による連続爪形文を横位に2条施す。連続爪形文より下位に縄文を施す。1029は外面に半截竹管状施文具による連続爪形文を横位に1条施す。連続爪形文より下位に縄文を施す。1030は外面に半截竹管状施文具による連続爪形文を横位に2条施す。1031は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による連続爪形文を2条施すが、半截竹管状施文具の端部のみ器面に接するため、列点状になる。口唇部に半截竹管状施文具による刻みを入れる。1032は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による刺突文を1列施すが、半截竹管状施文具の端部のみ器面に接するため、短線状になる。口唇部に半截竹管状施文具による刻みを入れる。1033~1039はZ2群2b類で外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による連続爪形文を1条施し、その下に弧状や直線による文様を施す。1033・1034・1036は口唇部に半截竹管状施文具による刻みを入れる。また、1036は連続爪形文より下位に縄文を施す。1040・1041はZ2群2c類である。1040は外面に半截竹管状施文具による平行沈線文で直線文や多条沈線を施す。外面に赤彩が認められる。1041は外面に半截竹管状施文具による平行沈線文で入組木葉文を施す。底部外面の接地部分が外側に大きく張り出す。細片であるが精緻な作りのため、浅鉢の可能性がある。1042~1049はZ2群3a1類で、外面に突帯を貼付し突帯上に縦の短い刻みを入れる。1042は縄文地の外面に口縁と平行する突帯を口縁部1条と頸部2条貼付し、その間に口唇部に接する縦位の突帯とこれと線対称となる弧状の突帯を貼付する。1043~1049は外面に口縁と平行する多条の突帯を貼付する。1044は突帯の間に弧状の突帯を貼付する。1043~1047は口唇部に小突起が付く。1050~1061はZ2群3a2類で外面に突帯を貼付し、突帯上に斜めの刻みを入れる。1050は外面に口縁と平行する突帯を2条貼付し、口唇部との間に口唇部と接する縦位の突帯を貼付する。突帯より下位に羽状縄文を施す。1051は外面に口縁と平行する突帯を2条貼付する。突帯より下位に縄文を施す。1052は羽状縄文地の外面に口縁と平行する突帯を3条貼付し、上の2条の間に口唇部に接する縦位の突帯と弧状の突帯を貼付する。1053は外面に口縁と平行する突帯を4条貼付し、上の2条の間に口唇部に接する縦位の突帯と下の2条の間に弧状の突帯を貼付する。突帯より下位に縄文を施す。1054は外面に口縁と平行する突帯を3条貼付する。1055は縄文地の外面に口縁と平行する梯子状突帯と2条の突帯を貼付する。口唇部に弧状の細い突帯と貼付する。1056は外面に口縁と平行する突帯を3条貼付し、上の2条の間に口唇部に接する縦位の突帯とπ字状の突帯を貼付する。内外面に赤彩が認められる。1057は羽状縄文地の外面に口縁と平行する1条の突帯と梯子状突帯を貼付し、その間にπ字状の突帯を貼付する。梯子状突帯より下に斜位や横位の突帯を貼付する。1058は外面に口縁と平行する突帯を3条貼付し、上の2条の間に口唇部に接する突帯を貼付する。1059は外面に口縁と平行する突帯を3条貼付し、上の2条の間に口唇部に接する縦位の突帯を貼付する。外面に赤彩が認められる。1060は外面に梯子状突帯と横位の突帯を1条貼付し、その間に縦位の突帯を貼付する。横位の突帯より下位に斜めや弧状の突帯を貼付する。外面に赤彩が認められる。1061は外面に横位の突帯を2条貼付し、突帯上に矢羽状に刻む。突帯より下位に羽状縄文を施す。1062~1067はZ2群3a3類で突帯上に半截竹管状施文具による刺突を施す。1062~1064は外面に横位の突帯を貼付する。1062の口唇部に小突起が付く。1063は突帯より下位に縄文を施す。1064は外面に赤彩が認められる。1065は外面に口縁と平行する突帯を2条貼付し、口唇部との間に斜めの突帯を貼付する。突帯より下位に縄文を施す。1066は縄文地の外面に口縁と平行する突帯を3条貼付し、口唇部との間に縦や斜めの突帯を貼付する。1067は外面に横位の低い突帯を2条貼付する。突帯より下位に縄

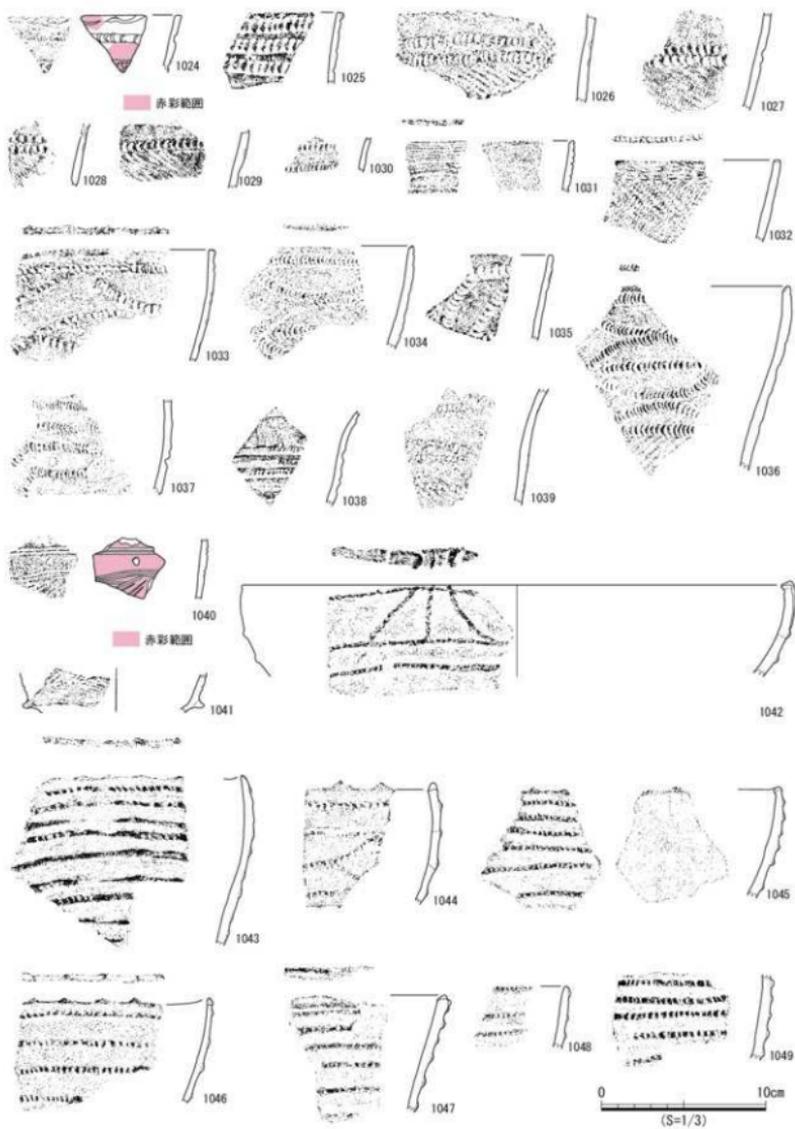


図 328 遺構外出土遺物 (3)

文を施す。外面に赤彩が認められる。1068～1075はZ2群3c類で外面の突帯上に縄文を施す。1068は外面に口縁と平行する多条の低い突帯を貼付する。1069は波状の口縁の外面に口縁と平行する低い突帯を2条貼付する。突帯より下位に縄文を施す。1071は波状の口縁の外面に口縁と平行する低い突帯を3条貼付する。突帯と口唇部との間に縦位の突帯を貼付する。口唇部に楕円状の突帯を貼付する。突帯より下位に縄文を施す。1072は外面に口縁と平行する突帯を3条貼付する。口唇部に半截竹管状施文具による楕円状の刺突を入れる。突帯より下位に縄文を施す。1073は外面に横位の低い突帯を1条貼付する。突帯より下位に縄文を施す。内面に指頭圧痕が残る。1074・1075は縄文地の外面に口縁と平行する突帯を3条貼付する。1076～1086はZ2群3d類で外面に素文の突帯を貼付する。1076は外面に口縁と平行する細い突帯を1条とπ字状の突帯を貼付する。1077は外面に口縁と平行する断面が三角形の突帯を3条貼付する。1078は波状口縁の外面に低い突帯を2条貼付する。突帯と突帯の間に渦巻や弧状の突帯を貼付する。1079は外面に口縁と平行する突帯を2条貼付し、縦や斜めの突帯を貼付する。1080は外面に口縁と平行する突帯を2条貼付する。口唇部に棒状施文具による刺突を施す。1081は外面に口縁と平行する細い突帯を2条貼付する。1082は外面に口縁と平行する突帯を3条貼付する。突帯より下位に縄文を施す。1083は外面に口縁と平行する低い突帯を2条貼付する。口唇部は半截竹管状施文具でナデ引く。突帯より下位に縄文を施す。1084は外面に横位の突帯を1条貼付する。突帯より下位に縄文を施す。1085・1086は羽状縄文地の外面に横位の低い突帯を1条貼付する。1087～1091は蛭ヶ森式に類似する土器で、細別できないためZ2群3類とした。1087は外面に口縁と平行する押圧のある浮線文を2条施す。1088は外面に口縁と平行する細い突帯文を3条施す。1089は波状口縁の外面に口縁と平行する押圧のある浮線文を5条施す。地文として縄文を施す。1090は縄文地の外面に口縁と平行する押圧のある浮線文を3条施す。内面に指頭圧痕が残る。1091は外面に押圧のある浮線文を横位に4条施す。1092はZ2群4b類で外面に口縁と平行する細い突帯を2条、斜位の細い突帯を1条貼付し突帯上を突帯幅より狭い半截竹管状施文具でナデ引く。内面に指頭圧痕が残る。1093・1094はZ2群5a類である。1093は外面に半截竹管状施文具による平行沈線で波状文を施す。1094は外面に半截竹管状施文具による平行沈線で横線文と横線文上に円形刺突を施す。横線文より下に縄文を施す。1095～1098はZ2群5c類である。1095は外面に半截竹管状施文具による平行沈線上弧肋骨文と円形刺突を施す。1096は外面に半截竹管状施文具による平行沈線上弧肋骨文を施す。1097は外面に半截竹管状施文具による平行沈線で木葉文を施す。1098は外面に半截竹管状施文具による平行沈線で木葉文を施す。1099～1101はZ2群5d類である。1099は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による刺突列を2列施す。刺突列より下位に縄文を施す。1100は外面に口縁と平行する半截竹管状施文具による平行沈線を1条施す。平行沈線より下位に縄文を施す。縄の結び目がS字状の綾線文となる。口唇部に小突起が付く。1101は外面に半截竹管状施文具による平行沈線で横線文を1条施す。平行沈線より下位に縄文を施す。縄の結び目がS字状の綾線文となる。1102はZ2群5e類で外面に半截竹管状施文具による連続爪形文で横線文と木葉文を施す。1103～1110はZ2群6a類である。1103は外面に半截竹管状施文具による幅広の連続爪形文で木葉文を施す。1104は波状口縁の外面に半截竹管状施文具による幅広の連続爪形文で横線文を施す。波頂部の下に縦位の連続爪形文を施す。隆起線上に斜めの刻みを入れる。1105は外面に半截竹管状施文具による幅広の連続爪形文で横線文と縦位区画を施す。横位の隆起線上に斜めの刻みを入れる。1106は外面に半截竹管状施文具による

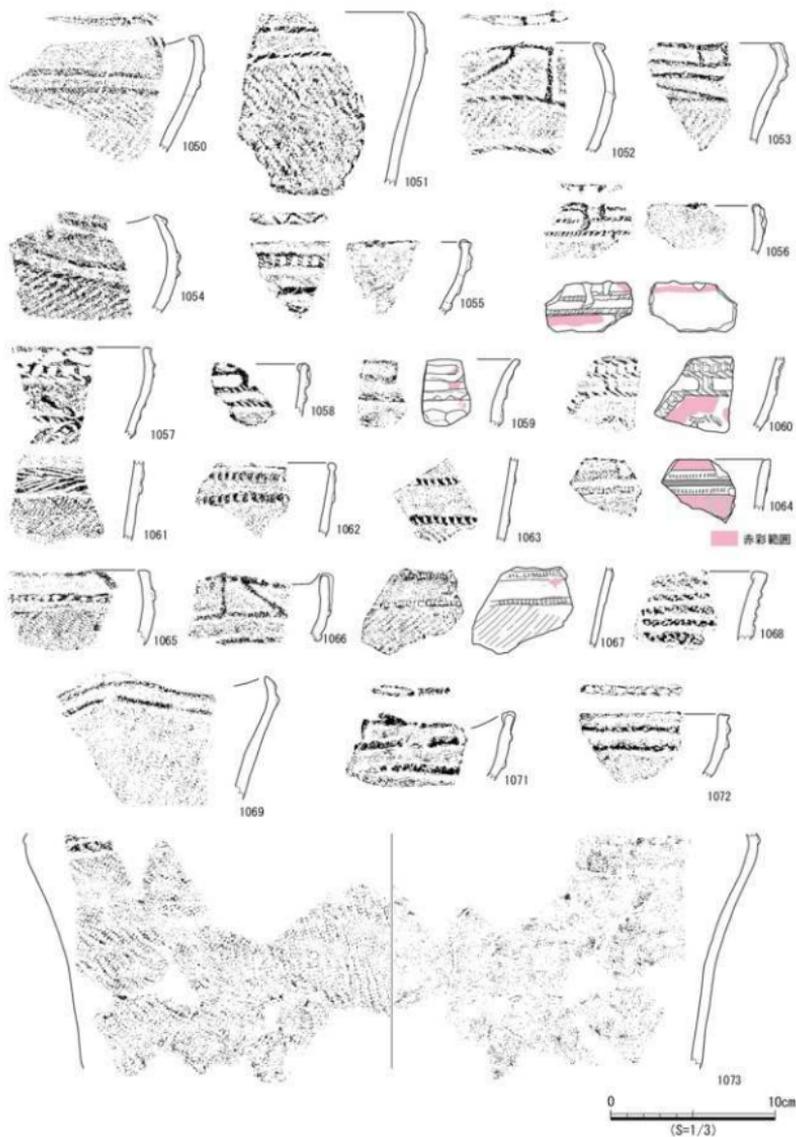


図 329 遺構外出土遺物 (4)

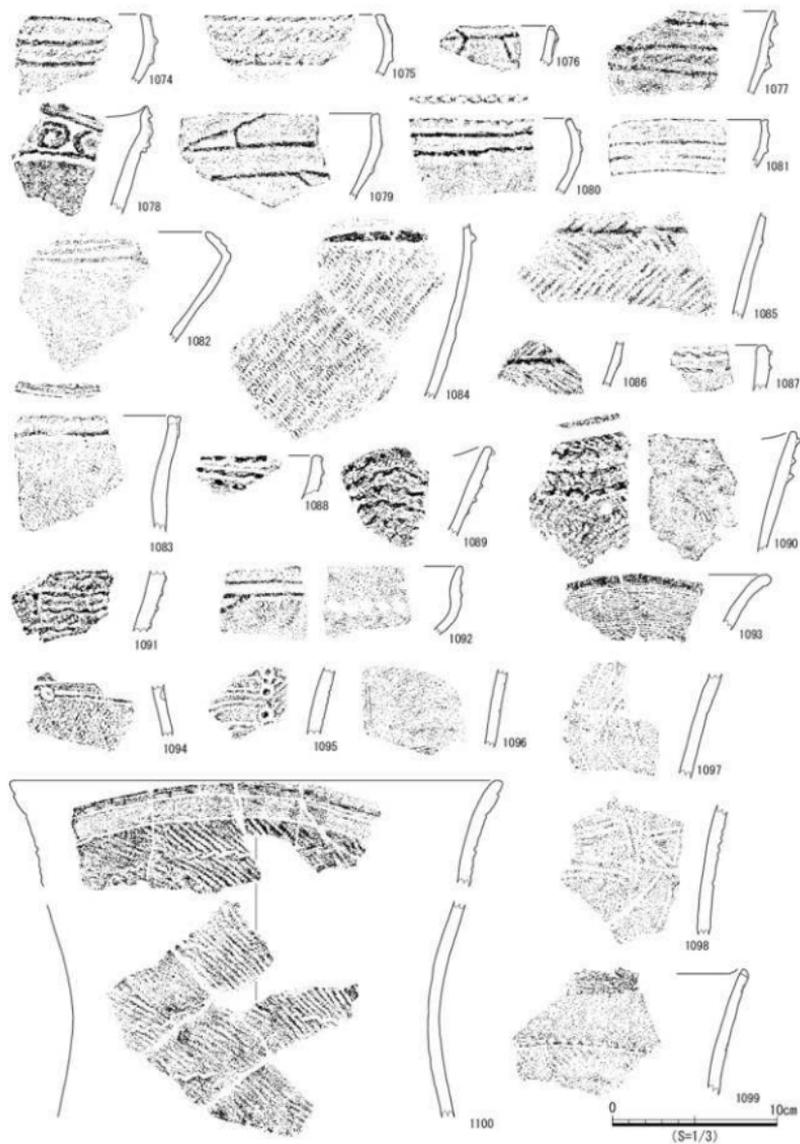


图 330 遺構外出土遺物 (5)

幅広の連続爪形文で横線文を施す。隆起線上に斜めの刻みを入れる。1107 は外面に半載竹管状施文具による幅広の連続爪形文で横線文や渦巻文を施す。隆起線上に斜めの刻みを入れる。1109 は外面に幅広の半載竹管状施文具による幅広の連続爪形文で横線文を施す。爪形文上にD字状の刺突を入れる。爪形文より下位に縄文を施す。1110 は外面に半載竹管状施文具による連続爪形文で横線文を施す。1111～1115 はZ 2群6c類である。1111 は外面に半載竹管状施文具による平行沈線で鋸歯状文を施す。口唇部に小突起が付く。1112 は波状口縁の外面に半載竹管状施文具による平行沈線で横位弧線文を施す。地文として縄文を施す。1113 は外面に半載竹管状施文具による平行沈線で直線や曲線を描く。1114・1115 は外面に半載竹管状施文具による平行沈線で格子目文を施す。交差する部分に円形刺突を入れる。1114 は口唇部に半載竹管状施文具による刻みを入れる。1116・1117 はZ 2群7a類である。1116 は外面に半載竹管状施文具により縦位集合沈線文を施す。内面に鏝状の隆帯が巡る。1117 は外面に半載竹管状施文具による結節浮文を横位に巡らせ、これより下位に半載竹管状施文具による縦位の集合沈線文を施す。1118・1119 はZ 2群7b類である。1118 は外面に半載竹管状施文具による横位の矢羽状の集合沈線文を施し、その上に単線状の浮文を縦に貼付する。1119 は羽状縄文地の外面に単線状の浮文を縦に貼付する。口唇部に先端の細い施文具による刻みを入れる。内面に指頭圧痕が残る。1120～1122 はZ 2群7c類である。1120 は波状口縁の外面に集合沈線を施し、その上に渦巻状の結節浮線文を貼付する。1121 は外面に集合沈線を施し、その上に結節浮線文と円形浮文を貼付する。1122 は外面に集合沈線を施し、その上に細い縦位結節浮線文を貼付する。1123～1127 はZ 2群8類である。1123～1125・1127 は外面に渦巻状の結節浮線文を貼付する。1125 は内面が肥厚した口唇部に浮文を貼付する。1126 は外面に直線状の結節浮線文を貼付する。内面が肥厚した口唇部に浮文を貼付する。1128～1130 はZ 2群9a類である。1128 は外面に半載竹管状施文具による半隆起線文で斜格子文や横位区画や縦位集合文を施す。1129 は外面に半載竹管状施文具による半隆起線文で横位区画と斜行する半隆起線文を施す。口唇部にゾーメン状の極細の粘土紐を縦に貼付する。1130 は外面に半載竹管状施文具による半隆起線文で横位区画し、矢羽状や三角形や半円形状の文様を施す。1131 はZ 2群12a類である。1131 は器厚が5mm程度の薄手の土器で外面に羽状縄文を施す。内面は横方向のナデ調整と指頭圧痕が認められる。1132 はZ 2群12b類である。器厚が8mm程度の厚手の土器で外面に縄文を施す。胎土に繊維を含む。1133～1137 はZ 2群12c類である。1133・1136・1137 は器厚が8mm程度の厚手の土器で外面に羽状縄文を施す。1134 は器厚が8mm程度の厚手の土器で口縁が波状になる。外面に縄文を施す。1135 は器厚が8mm程度の厚手の土器で外面に縦長の節の目立つ縄文を施す。口唇部は半載竹管状施文具による刺突を施す。内面は横方向のナデ調整が認められる。1138 はZ 2群13a類である。1138 は器厚が4mm程度の薄手の土器で外面に条痕調整を施す。内面は口縁の屈曲部分を中心に指頭圧痕が残る。1139 はZ 2群13b類である。器厚が7mm程度の厚手の土器で外面に条痕調整を施す。胎土中に繊維を多く含む。補修孔が1箇所認められる。1140 はZ 2群13c類である。器厚が7mm程度の厚手の土器で外面にナデ調整を施す。口唇部に半載竹管状施文具による刻みを施す。1141～1144 はZ 2群13d類である。1141 は器厚が3mm程度の薄手の土器で外面にナデ調整を施す。口唇部に棒状施文具による刻みを施す。1142 は器厚が4mm程度の薄手の土器で外面にナデ調整、内面に条痕調整を施す。口唇部に半載竹管状施文具による刻みを施す。1143・1144 は器厚が4mm程度の薄手の土器で内外面に貝殻による条痕調整を施す。いずれも内面に指頭圧痕が残る。1145～1152 はZ 2群14類である。1145 は底部の



图 331 遺構外出土遺物 (6)

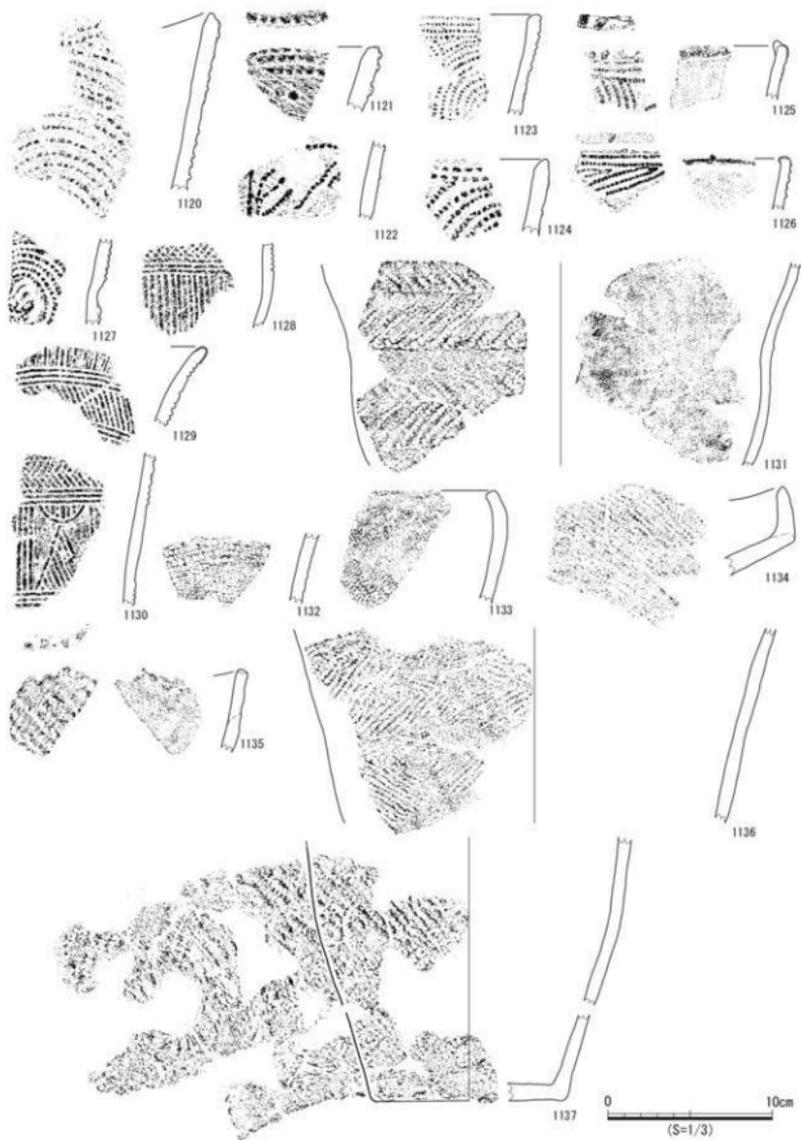


図 332 遺構外出土遺物 (7)

接地区が外に大きく張り出す。外面に赤彩が認められる。1146 は平底の底部の接地区が外に張り出す。1147～1151 は平底の底部の接地区が外に大きく張り出す。1147～1150 は張り出し部分に刻みを入れる。1149・1151 は外面に赤彩が認められる。1152 は平底で底部外面に縄文が認められる。1153～1186 はZ 2 群 15 類である。1153 は複段内湾浅鉢で外面に半截竹管状施文具による平行沈線で入組木葉文を施す。外面に赤彩が認められる。1154 は複段内湾浅鉢で外面に口縁と平行する梯子状突帯と半截竹管状施文具による平行沈線で入組木葉文を施す。1155 は複段内湾浅鉢で外面に口縁と平行する斜めに刻む突帯2条と半截竹管状施文具による平行沈線で入組木葉文を施す。1156 は複段内湾浅鉢で外面に口縁と平行する斜めに刻む突帯1条と半截竹管状施文具による平行沈線で横線を施す。外面に赤彩が認められる。1157 は内湾浅鉢で外面に半截竹管状施文具による平行沈線で横線を施し、その上に斜めと縦の刻みを入れる。穿孔が等間隔に3箇所認められる。外面と口唇部に赤彩が認められる。1158 は有稜浅鉢で外面に半截竹管状施文具による平行沈線で入組木葉文を施す。1159 は内湾浅鉢で外面に矢羽状に刻む低い突帯1条による横線と半截竹管状施文具による平行沈線で渦巻文を施す。外面に赤彩が認められる。1160 は内湾浅鉢で外面に矢羽状に刻む低い突帯1条による横線と半截竹管状施文具による平行沈線で木葉文を施す。外面に赤彩が認められる。1161 は内湾浅鉢で外面に低い突帯1条による横線と半截竹管状施文具による連続爪形文で入組木葉文を施す。外面に赤彩が認められる。内面に指頭圧痕が残る。1162 は内湾浅鉢で外面に半截竹管状施文具による平行沈線で入組木葉文を施す。外面に赤彩が認められる。内面に指頭圧痕が残る。1163 は複段内湾浅鉢で外面に斜めに刻みのある突帯による横線と半截竹管状施文具による連続爪形文で弧線文を施す。1164 は複段内湾浅鉢で外面に低い突帯1条による横線と半截竹管状施文具による連続爪形文で入組木葉文を施す。1165 は複段内湾浅鉢で外面に半截竹管状施文具による連続爪形文を施す。1166 は浅鉢の底部で底部外面の接地区が外に大きく張り出す。外面に半截竹管状施文具による横位の平行沈線を施す。内外面に赤彩が認められる。1167 は有稜浅鉢で羽状縄文地の外面に斜めに刻みのある梯子状突帯を2条施す。稜部分は山形に刻みを入れる。1168 は有稜浅鉢で縄文地の外面に半截竹管状施文具による連続爪形文より横線文を施す。隆起線部分は山形に刻みを入れる。1169 は有稜浅鉢で羽状縄文地の外面に斜めの刻みのある梯子状突帯と山形文と半截竹管状施文具による連続爪形文で横線文を施す。1170 は複段内湾浅鉢で外面に横位の沈線と刻みのある浮線文を施す。沈線内に多孔円孔が巡る。また、半截竹管状施文具による平行沈線で入組文を施す。平行沈線内に縦の刻みを入れる。1171 は複段内湾浅鉢で外面に横位の沈線と半截竹管状施文具による平行沈線で楕円や直線の文様を施す。屈曲部分に先端の細い施文具による刺突列を施す。沈線内に多孔円孔が巡る。1173 は複段内湾浅鉢で外面に半截竹管状施文具による平行沈線で入組木葉文を施す。平行沈線内に縦の刻みを入れる。木葉文より下に先端の細い施文具による刺突列を施す。1174 は複段内湾浅鉢で外面に矢羽状刻みのある浮線文を3条施す。浮線文上や屈曲部分に先端の細い施文具による刺突列を施す。1175～1177 は複段内湾浅鉢である。外面の屈曲部に口縁と平行する沈線を施し、沈線内に円孔が巡る。1178 は複段内湾浅鉢で外面は無文である。1179 は複段内湾浅鉢で「く」の字に屈曲し、稜ができる。外面は無文で円孔がある。1180 は複段内湾浅鉢で外面は無文で屈曲部は鈎状になる。1181 は複段内湾浅鉢で外面は無文である。外面の上方に沈線が巡り、下方に僅かに段差がある。1182 は有稜浅鉢で内屈する口縁部の外面に沈線と曲線や直線の浮線文を貼付する。1183 は複段内湾浅鉢でく」の字に屈曲し、稜ができる。外面は無文である。内面に指頭圧

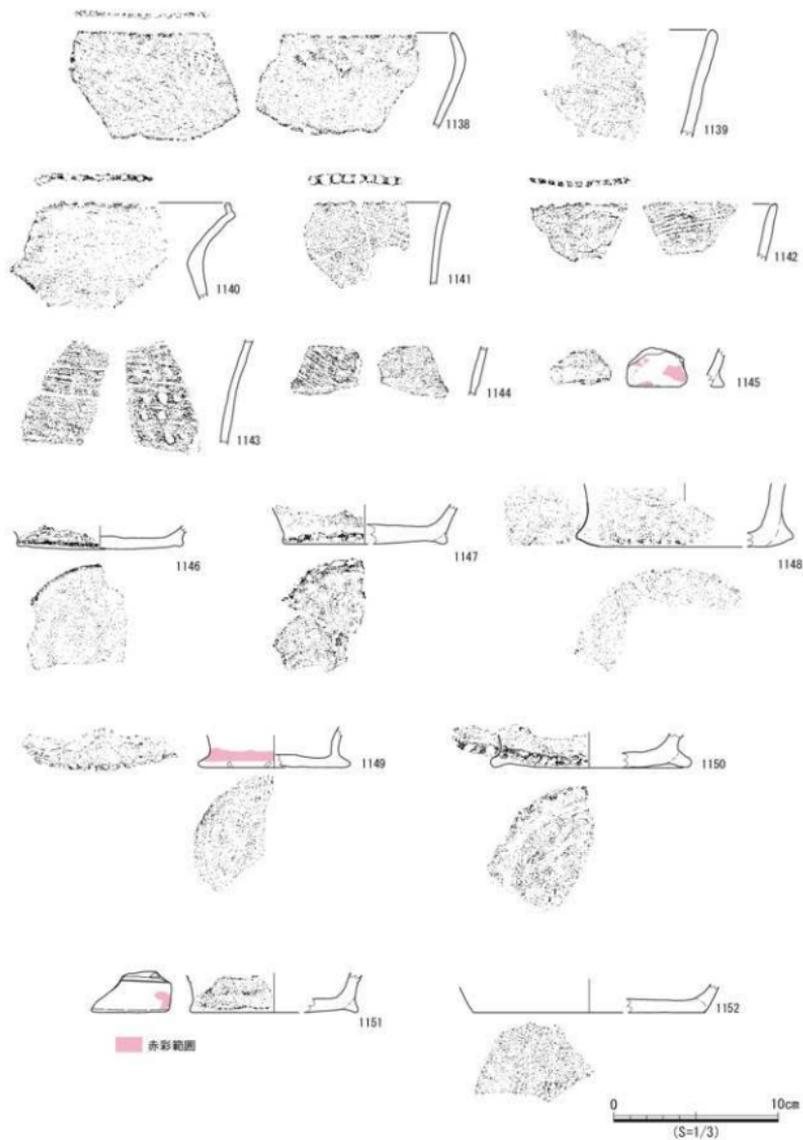


図 333 遺構外出土遺物 (B)

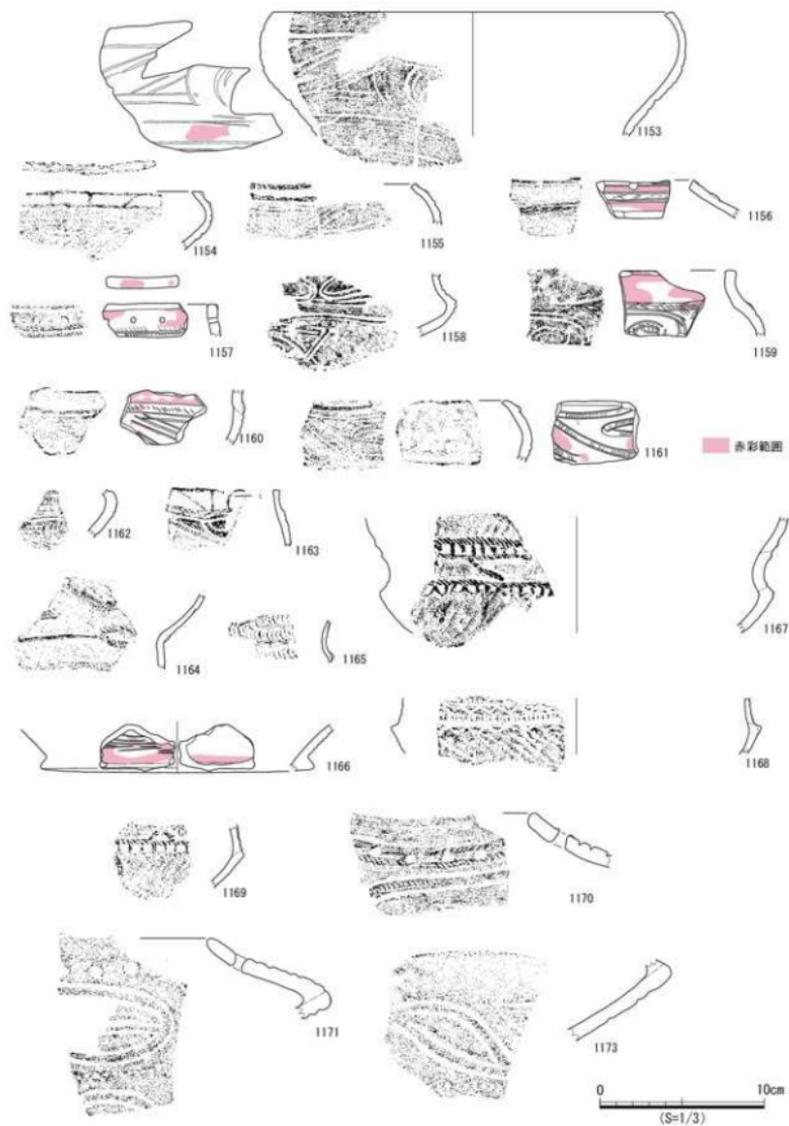


圖 334 遺構外出土遺物 (9)

痕が残る。1184は浅鉢の底部で平底である。胴部外面に縄文を施す。1185は浅鉢の底部で底部外面の接地部が外に張り出す。接地外面に半截竹管状施文具による刻みを入れる。1186は内湾浅鉢で外面は無文である。1187・1188はZ2群16類で鉢である。1187の外面は無文である。口唇部が玉縁状になり、外面に赤彩が認められる。1188は外面に半截竹管状施文具による平行沈線で弧状や木葉状の文様を施す。外面に赤彩が認められる。1189はZ2群17類である。1189はミニチュア土器である。外面は無文で底部は平底である。

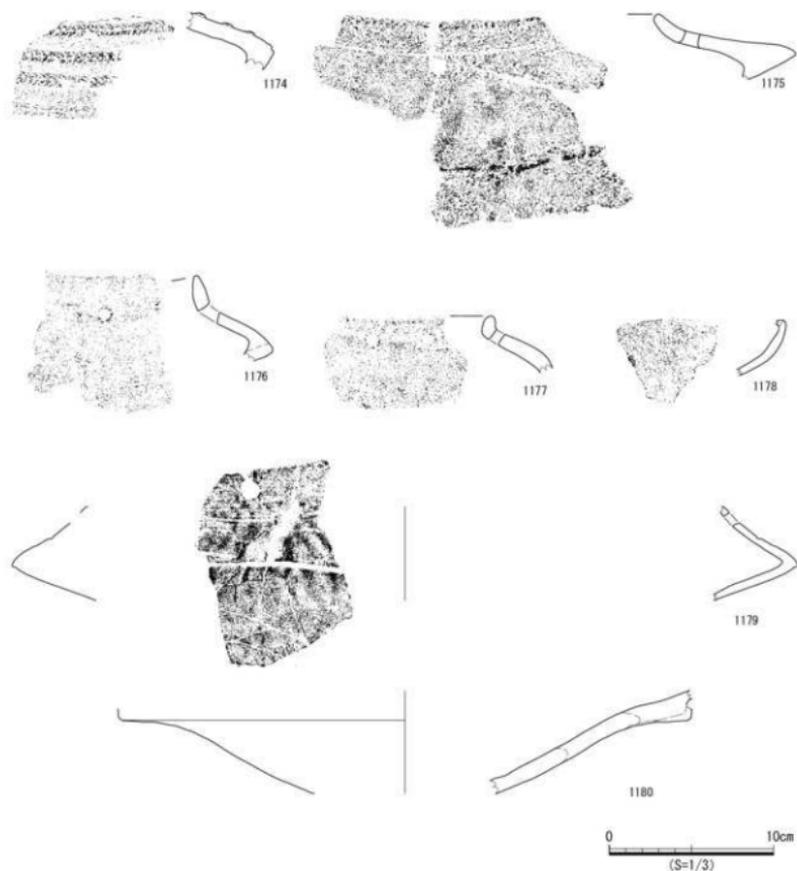


図 335 遺構外出土遺物 (10)

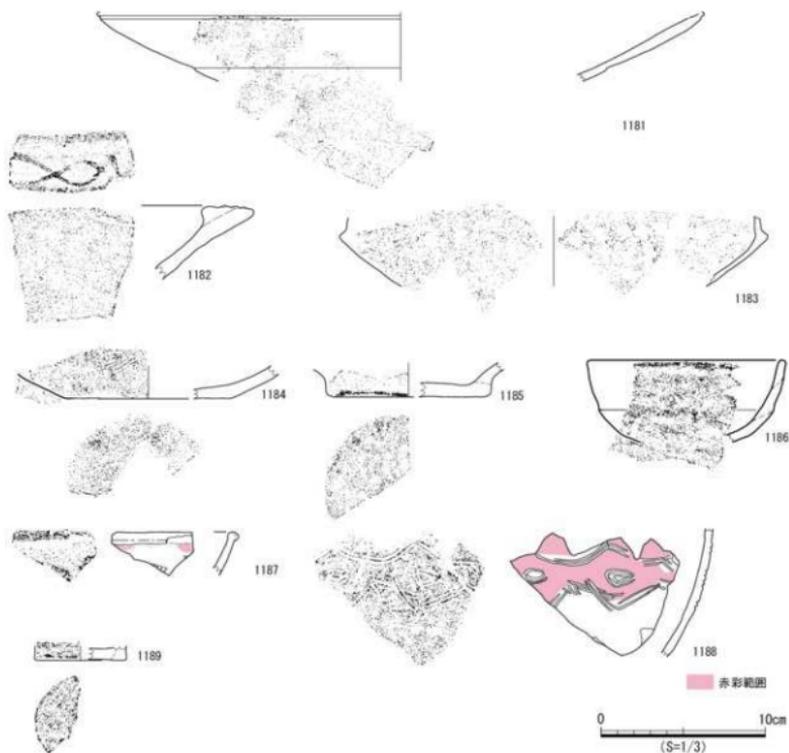


図 336 遺構外出土遺物 (11)

1190～1235はC群(中期)の土器である。1190はC群1a2類である。外面は口縁部に隆帯による円形文と懸垂文、胴部に隆帯によりパネル文で区画し、区画内に横方向の集合沈線で充填する。底部は平底である。1191～1197はC群1a3類である。1191は外面に隆帯により楕形に区画し、区画内は縦位の平行沈線を施す。1192は外面に細めの隆帯を多条に貼付する。1193は外面に隆帯による円形の貼付文と楕形の区画を施し、区画内は縦位沈線と隆帯脇に押引状刺突文を施す。1194は外面に隆帯による弧状の区画を施し、区画内は縦位沈線と隆帯脇に押引状刺突文を施す。一部剥落しているが、口縁の外面に波状の粘土紐を貼付する。1193・1194に接合関係はないが、出土位置が近く胎土・器厚・文様が類似することから同一個体の可能性がある。1195は外面に鋸歯状の隆帯で横位区画し、胴部に2本1組の隆帯を垂下させる。地文として縄文を施す。1196は外面に2本1組の隆帯を垂下させる。地文として縄文を施す。1195・1196に接合関係はないが、出土位置が近く胎土・器厚・文様が類似することから同一個体の可能性がある。1197は外面に横位に斜格子状の粘土紐を貼付し、押引状の刺突がある隆帯と瘤状突起による縦位区画を施す。区画内は縦位と横位の集合沈線を施す。1198～1204は

C群1c2類である。1198は橋状把手で外面に隆帯と沈線による渦巻き文と蛇行沈線を施す。1199は外面に撚紐状の突起と隆帯による横位の楕円形区画を施し、区画内に縦位の沈線を施す。1200は外面に隆帯と沈線による腕骨状の渦巻文と横位の弧線を施す。沈線内に押し状刺突を施す。1201は外面に隆帯による渦巻文と縦位の沈線を施す。1202は外面に隆帯による渦巻文と綾杉状の沈線を施す。1203は縦位の多条沈線を施した外面に先端がT字状の隆帯を縦に貼付する。1204は縄文地の外面に綾杉状の沈線を施す。1205~1211はC群2a類である。1205・1211は縄文地の外面にリボン状突帯が巡る。1206は外面の口縁部が無文で、頸部にリボン状突帯と半截竹管状施文具による平行沈線が巡る。1207は外面の口縁部が無文で、頸部にリボン状突帯と半截竹管状施文具による平行沈線と刺突列が巡る。1208は外面の口縁部が無文で、頸部にリボン状突帯が巡る。突帯より下に縄文を施す。1209は外面にリボン状突帯が巡る。突帯より下に縄文を施す。1210は無文の外面に他のものより細いリボン状突帯が巡る。内面に指頭圧痕が残る。1212はC群2b類で縄文地の外面に低い隆帯が巡る。1213はC群2類で外面に押し状刺突のある縦位の隆帯と平行沈線を施す。1214~1214はC群3a2類で外面に半隆起線文によりクランク状に区画し、区画内に格子目文を施す。1215・1216はC群3b1類である。1215は外面に半隆起線文と楔形刻目文を施す。1216は外面に半隆起線文と縦位に羽状縄文を施す。1217・1218はC群3b2類である。1217は口唇部と外面に刻目のある隆帯と隆帯脇の沈線による渦巻文と横位区画を施し、隆帯より下に沈線による渦巻文を施す。1218は外面にクランク状の隆帯や沈線を施す。1219・1220はC群3b3類である。1219は外面に刻目のある隆帯と太い半隆起線を施す。1220は外面に櫛歯状刺突のある隆帯と沈線を施す。1221はC群3c類で口縁は波状で外面が肥厚する。外面に隆帯による横位区画を施し、区画内に縦位2条単位の隆帯を貼付する。地文として縄文を施す。1222・1223はC群4a類である。1222は外面に連続爪形文のある隆帯で横位区画し、区画内に斜行の半隆起線文を施す。1223は外面に半截竹管状施文具による幅広い連続爪形文を横位に施す。1225はC群4b類で口唇部に小突起が付く。外面に小突起から垂下する縦位の隆帯と横位に連続刺突を4列施す。1226はC群5a類で外面に横位の連続爪形文を施す。1227はC群7類で外面は縄文地で口唇部に2本1単位の小突起が付く。1228はC群8類で口縁の内面は肥厚する。外面は無文で横方向のナゲ調整を施す。1229・1230はC群9類で胴部の外面は無文である。平底の底部外面に網代痕が残る。1231・1232はC群10類の浅鉢である。1231は外面に横位の半隆起線文を1条施す。1232は外面に渦巻状の隆帯と半隆起線文を施す。1233・1234はC群11類である。1233は台付鉢の脚部で外面に沈線が巡る。1234は台坏鉢で外面の口縁に沿って連続刺突が巡る。1235はC群12類である。1235は有孔罎付土器で外面に眼鏡状突起とこれに沿う平行沈線を施す。穴は3箇所認められる。

## 2 土製品 (図340)

1236は土偶である。顔部分のみで他は欠損する。1237は耳栓で側面に指頭圧痕が残る。1238は土製円盤で側面を丸く整形している。

## 3 弥生土器 (図340)

1239は壺の口縁部分で外面に櫛歯状施文具による波状文を施す。

## 4 灰釉陶器 (図340)

1240は皿である。内面と外面の高台部分に判読不明の墨書が残る。

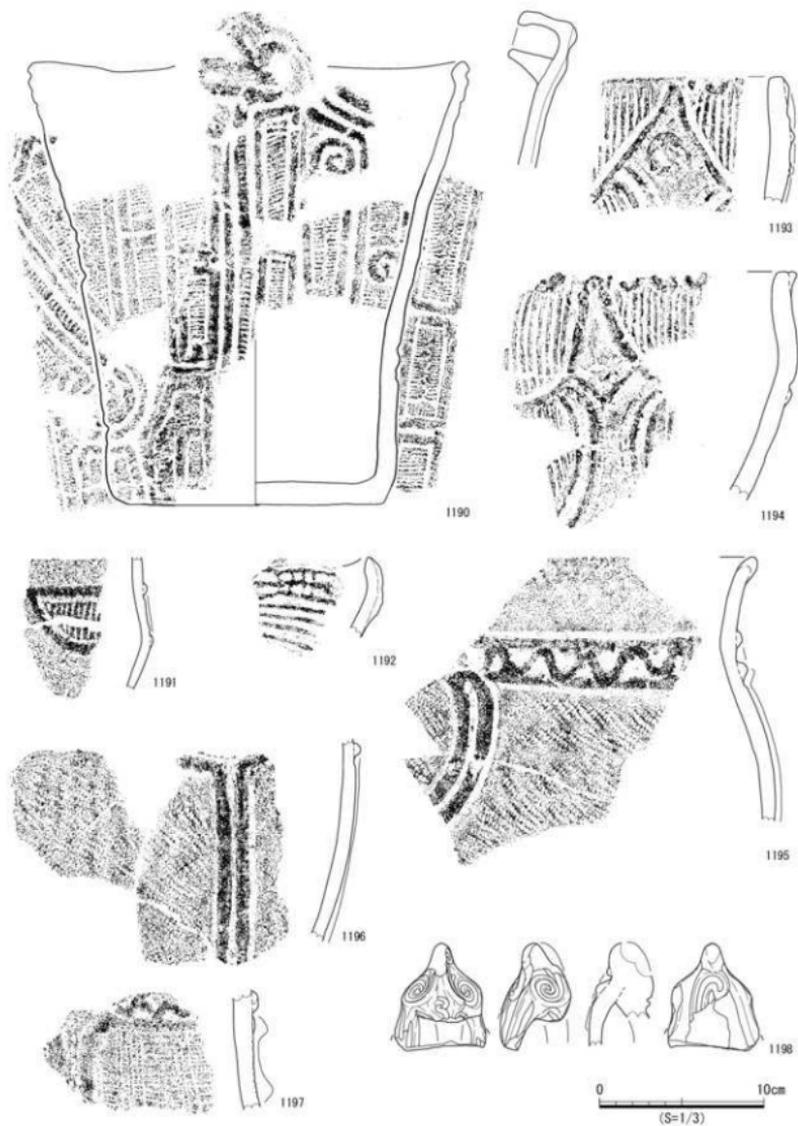


图 337 遺構外出土遺物 (12)

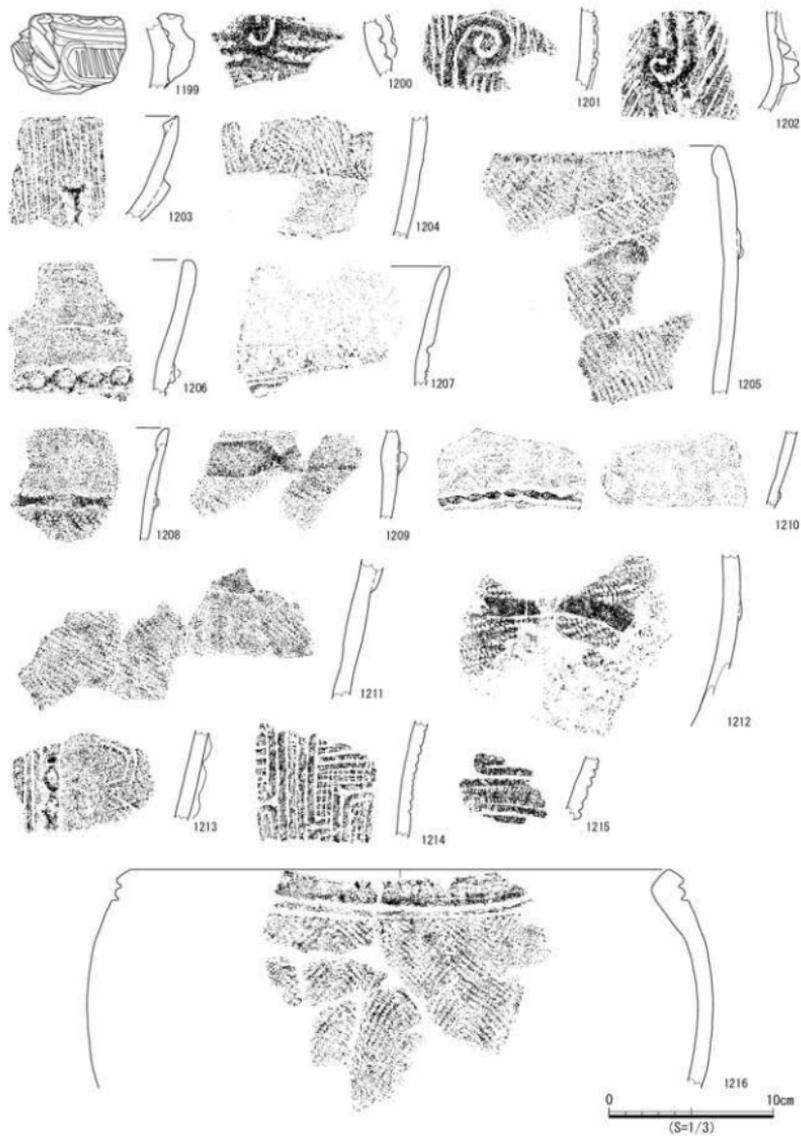


図 338 遺構外出土遺物 (13)

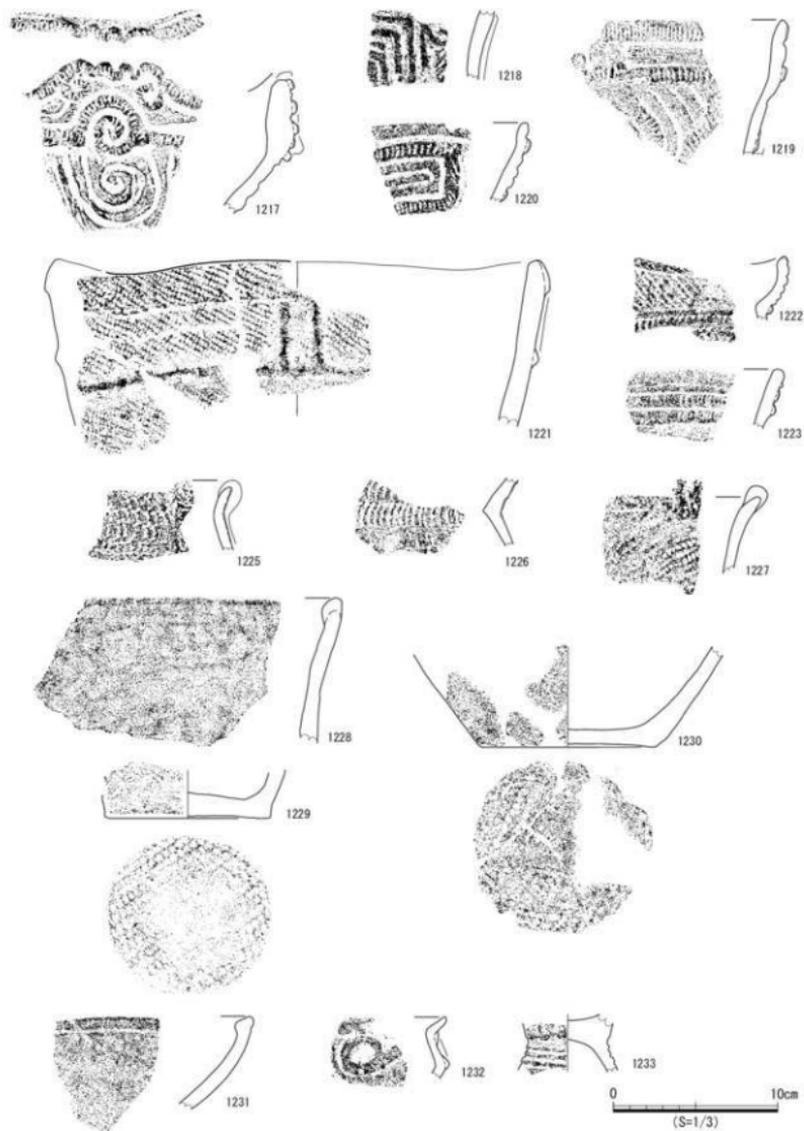


图 339 遺構外出土遺物 (14)

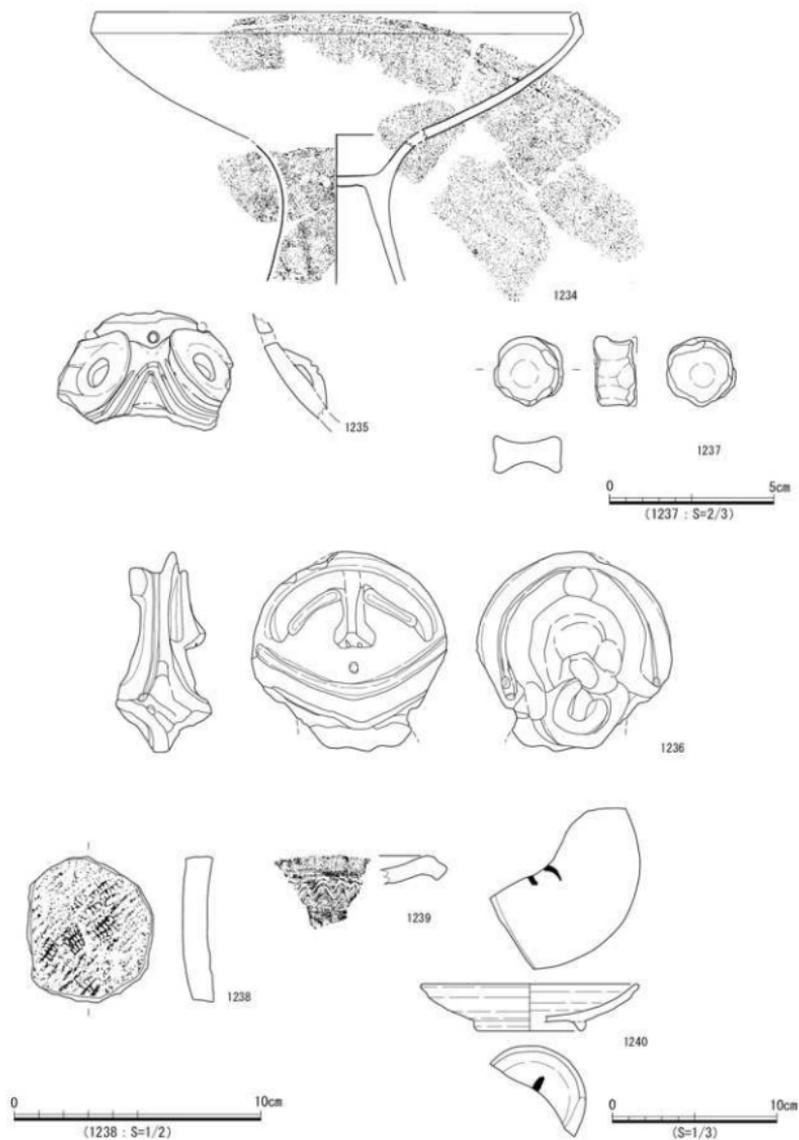


図 340 遺構外出土遺物 (15)